

面白寄合話

○面白寄合話
毎月五日出版。一冊定價八錢。五冊前金卅六錢
十冊前金六拾八錢。全國郵税一冊一錢ツ、



◎此面白寄合話の表題の如く總て古人今人よ抱
けず其當時の一茶話よ過ぎざるものと雖も
或ハ可笑味あり或ハ悟道教訓勸善懲惡の筋よ
因り見るよ隨ひ聞くと隨ひ又得る(原稿)よ隨
ふて録すものなれば叢談の目的鼻はだ廣くし
て毎會如何もの頭はれ出るやを圖り知る可らざるハ我日本三千六萬百人の兄弟
居ながら又して其思ひ按ずる言を述べ廣げ又聞き集むるの主義なればなり然れば
よや其各自既よ按じ或ハ之を他よ發言せんと欲する事ハ順次この叢談よ載せ又他
の心意話説をも見聞して更よ思ひ合する事ハ或ハ十人計れハ十種百人寄れば
百類よ違ふ所のものよ感と若しくハ一駁進激杯も皆是會話よ要する所の功能よて
業既よ西洋文明の國よハ専ら中等社會よ流行するの書物なり故よ今之を撰し採て
以て此一書冊よ編むコト寄合話の名る所以なり乞ふ諸君ヨます一雲願を賜へ

寄合話ノ口上 菊亭 香水 述
諸君合度シテ申上ケ奉ルハ。敝社義。癸
キヨ亞米利州ヨリ。舶來シタル話ノ種
タラ。種子ヲ購。詞ノ林ニ播シ處。忽ニ
シテ新芽ヲ生シ。忽ニシテ大樹トナリ。忽
ニシテ叢ヲ着ケ。忽ニシテ花ヲ發キ。燦然
爛熳。シテ大ニ江湖諸君ノ。喝采ヲ辱フシ
來リシガ實ニ俚諺ニモ謂ヘルガ如ク。文
ノ林ノ其中デモ。高キ梢ハ吹ク風ノ。自然
ト當リモ劇シクシテ。不幸停止ノ嵐ニ倒
レリ。此ニ於テカ。愛願セラレシ。江湖數

萬ノ諸君子ヨリハ。其ヲ傷マルルト同
ク又。早ノ右等ノ花木ニ次グ可キ。種子ヲ
播ケヨト頻リノ催促。ナレバ諸君モ知ラ
ル。如ク。敝社固ヨリ滑稽ヲ主義トシ。諸
君ニ應ズル一課ニ於テモ。他ニ着手ノ出
板多テ妙竹ノ。七偏人ヤラ。八笑人ヤラ。和
台人ヤラ。浮世ノ人情種々雜多。有ルガ中
デモ。泉社ハ最モ面白ト思考ヲ擇リタル寄
合談古今ノ茶話ヤラ。世ノ中ノ短所ヲ探
リテ勸善懲惡。共ニ具備ル一小冊子。何卒
初メニ變ラセ給ハ。テ。尙ホ陸續ト御愛願
ノ程。偏ニ願ヒ奉ルト萬字堂ノ主人ニ代
ツテ其多ノ口上左様ヲ。チヨ。チヨ。チヨ。チヨ

公 聞 の 話

○警視廳號外御達

其社面白奇聞話のたね自今發行停止候事
但第廿五號以下未配賦分發行差止候事

明治十六年三月七日警視總監榊山資紀

右の嚴命に依り謹んで停刊と致し底で

檢事の告訴となり京橋警察署より、忽

然御出張と云ふ場合で製本未配賦部分

貳百三十二部へ先ね取上夫から裁判所

よ恐るゝ出頭す茲に於て判事の尋問

あり被告人神田國藏の申立あり檢事の

告る所あり弁護人武藤直中が書肆稻田

佐兵衛發兌の造化機論を引証せし申立
もわりしと歎云ふ然れども當日の一般
傍聴と禁せられたるゆゑ探訪長の於山
走海も遂に其席へ入ると得ずして戻り
ました次第に付き其言柄の略し

裁判官渡書

東京府神田區蠅蠅町十四番地平民

京橋區木挽町壹丁目六番地

萬字堂假編輯長

被告人 神田 國 藏

被告神田國藏は於て明治十六年三月五日

の出版に係る面白奇聞話之種と唱ふる冊
子第二十五號の江戸の新聞欄内へ長悦大
陰莖と題せる文詞を掲げ頗る猥褻に涉り
風俗を害する圖書を挿入して之を販賣し
たる事實の該冊子を以て之が充分の証憑
たりとす其所爲たる刑法第二百五十九條
よ該當するを以て同條に據り罰金拾五圓
よ處するもの也
但押收し置く該冊子の刑法第四十三條
よ照し之を沒收す
東京輕罪裁判所に於て檢事補大竹長壽立
會宣告す
明治十六年 判事 補 葛 葉 正 道
三月十五日 書記 塚 元 佐 義

ト云ふ完結でありましたが實はハヤ編輯
の粗忽千力飛だ見底ないと思ひ違ひにて
餘様な原稿のヨリ、致しました併年ら
萬字堂出版の刑法對照を開て見ると佛國
の刑法でハ十六フランクより少なからず
五百フランクより多からざる罰金で然上
一月より少なからず一年より多からざる
禁錮云々と在て即は是が日本の刑法第
貳百五十九條に當るものだと書てあり
ましたシテ目れバマア、軽く濟で兎も
角もかの出版言多と思ひますが當編の極
々有難身のある所とお聞に入て於て次號
からの又江戸の新聞で素的滅法界大とな
事實を顯し升が決して御認体と人柄
よの障りません心得で實地の景況の畫も
挿紳ゆゑ其お積りで猶御高評願ハ升

古今佛説 其の日暮の大曹上

○中將姫



さて諸君よ愚僧が今日お世せ申すの餘の義ならず、近來世は話の種てふもの出来て至極益よある言も少からぬ様じやが、あア多ひ中、の大品、クツも亦ちらく見る様じや併し、くづくづとして、ア放ッて置きま、底で少し、實のわりさうあ、ッより徐



くだ、々、おきながら、聊さか違ふ所を愚僧が演説致すのである。一同「あア——」

（サアこれから詰の廿二號中よある、因縁の件よ取り掛る。は華經八卷二十八品の内で第廿五品即ち普門品よ曰く、若有女人、散欲求男、禮拜供養、觀世音菩薩、便生福徳智恵之男、若欲求女、便生端正有相之女、宿植徳本、衆人愛敬云々）

とありますナ。抑此法華經の題目を天竺での薩達摩芬陀利迦素多藍と讀む是を

漢語での薩を妙と翻し、達摩を法と翻し、芬陀利伽と述華と翻し、素多藍を經と翻す底で、妙法蓮華經ナリ。一同「あア——」又觀世音の天竺で、あなはろきていせいと申す。一同「あア——」ム「ア、これサ南無共何共云ぬが宜と云ふでないが無暗よ然う南無々々と大聲で驚鳴て、却ッて聴聞も出来まいし、又演説も致し、悪いから昔風の南無の些加減して、貰ひまじよ、サテ此觀世音の觀の字、見るとも聞くと、思ひ遣る共、觀み即ち觀世音と、一觀世音と翻すから我々凡人が此觀音の名號を唱ふれば

其音と聞玉ひて我々を救はせ玉ふ故よ是即ち觀世音。一同「なア」（オットまた）譬へば親が前へ往くのを後より子、其親を呼ぶ時、其聲を聞て振り歸り、我子をみて、金坊敷とかヤ、ソちやん坊敷とか云様よ愛し憐れむ、親の常情でありませう。觀音も亦其名號を唱ふる音と聞き玉ふ、觀じて慈悲の眼と垂れ衆生を救ひ玉ふ故よ觀世音と社稱し奉まつる。而して普門品と云ふ、觀音の三十三身よ御影と現し玉ふて衆生の機よ應じ、緣よ隨ッて普く一切衆生を利益し玉ふ故よ、示爾

用一賢相一開十普門一無所障礙
 故稱「普門」云々」とあり先づ是等の事ハ此
 所で摘んだだけにして置ませう。底で
 前より讀上た普門品の内へ便はち福徳智慧
 の男を生せんトあるハ善男の子をほし
 と思つて觀音を信心すれハ其誓願は隨が
 ひ菩薩感應ましまして福徳智慧之男子ト
 授け玉ふ。鬼は角男子ハ福と智と此二ツ
 が備へらんけりやア國の爲め家の爲又萬
 民の爲も成るやで無い。ソレ福あれハ
 高位高官より昇る事も出來智あれハ世も名
 聞を博くと人皆喜んで敬ふ。なれども若

し愚昧な子を生む時ハ實に此世も益なく
 眞のこれが俗に喰つぶしと云ふ者であり
 ます。頃日西釋雜纂と云ふ書を見るよ羅
 馬國王泰達士の晝も夜も善事を行ふを怠
 らず必らず一ツ宛ハ大小とも善事と
 爲すと云ふ。若し爲さぬ時があれハ後悔し
 て嗟々我一日を失ふて仕舞し迎歡息せし
 こともわりとかや。既に此通り我身よ於
 て朝より暮に至り暮より朝に至るまで一
 日一夜一時一刻一念の時も善事を行ふ
 の念慮を去らず。神を敬ひ佛を信する時
 ハ惡魔と降伏し家と、なふて親族和合す

る。左すれハ父母へ孝行も出來る。父母よ
 孝行を爲す人の必らず善事の爲ハ手足
 を勞することも厭はぬ者である。醫へハ
 官員の階級で之を申さハ等外より本官即
 ちはち判任官より判任より奏任官より昇り
 奏任より勅任官より昇り勅任又最高官よ迄
 も昇進するハ貧乏人が金満家よ成る様な
 者で其元根ハ皆善事と積より外に無い。故
 り此様なる善男の子がほしいと云ふのサ
 又端正有田之女と云ふとある其端止と
 端ハ正也正ハ政也と云つて即ち端止
 の二字ハ重て麗しと訓又或ハいたしい

とも訓六根具足して。像貌のうるハしき
 を云ふ也。此貌と相と祿と具ハる事が肝
 要で端正と云ふハ人より寵愛を招き又相
 ハ祿と人の敬と招く故ハ人よ愛敬せらる
 、程の愛を帯て居れハ徳となり愛されて
 敬まハる、故ハ相となる。信し徳之本と
 植てとあるハ前世よ三寶を信じ三歸五戒
 を受け善事と作り行なつた其因縁よ依て
 現世よ端正有相よして福祿具ハつた女よ
 生れて人よ愛敬せらる、と云ふ。是よ依
 て女の子を求めんと思は、一心よ觀世音
 と念じ奉まつるが善。左とれば感應まし

まして前世の善功を作り行なふた端正有
相の女の子を授け玉ふもので五座る。今
茲よ其一例を舉げ、聖徳太子也。太子の
正又觀音の化身にて我日本へ佛法を弘め
一切衆生を利益し玉ふが爲め又生る。御
父の川田天皇御母の橘の豐日姫と在せら
る。金光三年正月元日の夜豐日姫の初夢よ
金色の僧が形を現はして言曰。「我家の
西方に在り且汝が胎内は宿ん。返り於て
豐日姫曰「我胎の不淨なり」トお答ありし
は金色の僧の「我の淨穢を嫌ふ者ならず
人間ありて衆生と許せせんが爲なり」

ト底で豐日姫ヲヤ本途も然なら濟ない
よ(キツトコリや戯言)兎も角もとうつゝ
ながら仰せられた其時より御懷妊在らせ
られて月垂り逐る馬屋邊と云ふ所にて太
子を生せ玉ふ故に之を馬屋邊の王子とい
申し奉まつる。即ち聖徳太子是なり。太
子御成十二才時百濟國の日羅聖人が來朝
して太子御對顔の節(留置救世觀音云
々)と唱へて禮拜致されたとあり。又南都
東大寺の良辨僧止の江州志賀の里の百濟
氏に生れたり。其母が觀音を祈つて設け
たる人あるが二歳の時恐は懼まれたれど

義淵僧正の爲に救はれ追々成長の後聖武
天皇の御歸依も因て。今の東大寺も大佛
と建立せし程よて其學徳高僧なる事ハ誰
知らん者ハ無い。ア、御ぐべく觀音の妙
智力と授け玉ふ事や。其れ耳ならず世の
中よ貴き人賢き人の皆觀世音の賜ものな
りとしてあります。世よ金持の人があれ
ば貧乏人もあり。長壽する人があれば短
命の人もあり。病身の人があれば健康な
る人もあり。盛なる人があれば衰る人も
あり。樂しむ人あれば苦しむ人あり。是
等の何れより來つて樂む人や苦しむ人が有

○歎
る通り前世も皆善因が持てある故其れが
現世で果と結び。前世的に因が持てあ
る故其れが現世で悪い果と結ぶのじや。
善因善果惡因惡果の爲す所。譬へて云は
ば魚が水中に居る様なもので昔も今も水
の中よ生れて水の中よ活て居るで。人間
も亦此如く因果よ生れ因果よ死ぬ。過去
も因果現世も因果未來も因果この因果よ
り因果へ通つて始終因果の中よ住む者ゆ
ゑ智者でも學者でも力無雙人の人でも人
間の力を以て之を移し易る事ハ出来ぬ。

此因果の道理で是を思へば善事を油断な
く積ねばならぬ事の愚僧か云はずと知れ
たこと。古語云「云ずや一従、善如、登
従、惡如、崩」ト銘々が善心と一度退
去ば忽ち惡心生ず。道の高き事一尺の魔
の高き事一丈と云ふから何でも惡事と負
けぬ様善事より勇み進んで行ふが宜しい。
此善惡の天地を感動させるゆゑ必らず應
答がある。孟子の所謂「禍福無不、自
己求之者」とある通り天地は私心なく物
又因て物と付ふと云ふ様なものゆゑ福の
善は因て生じ禍ひの惡は因て生ずる事を

忘れず。又神や佛と理も解らずして無茶
苦茶と思つて居る者の其信仰不信仰と拘
らず皆凡人中の凡人あつてからかんとして
○○○○○○○○○○で居る者で五座る。
之を俗に亞戲螺虛魯凡と云ふ。サテ底で
人皇四十五代ト云ふゆだが餘り長談義
よ成て外の話が聞えるゆへ後席は讓つ
て猶又お聞せ申します。一輪の音一サーン
編的曰サテ是より中將卿の段始まアリ
トアー様と云所の~~...~~でドコドンです
から當日又お早く娛散鏡下才増お賽銭



流語 (おとしばなし)

○月に雲 覆ひ隠して影園さ愛身に心兩
親が歎きを跡に往空の胸の曇りも晴やら
ず暗に乾かぬ初雨濡た二人りが中田甫
狭き心の若い同士互ひに手に手を鶏が鳴
く吾妻の橋を見修めと思へバソツト川風
の襟元寒く枕橋木萱も眠る廿三つ又時刻
も恰度吉原の大引過てまなくと死ぬる
臨終の水の面流は響く鐘の音のかねて覺
悟の玄ながらも此世の名残惜まれて云ひ
甲斐もなき縁言と返すくも後の世の未
來とやらで諸共に蓮の臺の新川帯必らず

忘れて下さんすな「ナンノ忘れて能もの
か人目に懸らば恥の恥覺悟のよいか「南
無阿彌陀佛」と哀れ二人の水中へ筋斗切
て飛込んとする此方より一人の男「兩人
待た短見まいと兩手に確と捕へつ、「お
前達ハマア掛替のねへ貴重い命とむざと
捨ると云事よハ必定深へ譯も有うが先己
が云事熟聞て暫く命と預けなせへナニ今
木蔭で聞て居れば死んで未來で添ふとや
ら蓮の臺で世帯持とか。そりやア盲人の
眼で陀目と云もんだ何故と云のに其覺悟
での蓮の臺と名をつけて極樂浄土へ住居

して樂しまふといふ了簡だらうがよくマ
 ア積つひて見るがい、万よろ一願ねがひも叶かなつてから
 其極樂そのごくらくへ行くよりしる此所このところより昔むかしから反へま
 成男子むすこと云ふ事有ことありて女をんなの忽たちち男おとこと成なると
 云ふ話はなしがあつて見みれば何程いくら淨土じゆつどへ往いつた
 とて鯨節かつはしの角つの突つ合あいで少せこし情算せいざんが違ちがふだ
 らうマア極樂ごくらくへ行く事ことの止とまなせへ〜
 エ、左様さやうなら五ご異見いけんも就つまして極樂ごくらくを止と
 と致いたし地獄ぢごくの方かたへ参まゐりませう「是これサ地獄ぢごく
 も止やめが宜よからう」「トハ又何故また何でござります
 「されバサ地獄ぢごくも此節このせき折せり々りお手て入れが有あ
 るといふから

横濱 加藤行永

○モシ御隠居ごいんきよさん 貴公あなたの最もう外出そとでを爲な
 るのも御太儀ごたいぎだとして毎日まいにち碁碁はお客きやく様さま計はかり
 をお招まねひ遊あそびして碁盤碁ばんと首くびツツ曳ひひ飛とだ宜よ
 お恩おんみでござりますが餘あんり然さう朝あさから晩ばんま
 でお遊あそばすと却かえつてお健けん壯さうのお毒どくでこ
 ざりますから徐そく々く陽氣やうきもよく成なつて参まゐりま
 したし梅うめも盛さかりだと申まうす事ことでござります
 ゆゑ些ちぶら〜とお出で掛かけ遊あそばしたら宜よし
 うござりませう「ア、お前まへが能よく度よく々々云いつて
 くれるが是この遊あそびの止とまられぬよ」「ハエお
 止遊とばされぬといふより仔細しじゆでもござり

外ほかか「有あるも〜ソレ老おいてハ碁碁も隨たかへだ
 石州せきしう 堂どう々々 堂どう
 ○番頭ばんとうさん 何かなにかガの宜よい着類せきりゆうを見みせ
 て貰もらひたいがイヤ其堅編そのかたじまなぞの餘あまり通常つうじょう
 で面白おもしろくない少せこし風ふうは變かつた編編が宜よしい
 ア、ろうさなア此等こゝろが宜よから併いっしてこれの
 滅法めつぽう界かいは掛かけ友ともが輕かろい様やうだが何如いか致いたした物もの
 じやなア「それハ且たんな那その其善そのぜんで五座ございます
 「何故なぜサ〜」「デモ論語ろんごの中うちに(思無邪しむじや)
 重おもひ横編よこしま無なしトありました
 豊後ぶんご 直入すぐり郡内ぐんない
 ○百樂ひやくらくは長ちやうたる物ものを飲過のみごとし疾痼やくごもとむる

さても氣きれ毒どく トハこれ一休いっしゆ禪師ぜんじハ一首いっしゆ
 なれハ酒さけなど飲のんで浮うき〜さんせ氣きから
 病やまひが發おこるわ〜いな杯さかと云いふ頗おとぶる意氣いき
 な所ところに至いたると遂飲過ついののすぎる方ほうも趣向おもむくが多いテ
 僕ぼくは親分おやぶん(でも無ないい)吉田よしかは兼好けんこうが云いれ
 た通酒好とおさけのこまざらん男おとこハ偶たまは樂たのしみよ的無あてな
 き如ごとしと實じつに秀いじやア吐なせんかダカテ其灣そのわん
 輩上はいじやう戸耐流とにりゅうの爲ためよ口くちと開あかざるを給たまはる
 云いざるをゑざる譯わけで酒無さけなしくの何なんれ櫻さくらも尻へ
 此河童このかづな既すでに汝陽にょやうと云いふ唐からは漢固陋かんころう者もの爺やんち
 やん〜親父おやぢ杯さかハ飯令いひ較替くらかへしても是非ぜいひフ
 ラッコは底そこを叩たたいて暮くらしてへと云いつた位くら

奇強穴だ何れ其飲み過したからとて病癩を醸してお玉埋こぼしがあるもれか今本草綱目も依で其主活を云へば米酒の藥行をやらし百邪惡毒れ氣を殺す。また血脈を通じ。腸胃を厚くし。皮膚を潤はし濕氣を散し。憂ひを消し。勇氣を發し。言を宣。意を暢との藏器れ説。脾氣と養なひ肝を扶け。風と除き。氣を下すと。孟洸が説ところ。馬肉桐油れ毒を解し丹石發動諸病を治す。熱して之を飲め。其はた善と時珍も云へり。されば佛も酒を賞て。甘露れ良藥と宣ひ。コソ、灣洲強飲國れ茶塵

翁が口尖を尖らかした様な熱を發ても其様な馬鹿にやア構ふなど云て敵手なる論客が無へ屁鋒埋屈の發し玉へ。律古れ時珍などれ陳腐ツた熱潤れ説と良氣よなツて言草よそるれ。大きな了簡違ひ目今そんな不開化があるもんか。イヤこりやア失敬極まる夫じやア近來で云ふが元徳川家侍醫々學教頭蘭疇松本良順今の陸軍々醫總監正五位勳二等松本順大先生が會て著へした養生法卷之上二十六丁に裏葉よ(酒れ事よしと云ん所なし然れ禁じ難ければ上酒のいさ、か許すべし成た

け冷酒をれみ習ふべし。蒸酒のことと害ありと云ふ今時通例れ酒の灰汁を以ておはしたるが多しこれら心して飲可らず中汲ちど尤も害あり貝原の養生訓も冷酒の痰を集め胃を損ふと云へる。非あり丹溪が冷酒とよしといへるこそおたれるなり。ト書てあつたの。僕の時鐘も染込でぬた故覺て居るもの、其實松本先生今日何方でも冷酒の召上らず殊に權妻の所などで。コソお何事と熱くなのかんのとやらかされるとやらソソ日本一醫師の大關總頭取西洋醫學の元祖とも稱される

か方でさへ然云場合で見れば素より僕が云ふ時珍などの説も無理も有るめへが「どころが夫ア何か底よ故があつての事。で一日冷が宜と云ツて置て態々熱潤を飲むよの抑々「エ、次第ありサ」な、何と「ソソ松本過きの熱酒忘る、と」
 横濱 灣々 堂
 ○オヤ諸君もお揃ひで。イヤサ迂生も直京橋邊よ居ながら該奇聞の未初投書です。が子過日も萬字堂の主人が來車で足下も様其塾よ馬鹿理居て不才出茶ア底の毒だから些お酒でも弄でブウ(でいさ)

浮々しおがら此奇聞へでも来て大人等も
 交際が宜いヨ夫も亦身の脩行で話の稽古
 よも成る者だからと説諭でしたゆゑ小生
 も夫蛇ノ當編から此紙上へお蛇問よ出様
 だが概容何様言を發るん狗ト云ふと所翁
 居士がよ別よ變つた事ハ無いヨ只餘り
 人のお氣が付かない様な事を探り出て投
 書が能のサとお云ひだから夫ぢやア迎も
 僕等の様な筆不調法が」と云ふと又所翁
 居士がサアそこが交際どころだいなトこ
 んち付でよら目てサ。まアよくらしい
 ぢやア有ませんか。然而身の脩行でもあ

らうかと思ひ直し先づ先生方尾尾ノ振
 ら下りよ参りました次からの毎號余白よ
 間入升ゆゑ何分宜しく。干時初て投書ン
 ですから何歟土産をト居ッて神田のおば
 さんでいなかつた。長よ相談を掛ら夫
 よも及ばねへ鈍手拭の一筆も染るが宜と
 お言だから今日の態ツとヲホ、ハ、ハ、
 初めから何足らぬ言を云ふよりも
 不言ハ川言遙増らん 關出や小五
 ○諸君よ臆を外させる ト云ふ様な面白
 奇聞ハ無い歟なアと一夕書齋座し古今
 の圖書を左右よし(ナインカント)四角張

を問よして調べた所が僅こまだけ詩家
 有りません後の諸君よ頼まうか僕が續々
 高工か何と書家ろをの夫として先づ
 ○皆川から水と運びナ此火事の
 ○近來小石川邊でお化が出るよ
 ○依頼さしました此大三十日の
 ○政府でハイ梁川知んが減税を
 ○目が大鐘だから何でモ一早や
 ○近頼ハ行政部と分ちが附いた
 ○何頃大槻さんが出ますかチー
 ○昔時の法よ改竄するハ長ヲと
 ○酒肴がモ一やめたヨ佐藤氣ハ

○管係の無いものハソレ何よも 茶山
 ○僕が松尾察して之をさかあよ 東萊
 大坂 蝶舞園 睡猫
 武修天狗譚
 ○ 横濱 澤野穂垂 戯稿
 今ハ昔舊幕府は頃ハ浪人者。當時ハ東京
 此或裏屋よ仕居常よ鞍馬大僧正も三舍を
 遊る程は面として自稱天狗ハ鼻高々と自
 慢譚を觸歩行けるが。或夜飛多屋喜作と
 云者此家へぶらりと遊びよ來たりしよ。
 主人喜作も徒然は餘り相手欲やと待機な
 きバ此ハ幸ひと飛で出「イヨ一お珍らし

棋園 六々 山陽 星岩 詩佛 支峯 盤溪 三洲 一齊

い先生。先ズ、スイツト此方へお通り下
さい。時、先生杯の永の年月諸國變歴な
されしと聞及んで居りましたが必定珍奇
なお譚しが澤山溜ッて有りませうが今夜
の恰度機もよし是非聽問致し度し。就て
いか禮よお茶を献じ目お茶菓子も散財し
やせう。浪「成程拙者が變歴中の奇談を
開度と云事か十所望を辭むも益なけれバ
身共が山林幽國で武邊の勇猛を奮ひし
事。又妖怪變化よ出遇て艱難辛苦をなせ
し始終を聊か此所よ陳述せん。喜「テッ先
先生が本途の五姓名は何とヤしやす。浪「

先生の名曰宮木武三四の末葉蛇よ因て
十六武藏と相名乗り目分免許の奥儀を極
めし三刀流無二の達人喜「夫でハ彼の
太刀を加へて三刀流の立腎かねオツト是
ハ失敬所で跡ハ。浪「貴様の様に混てハ話
しが出来ぬ哩。マア黙止て聞給へ。余ハ
老冠者から劍道修行よ熱望ありて両親の
許容と受け。夫より急又旅拵への装行に
掛り愈々發足と云時の扮体と貴様に目せ
て遣りたかつた。先其概容を云へバ黒綸
子石餅五所紋の小袖よ鼠純子の立付
袴切緒の草鞋確然と穿て。白縮緬の上帯

をキリ、と前で結んで。喜「後で締てまの
た所へいろはと書て。浪「エ、夫ハ手鞠唄
だッ。底で頭の髪を切下げ月代を伸し。腰
にハ朱鞘の大小を帯挟み。右手よハ鉄扇
を携へ。左手にハ握拳。喜「三銅又負て急
いで参りませう。浪「エ、腕耳夫の暗號で
ハあいの。喜「ハハなる程夫唐。浪「白と紫
色の手綱染の小風呂敷を片潔よ脊負。喜「
何も舶來品で俗よ唐縮と云やつでせう。浪
「馬鹿な事を云きせへ以前の事だから唐
縮緬杯ハ有るものか。喜「ゴ、御道理千方
浪「先武者修行の事なれば何國を當と云

でも無れと先西國と心ざし吉日を撰んで
江戸を立出東海道へ。喜「たしか日本橋が
ふり出いと心得ました。浪「エ、双六の話
しでハ無いわへ先品川を越て鈴ヶ森へと
差掛り。喜「スルトお所刑場の前に悪者が
居てガンパンくくと云紋切形か子。浪「エ
、夫ハ劇場でする白井權ハの狂言だッ。喜
「五月蠅男だ。何だ夫ハ此方で云言句だ
少し辛抱して聞て居させへ其夜ハまづ川
崎で泊り翌日藤澤の驛よ到りしが日も未
だ高く殊に今宵ハ此宿よ泊る心得なれば
静光寺の門内よ入りしが。抑々當寺ハ開

山一逼上人より代々諸國を遊行爲給ふ事
 と聞バ先本堂へ登り○那此を詠め○夫方
 小栗殿の墓前よ立寄り見るよ十人の殿原
 が墳墓の恰も搔餅の儼たのも宜敷といふ
 石塔の數と拜する中○疾日も西山は傾く
 頃よ及びし故門外へ出で好宿を求めんと表
 の方を見バ南無三寶○惣門へえや葬と閉
 て出入なき体に如何共せん術なく○エ、
 マ、ヨ（こ）も云なかつたが（今宵此所よ一
 泊せずんば有べがらず斯る場合ハ武者修
 行の望む所○仮令野宿たり共恐れざらん
 やと堂の片隅へ忍び上り喜一エ、先生行

く云て其實旅籠賃と蹴出す杯の筭當ハ至
 極御趣向浪一是さ失敬を事をいふ男だ
 是等ハ修行者の有内だワナ喜一らんナア
 ル底も有バ蓋も有で夫から浪一臂を枕よ
 一夜明さんと横に成ハ旅の勞れにグツス
 リ眠り○前後の事も知すよある中夜ハ漸
 次くハ更渡り本芽も眠る丑滿トモ思ふ
 頃目寤て見ハ此ハ如何に諷と吹來る風凄
 く喜一幽的でせうテ○先生ハ何處へハ逃
 奔すツた浪一逃る杯と云身性未諫の武士
 ならず○直ハ記直てツ身構なせば○ア一テ
 不思議やナ○人賓骨格賤しからざる立派

武士忽然として手枕の元よ立し故○扱
 ハ狐狸妖怪の變化大膽にも某生を欺誑さ
 んどの憎き曲者○乞正体を顯し異んど家
 住代傳所の友切丸の大刀をヒラリト喜
 一反古切丸の刀なら鳴の骨位ハ打けませ
 う○然も目貫ハ桐の羽子枚か乃至金ムク
 ロシの玉位が落で有やせう浪一イヤ困る
 男だ不様滅茶くハケチ付テア話が前
 後して譯が分ら無なるワナ○マア静よし
 て聞て居なさい○其時力の柄へ手を掛疾
 視居たるを彼武士ハ少しも騒ず物利かよ
 云けるやう扱貴殿の御不審に思召ハ五

道理千方又狐狸變化の者ハハなく○拙者
 打入て貴殿へ願ハ度儀が有ての事なり○
 お心静に一通りお聞下されサテ何を隠さ
 う我こそハ小栗判官が幽霊よて○开も貴
 殿の御入來こそ嬉しくハ貴殿へお話中
 別儀ハ非ず今より七十有餘年前文化年中
 東都兩國回向院にて我等夫婦が像なりと
 て開帳せし事ありしが○此我等が身よ
 取りてハ大いハ悦ばしき事あれ共只一つ
 残念なる譯と申すハ其砌門前に建たる開
 帳札よ小栗判官兼氏の像一昧○并に照手
 師の御影小栗判官が一刀三禮の作と筆太

は書て建たるを草葉の蔭より一見せしに
 我顔より火の出る心地して最も恥し。如
 何に死して此世に亡きなりとて餘りと申
 せば情をし。殊も我が名を葉氏と申さぬ
 事の鎌倉大双紙と五體なればける事。夫
 の扱置其時關東は於て凡馬前打物を採て
 の我等に肩と並ぶる者無りし程の勇士
 と云れし身か。いかに秘藏の照手成り迎
 女房の形を刻む。一刀は三度づ、禮拜せ
 しどの積りもも知れつらん。人立繁き
 兩國にて見人毎の口端は係り。扱ハ小栗
 と云る者の鼻の下のえらく長い男と見え

た。質にのろい侍士にて有しと諸人は弾
 指さる、何共遺憾し。然バ其汚名を
 し名譽を回復する手段の御座らぬかど態
 々願ひ罷り出たり。何卒是を話しのた
 ねとしし末の世までも恥辱を雪いで下
 され度く所と頼み入しと云かと思へバ
 其儘は小栗が闇の消失しけり。云ふ次第
 で跡ハ夜風の寒さ四方と見れば是なん
 宵は仮寐せし彼堂内の一夢なりサ喜「何
 だ夢々しい譚言だ」浪「イヤ〜其替り此
 跡ハ神變可思議の實説をお話し申さう先
 其件々の概略ハ○伊豆の國修善寺のおそ

ろしい怪談○駿河の國志太郡の山中桑の
 村よて數千年經し大蛇退治の豪傑譚○出
 羽の國古寺の因縁奇談○池鯉府在鳥頭村
 にて正徳年間奇怪なる大入道又出羽極々
 凄々怪談杯。まだ其他陸續面白い事を話
 して聞す。一「イヤ夫ハ一段〜何卒早
 く伺ひ度ガ。まア茶が憎度出たから一杯
 喫ッて始つて下さい。」サア夫から「イヤ
 サ其様無限で伺他から今日ハ是火よし
 て後談ハ又必らず次號に投て委細話さう
 きのふけふのかたりぐさ

○内義さんの角ハ亭主の角から

起る

倉田 藍江

爰にをくしお話しあり。或瓢近もの隣
 家の小兒の七つ八つなるをよびて。おま
 へハ父さんと母さんとどちらがこわい
 ぞやと問ふたら父さんがこわいと云ふよ
 。いや父さんより母さんの方がこわから
 うぞ。このあいだ父さんの留守におぢさ
 んが行きたら。えらい角をだしてゐたぞ。
 つひ笑談ははなしたるを子供ぞゝろよ大
 層おそれて家よかへり夜よなりても母さ
 んと寐のいやじやと父親の懐ろよいり
 ていねたるが。いかゞせしにや夜半よい

たりておどろき起いで母親の方へいりた
りしに母親もわかしく思ひつゝばういな
せにげて来りしやと問へば隣家のおぢさ
んが母さんへ父さんの留守にゑらい角を
出すと云たから夫がこわいゆゑよ父さん
の中へ入て寝たら父さんの方が大きな角
と生したゆゑ母さんの方へ逃て来たのだ
よト

狂句 (せんりう)

○上戸

一舛の徳利を杯と上戸酒落 曲舖小僧
借上戸酔て件のごとくなり をばな庵

腰抜の上戸と見て立る義士 南総花蝶

村上戸又杯横のさかひ論 同 如柳

上戸の助俗オイランを飲好り石巻夢史

上戸又滅たよ藏も建ぬあり 横濱小柯

車夫の跡引上戸またねだり 吉名齋

濁酒に酔上戸の泥の様 阿國頑子

亭主の上戸焼餅と女房やき 茶香堂主

餅を焼香ひよ上戸唯乞ひ かいろ

徳利と見れば上戸の莞爾笑 壽寶家

酒と聞き上戸尻いとゆが坐 灣々堂

○川柳乱題 仙臺 尾花菴變集

魂ひと交易笑唇眼も残り

鳴居迄観音まわりする蟻の ばか丸

題 もつと仲たりく

仲をする子供の春をば乳母が撫柳 川

二階から見る鏡のかけ遠し 魯泉

引合て手取る船屋が向ふ前 ばり丸

古人やなげたる 目覺志連變集

(忠臣藏役名見立)

○高野師直

四の字でも小頼四つゝの氣も掛す

○鷺坂伴内

大小も差れた様な取廻し

離れ掛た愛敬の茶の煮花
日曜の別當權を响りと見
居流の遣すの雨の眼唐降
朝比奈の而曉明の隈を引
松の愁いと花魁も成て知
相方が御意よ叶て笑下戸

前句付(まへくづけ)

○題 登る事かなく

釣合も日和もよくて風船の 貞水

眼の玉の飛出程よドル相場 獨香港

握られて寒暖計も暑も成り 壽山

小鯨の上手エノキを驅走り 梅糸

○顔世御前

御局の白縮緬の化粧がほ

○大星由良之助

威の親手ごたへのする封を切り

○加部彌兵衛

武士も鳥居を越すと白くなり

○斧九太夫

酒五升蛇か蚊と香だ様な事

○加古川本藏

雨の止うち傘さをねぎって居

○桃井若狭之助

昔から碁盤の躰の四角なり

○天川屋義兵衛

右々と麥から餅を出して言ひ

○寺岡平右衛門

鏡臺も驚が産だるたる蒔繪

○將軍家持公

束帯ののりの利たる姿なり

○斧定九郎

やつたうを些少覺えて斯の体

○天川屋伊吾

子分だち中平樂も云ひ習ひ

○腰元おがる

家賃より高い染賃着る女房

○國會 横濱 灣々 堂

無レ部、無レ部、氣、運、新。待他明

治廿三春。丈夫、愛、國、當、然、事。

吾亦晴州卒土民。

黨評 何卒王賦を大切よ(牛でも喰て)

立消のせぬ様蠟燭澤山でハ無平仄合法

○偶成 仙臺 矢痴櫻北八

向過二七年國會成。○廢、壓、制、

○零更。因、宜、意、蓄、貯、不、用。鯨

猶社會干物生。

黨評 コレ餘計を心配さッしやるナ

○鼻下長 横濱 右 峯

○本藏妻となせ

着て見やと母ハ俄ハ罷が生

○同く娘小浪

吸口ハ是程と云ふ道具なり

(以下次號)

○狂詩(さやらし)

○瓦徳氏 上田 勢陳翰

分福茶釜蓋動頻。果、名、頓、首、

三十春。矢徳考得蒸氣妙。瓦。

驚世界萬國人。

黨評 蒸瀛々々あわ瓦徳云小兒でも今

での知ッたが是迄よしたハ大した者サ

大鯨權妻把手行。小鰐隨後荐
 言裝。壽公鼻下三千丈。忽見通
 阿娜美娘。公倏蕩心。誕降領。願
 問從。鰐何者娘。權君察。嫉猜標
 角。曰御前何寢約忘。

どゞー

○ 仙臺 屋花庵變集

「お前の疝氣の礫の雪よ強く當れぬと
 いなす 朝寐坊

「初手の一つが炭團と見ゆる學校下りの
 雪礫 尾花家

「妙でグスナト扇子を腮にあてる素振

「妙でグス 朝寐坊

「宵の苦情を忘れた無理を又も卷出す茶
 碗酒 尾花家

「臣燧團布の牡丹の模様下から出したよ
 獅子頭 わしもや

「風の神ぢやと云る、ぬしに連添ふわた
 し山神 うしく

「積る恨もはや明方の雪に消たる義士の
 ひね 花守

「さめてしまつた浮氣の夢を今ぢや女房
 に捌卸し 尾花家

(以下次號)

○ 入都々逸

「横の愛相を眞實に思ひたはけな
 逢ふのろい奴 淺草其 永

「親のがねで極たる夫婦今さらいやと
 の腑慾な 麴曲 玄ばたふみ

「煎をて惚たが無理うなぞと油を
 かける夜着 兩國 吉名齋願子

「初手の互ひにとで知せ今の嬉し
 肌と肌 全 人

「あきらめ舛たよ何あきらめたあきらめ
 られぬと諦らた 雪窓 芳香

「親のつまと忍んだ深雪野でうき
 なし鳥 横濱 澤の 穂垂

「末のたどとて人を厭ひ愁いをしてし
 身をちま 西京 春園 笑花

「好た人なら否はど見たい毎夜嬉しいゆ
 計り 同 おいろ粹史

「泣はらすもお前のに這入ないの
 う怨しい 横濱 わんく堂

「親父の意見を聞うちやゆよ無が詰り
 でがさめる 石巻 塾友 夢史

「一座の人をよろしく忍び無理な首尾
 する奥二借 横濱 香 痴

「人の盗んだ其の對て今じや夜の目も寝ぬ苦勞 同 笹庭堂

「人忍んで出逢た事が今の憂き目と云るはじ 盛岡 睡蝶

「去年の冬からつひ咲初て人の目も立梅の花 播磨 一枝菴賞花

「何時か遠くに見初めたぬしの思ひ届ひて見りや近 ばか丸

「怖い親父の目玉を忍び川愛ひ元は身をやつす 吉原 緑屋 花文

「ぬしの元も恥さへ忘れ一重まぶらに惚込だ 五軒町 壽寶家

「親の手前と惚る、人よ氣兼玄ながらで知らす 越前堀 只一人

「惚さ慾かお前の容貌にふめる目にさへ粹がある きぶん

○同く乱題

「髪は銀杏よ結しておいて虫のついたも知らぬ親 石巻 整友 夢史

「廊の源氏名初音の鼓みさてもおづかよ舞ひ納め 下谷 不忍の雁

「撫ていちつて摩つてふいて入て寐せる茶の道具 同 人

「浮々勤めの苦界をぬけてぬしのお傍よ

沈みさい 播磨 一枝菴賞花

「披く玉章塞がる思ひ今日も逢れぬこのよより 尾張志樓登

「隣家同士の嬉しひ中も野暮な人目が遠くする 湯嶋 あい子

道化百人一首 石耳堂々十組

○朝鮮事件(前號の續き)

「公使遣げ暴徒散せし其後ハ

只有明の月ぞのこれる

「國王ハ彼れ此れ思ひ計らひて 憂きよ堪ぬハ派なりけり

「天地を動りす程の砲聲よ

山の奥よハ鹿ぞなくなる

「大院君支那捕れて今宵より 匪の暇さへつれ無けり

「大院君捕れて見れば韓地もて 憂と見し夜ぞ今ハ戀しき

「餓勞れ途方よくれし捨小舟

「漂ひて行衛も知らぬ悲さよ 霧立ち見る秋のゆふぐれ

「戦死者の後家方操守りつ、 身と盡してや戀わたるべき

「我兵を數多討れし怒りをバ

忍ぶる事のいれもぞすれ
「着飾りし日本錦のけなげさよ

濡れよぞぬれし色に髪らじ
「亡夫と慕ふ後家達泣々も

衣かたしき獨りかもねん
「討死をせし人々の妻の袖

人こそ知らぬ乾く間もなし
「糶もなく行衛も知らず漂びて

海夫の小舟の綱手かなしむ
「住馴れぬ支那のさびしき秋の夜よ

古郷さむくころもうつなり
「芦原の魂 見よと大太刀を

振り行く者の我身なりけり

「暴徒等の清水館は火を放ち

焼やもしほの身も焦しつゝ
「聞く毎に涙こぼるゝ事ばかり

世を思ふ故は物思ふ身の
「所々よ散る紅は染みたる手の跡の

流れもあへぬ紅葉ありけり
「落のびる王妃都を打見やり

猶恨めしきあさぼらけかな
「泳のつれづれの亡婦吊ふならん

我たつ袖は墨ぞめのそで
「暴動を企つ頃の川々の

御振を夏のあるしありけり

「訝しや尻押をする豚屋敷
唐喰れぬよみづくゝるとん

「國王と今朝の別れは憂りけん
曉ばかり憂きものいなし

「土民等も皆逃げ去りし戦争地
人こそ見へぬ秋へ来よけり

「神功の尊を征伐し給ふの
猶あまらある昔ありけり

以上一百首畢

堂々士隠しんで日右百人首の予が韓地
旅行の際親しく見聞せし所を以て戯れ

よ作りしものなれども半途よきて歸朝

し舟卒の原稿なれば或ひに其實を失ひ

たること亦無しと云ひ難し看官は是

と答ひること勿れ其底で又次編よりの

相變らず何か據さ出します故尙宜しく

○問答課(此内新問題の答の何卒は早く)

答 第貳拾貳號まで密の加藤行永先生が

お尋問の鐵道蒸氣車杯の濫觴を段々調査

致しましたら西洋千八百八十四年中(我日

本天明四年關東大饑さんの年よ當る)よ

いるれむむるを云々と云ふ人が始めて

製造たものト聞なせへやし所で堂も充

分で無いテ底で誰も見る事ハ知ツても之
 を改造法を知らないゆゑ當時ハ一旦中絶
 して居りましたが千八百二十年、我日本の
 享和二年で菅相の九百年忌とした年よ
 當るコレモ餘計な話だが「一チヤるど
 へちツへ」と云ふ人が種々工夫と加へて
 後千八百十二年（我文化九年）「シヨウ
 じずてふゑんらん」と云ふ英國の人が之
 と改造して遂に千八百二十五年（五月蠅
 機だ）が我文政八年非常な寒年で北國筋ハ
 皆雪で埋舞て人家も山も川も丸で見へ無
 くなつた年な當る「新又鐵道を發明し
 試みよヤラカシタ見たが滅法早く實よ未
 曾有の便利だと云ふ所より各國でも是を
 設たる様よ成りましたものゆゑ遠く起原

を尋ねれば「むるとツク」氏から「へちツ
 く」氏だが中興全く發明の鐵道元祖「シ
 ヨウじずてふゑんらん」氏であるト云
 ッて善いと。或る西洋の書籍よ見えまし
 たから筆のまよく筆書として五座の何
 と貴社の諸君どうでゲスな善ければ載せ
 て頂戴

夢情野寶香

滑稽政島一週奇譚

向水生 稿

滑稽政島一週奇譚序

二尊天ノ浮橋ニ立せ給へル時滄溟ヲ探リ
 テ礫敷盛島現ハレ 聖主明世ニ君臨シ給
 へルノ日大詔降リ 政島生ズ夫レ礫敷盛

島ト言ヒ政島ト言フモ固ハ皆ト是レ豊葦
 原ノ中津國ニ在リテ共ニ長繁ル葦ノ若葉
 ノ未芽出度榮ン事コソ願フ可キニ島人等
 ノ然ハ無クシテ鬼ガ島ノ如ク猿ガ島ノ如
 ク猛々敷アリ狡猾ナルアリテ共ニ葦原ノ
 島人トシモ思ハレヌ舉動アルコソ湖濱ケ
 レ此處ニ瀟洒軒風雅ト呼ベル山間ノ奇人
 アリ曾テ浮世ノ塵榮ヲ擲チ心高根ノ月ヲ
 脉メテ自ラ獨チ樂ミシガ未ダ俗ノ盡キ
 ザリシニヤ捨シ浮世ヲ再ヒ慕ヒテ東京ニ
 出テ來リ各政黨ニ加盟ヲ請ヒシモ皆ナ不
 幸ニシテ承諾セラレズ此ヲ以テ己ムヲ得

ズ快々トシテ歸郷セシガ一夜白衣ノ異人
 來リテ怪シキ島々ヲ經歷タル模様ハ正シ
 ク夢中ニ過ギテハ看官宜シク察シ給ヒテ
 明治癸未夏日識於雜司谷ノ寓窓下
 滑稽政島一週奇譚

第一回

五事擧ヒナツテ大旨已ニ定マリ。立憲詔
 降リテ聖意既ニ明カニ。將ニ明治二十三
 年チ期シテ國會開設アラサセ給フ。最ト
 有難キ勅詔サへ。己ニ有間ノ出湯ヨリ厚
 キ聖旨ヲ奉戴シテ。義務職分ヲ盡シト各
 々黨派ヲ團結モノ。幾百千ノ數知レズ。來

クレヤ來レ我ガ同胞。來ツテ同意ヲ表ス
 ベシ。來タレヤ我ガ兄弟。來ツテ義務ヲ盡
 ス可シ。ト諸方ヲ巡ル演說者ボンビキ類
 似ノ派出員。辯舌流ル、谷川ノヨドマ水
 ナ我ガ田ヘト。引シヤ歐米各國史佛ノ草
 命云云ナリ。米ノ獨立ニ云ナリ。諸君ヨ諸
 君。諸君ヨモ同シ權利ノ有ナガラ。ナドテ
 期マデ卑屈スゾ。天ヨリ授カル人權ヲ自
 ラ棄ツルノ事ヤハアル。杯ト説カレテ然
 モコソト。初メテ悟ル田舎漢。俄カニ起ス
 慷慨心貫ニ今迄ハ怠リヌ。同シ權利ノ有
 ナガラ争デカ之ヲ取テガラン。争テカ之

ヲ伸ベザラント。直チニ夫レヨリ有志ト
 ナリ。又其先チ順巡シ。諸君ヨ諸君ノ演說
 モ。先キカラ先キニ擴マリテ。今ハ奥州出
 羽ノ隅。西ガ州ノ果マデモ政治ヲ談シテ
 論議セザルハ。更ニアラザル世ノ中ト。爲
 ツル事ヲバ夢ニダモ知ラヌ山家ノ鼻ノ戸
 ニ。浮世ヲ避ケテ只一人。月ト風トヲ友ト
 シテ。自ラ樂シム奇人アリ。其名ヲ瀟洒軒
 風雅ト呼ブ(以下次編)

○名代の好男子、遊治郎が或晩いつもの
 如く吉原へ浮羅裡と行き目指妓樓へ這入

うとして石に躓いて足の親指から血を出
 たらに娼妓の千代鶴自分の情夫と見て奥唐
 飛で出でオヤお前と人深寒ねへ如何して
 其様怪我をしたのだへマア此方へは出な
 はいと云ながら譯の足からずやで買た薬
 を出して之を付ると早即血が止つたので
 遊治郎呆れて感心しハテサテ奇妙な薬も
 有もんだと云傍かト千代鶴が滑らぬ顔付
 て「お前はん何れ感心する事はないよ憚
 りながら妾やア血止の身の上だからと云
 ば遊治郎の一言半句も勿々出さ忌々しい
 事と吐す奴だ一番敵を取てやらうと千代

鶴の手と取て二階に上りあがらじつかり
 と抱着のに千代鶴も吃驚してお前はんや
 何を笑談するのだねへと云バ此度の遊治
 郎が滑らぬ顔で「へん是が戀の抱きのほ
 りだ」

三河 唯我 稀笑

○九般賣藥印税の印布達極々に付て
 の貴君はじめ私と杯のお仲間ハ賣藥代價
 が最極りにありましたかねハイマア
 大抵一割高引上る積りですが猶四五日中
 係集會して確定と決定いたしませう「へ
 エ左様なれば私しもお藥則の通り其説に
 決しませう」

陸奥 喃々亭喋々

○一寸漢學の出来る 先生あり此人類よ
 聖人めかして居たるが平常盗賊の侵入と
 恐れて毎夜戸締りを厳密になして門口の
 格子に確定と錠を卸して寐ると例とした
 るが或夜密に竊盗來り寢息を窺ひ密に入
 て金銀衣類を奪ひ逃去しが翌朝にいたり
 先生昇を見嘆一嘆して曰く嗚呼格子も時
 に合ぬかと 仙台 矢痴樓北八
 ○家の狡兒ア 毎日川へ計り遊びに行て
 居やアがッて爲事がぬへが漸次年倍に
 なるし何時迄家にも置ぬへから何所か能
 どころへ奉公にやらうかと性々勘考て居

るのだが是といふのも何も耶奴が不便だ
 から心配するのさ「ムウ夫のどんない、
 分別だ奉公に出すなら足袋屋へお遣なせ
 へ「ウンニヤ那樣問だるッこの商業のいけ
 やせんテ「ナアニ夫でも可愛い子に足
 袋とさせるると云から
 ○且那樣く 大變でござります今臺所
 の隅で何だか音が爲ましたからッと行
 て見ました「イヤモウ大變さ」何だ長松
 無暗大變だとの何が堂したのだ何
 堂した所じやアばさいません貴君が此間

何所からかお連なさいましたアノ不氣量
 の今戸焼のおかめと補助どの中がどうも
 些臭いやうだと目を付て居りましたが案
 の定兩人とも何時もの所に居ないゆゑよ
 くく方々を探して見ましたら何時の間
 にか「如何したのだ」柵からかけおちを
 してしまひました

迷甚 太樓

○猫も杓子も「オヤ是の失敬」兄も舍弟も
 誰も 彼も投書家雅君が戲號を改められ
 るよの實々以て實以て誠以て眞實よも
 つてと其様よ并べずとも宜が恐ろかんし

んの股溜りと云はせだせ「へん何だ珍し
 さうに其様事の當然の看版だ「ウム何故
 ぬ」然とサ當時の開明(改名)の代と云
 ひやす 尾張 志機登九生
 ○一寸伺ひますが 先日お濱の館を参議
 だとか大臣だとか大層高官の位方が然る
 華族様とお招きなつて強大の響應が有
 たさうですが其時のお客さまの此方見た
 様よわんまり喰物をむしやく喰り無
 つたさうでしたが矢張斯うおつら見え張
 ておいでのせいでもせうね「ナアニ夫の
 那處の名が延察館だもの」

南駄樓酒園

○土條君 此節大分何々主義といふのが流行です。貴方などの兼体主義と大方彼エート七面鳥の鳥押でせうね。突然の誤詢問驚縮仕つると云ふ次第だが主義といへば我輩の兼体はあらずソレコト此云のさ善心自遊酒戯だワイ。是のしたり然すれば君も暖味主義だね夫でいまだ黨派への加盟なしですナア。左様く方今の相替らず黨外だアな。

石州 堂々士

○一ト口話し

○近頃の素的紙鷲が流行せいでか方々で上て遊ぶよアレ左様云中は那處でも上つたソラは覽なハ、アイカにも

○己も前方の面白奇聞チウ雑誌を一冊買て讀で見哩。ウム夫宜らう話の種だから

○今信書を出すのだから其處もある郵便の印紙を一枚切手おくれ

○煙草やの息子の錢遣ひが荒いね。ア

くバツパト

○ソラ此家れ汁粉の世間のより能たらう

「アンの通り

右五件 鷺 鷺 鷺 鷺 鷺

右七件 鷺 鷺 鷺 鷺 鷺 鷺 鷺

○お前の通人だといふが松の海老と與兵衛のおぼろといふの素的に旨へせ。ン價てくんお酢いも甘いも知て居る身の上だ

○隣家の引摺女をとら。家へ連込だが女房よとるといふ心か。ナ様さずる。ベツたり

○前の溝へ鮒が死にかゝつて流れて來から漸とすくひました

○昨夜小便をして巡查引た奴の職人か

「ア、何だか散々阿られて居たが一向ヤアくさ

○變集委員の倉田君の何な調子の人だ郎

「何時會ても面白其文で居なさるのさ

○オオ、那所へ車を曳て行く徳役人のお前の面を見て笑つて居たが知て居るのかへ

「ナアニ全くわかの他人だ

○今日の釣ふ行ふと思つて腰よびくを下ながらつひ其處等を歩行て來ました。らく

右七件 吉原 笑々舎花文

○横町の先生 高知町の鍛冶屋の朝からカンケンくど鐵を打て居ますか矢張帝政黨の員かねへ。ナア、那家の主人の民

權黨だ「ア、モ今の音をお聞なさいと兩人
争つて居る中眞赤よ焼た鐵を水よ入る故
ジュウ〜 伊勢 味 水
○千早振 神代の昔伊弉諾伊弉册の尊の
二神天下りまして天の浮橋よ下立八千鋒
もて千尋の蒼溟を探り玉ひしよ滴り凝り
てサノコロ島を成せし時しも一羽の怪し
き鳥の飛來りて奇妙奇貞烈齋藝林珍妙無
類の腰付をなして見せしよ二神も大ひよ
悟る所有玉ひしよかや昔の史にも有ます
が如何でせう實よ嘸お樂な事有まじ
たらうねへ「ア、左様共く論語よも並

で鳥よ之を習ふまた「からずやとある
から 石州 堂々士
○オイおいらん 今夜よ限ッてお前の顔
色が大層よ悪いが何か心よ苦勞でも有
しねへか次第よ依てハ膝ども談合相談よ
乗るめへ者でもねへから包まず自己よ咄
しなせへ「ホソムぬじハ心切よ能尋ねて
おくんははるハ眞實本間よ嬉いんですよ
お前はんだから明透よ咄しを仕ますから
聞ておくんはは實ハ妾ア今夜淵川へ身
を投て死ぬる覺悟有まじ「ソッソア
聞捨よハならぬ咄しだが是よハ必定深い

因縁の有事だらうが其譯を一通り話して
聞せねへ多方内燈へ借金山でも出来て
ソッソアねへとか遺瀬がねへとか云所か
ら二圖よ狭い了簡を揉出して急よ浮世が
否よなつたのだらうが苟よも死ぬなんど
云ふ悪氣ハ出しなさんな淨瑠璃の文句よ
も有通り死で花實が咲こかいやト云ふ蛇
アねへか然から心よ持直して此結構な浮
世よ永く居るのが何よりだ「ナアコト譯
といふハ然若旦那が妾の許へしげ〜來
なんして互ひよ心を打明じ此世ハふるり
三世三世替るまいぞへ變らじと神や佛よ

誓いしも夫よ引換え情なや彼お人ハお家
の不爲として七生迄の勘當と形振さへも以
前よ替り見るも懣懣見すばらしさ郭の習
ひで其後のせかれて兎角遠ざけられ阿愛
や彼お人ハ思ひ絶兼自害してお果おさん
したトの報知に訖驚をすれば妾の爲よ淺
狭き事よなりしと思へハ一層悲しくあり
是から直よ書置して淺茅ヶ原の鏡が池へ
トボンと此身を投る積り「ソッソアいら
んお話しの中だが少し待ておくんはせへ
寛文の年間よ堺町の尸金屋の采女といふ
傾城が入水した咄しよ寸分違ハねへが「

オヤお前とん能御存じだ事マア堂したら
宜らう「然しお前が死で傾城塚でも建て
貫ッて世上へ浮名を流す心底か「ナアコ
サ内所の借金を流す積りです
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

高島蝶蝶樓

〇善美藏と云ツちやア 俳優の中でも那
くらむ出世した者の無からうね「へエ何
故「何故だッて垢離場の下等劇場よ始て
出た時の坂東佳枝三郎といッて那處が取
拂よ成て奥田登美三郎と改名て舊奥田座
へ出て勤めてから終は團洲の門弟よあり
市川壽美藏と改名からハ上等劇場で大役

文車よ歌の重みや葉の櫻
筏よハ積み重たり雲の峯
夕鏡やそたち計の小順禮
帷子も買よ鄙ハ着ず入す
船借て四方よ巡や夏の月
波間より魚の躍や五日晴
連引の調子も高し五月晴
登さへも忘て君よ逢夜哉

前句付 (まへくづけ)

〇題 甘い事かな
ペコ付た腹よ茶漬を二三杯 爲山
お子達の座敷踊りを褒め詞 佳香

を勤める様よ成タハ珍らしい出世さね賢
よ名詮自稱とかで初めてかねといひ中頃
のどみと云て金だの宮だのと縁喜の能名
を稱た故だらうよ「ハ、ア夫で分ッた
「何がチ「イヤサ此間市村座で天神記を
した時さへいよあッたからヨ

外神田の 其文

梅の春文句讀込發句

〇夏乱趣 催 神田安坐連

昨日今日登の増た流かあ
拾着て文字の席書爲子哉
書初よ書た富士見て舟遊

滑稽と洒落で纏た此雜誌ハ 志樓登
北風の寒さを凌ぐ茶碗さげ 面徳齋
酒も有肴も有りて月もあり 九蓮子
酔醒よ一寸一杯のこぼり水 久生
出版も人の著作をやき直し 曉雨
能泣と唄浄瑠璃のツヤ語り 花文
當はめと投書悉皆記載れて 睡庵
齊武経國美談 齋 加藤行永 譯
名士 余頃日仲溪矢野文雄先生が著述せられ
たる經國美談てふ小説を閲せし巻中
の紀事余をして感泣せしむるもの少な
からず於此該書中最も余が感ずる所の
もの數回と抜記して漸次之を彼の浄瑠

璃文の口調は譯し尙幼童婦女子の輩
至るまで普ねく之を知らしめんと欲す
貴店幸ひ余が爲に余白と假され
明治癸未夏日 加藤行永 識

主従再會の場

山里や時雨にまじる小牡鹿の。音も小夜
更けて憐れなる。病ふの牀は只一人、身の
過方行末を思ひつゝ、けて巴比陀。落つ
る涙と拂ひつゝ、詞「ハッア如何なれハ斯
まで正理を守る我々が身よハ不幸の重
るぞ」本國騷亂の初めより三年は餘る變
難難。曩よハ寧河の流れよて死たる命。
幸ひに漁夫老夫婦よ助けられ。阿善に於

てハ奸黨等が。刺客の爲めは敢果なくも
刃の鏑となるべきを。李志が息女の情け
よて漸く逃れ是までの露の命も繋ぎし
が。今又斯る病ひの爲空しく此に相果な
バ。千辛萬苦の甲斐もなく。本國齊武の回
復も事半途よして水の泡。昨ふよ比べ今
ハまた最と苦痛を覺ゆるハ。我が身も天
より遣てられしか。ハ是非もなや。口惜し
や。流石無双の英雄も國を思ふの精神と。
民を憫れむ真心より。悲歎の涙はら
。落て前後も忘れける。折うら秋の空
河へて。隔なく照らす月影よ。風がもてく

る琴の音の。遙が彼方よ聞ゆれハ。巴比陀
ハ身を起し詞「ハ心得ぬハ爪音。斯る徧鄙
の片山里よ妙なる調へと聞くハのかな。
如何なる人の手弄ぞ。と暫し病苦も打忘
れて。獨り牀より起き出づれば。琴の音次
第よ近づきて。歌の聲さへ最と憐れよ
見渡せば。野の末。山の果までも。花な
さ里どなかりける。今と盛りと咲さる
るふ。色香愛たきその花も。過ぎ越方を
を尋ぬれば。夜半の魍時雨。霜よ枯れ
葉のそれさへも。落ちて寂びしや暮
れよ。鴉を宿す秋の空。雪よ折らるハ冬

の割。生きたるさまみなきまでよ。堪へ
し辛苦の甲斐ありて又閑かなる春に逢
ひ。咲き出づること芽山度けれ。世の爲
めにとて誓ひてし。身の上よ。びの。
花の替り憂ささものと。知りなハ何か恨
らむべき。春の花こそ例しなれ。春の花
こそ愛たけれ。
と歌ふを聞て巴比陀詞「ハ不思議やナ。
アノ歌ころハ數年前。我が本國よ在りし
時自うら作りし短歌なるよ。之を歌ふハ
心得難し。若しや由縁の人よもやど。思へ
ハ聲さへなつかしく。窓より外面をさし

のぞけば。月の光りよ儂のやつれ果たる
 禮温が姿。うれと見るより巴比陀の。思は
 ず窓より聲をうけ。其處よ立しの禮温よ
 あらずや。と問はれて此方の樂人の暫し
 見わぐる北折から。再び上より聲高く。禮
 温よあらぬか誤りしかと。言はれて下な
 る樂人も。然かのたもふの郎君ならず
 や。禮温よてこそ候なれと。跡の涙よ主従
 ぐ。見上げ見おろす窓上窓下。暫し詞もな
 かりける。

○法意集話

毎年夏の候より虎列刺病の流行定式の如

きも今年の上世の不景氣よつれて（これら
 の成丈不景氣が宜テ）先格別盛んある摸
 様も見えませぬが去る日給入創野新聞よ
 載せたる如く◎西瓜よ熊膽（之の昔時よ
 り諸君も知了の事ならんが西瓜よ鱧も亦
 悪いと云ふ）◎胡瓜よ弱菊◎蕎麥よ青海
 苔◎焼酎よ豆腐◎素麵よ蕨◎氷よ蟹◎刺
 よ眞桑瓜◎以上八件の喰合せて悪いと云
 ふ事と有名な漢醫某先生が數年經驗され
 た所ゆゑ兎角君子怪愛よ近寄らず（假令
 君子で無ツてもサ）用心よ疾苦なしで此
 様な事自分覺へて居るべきの勿論又

人よも逢ふ度毎よ夫から夫と話傳へて置
 きたし」杯と書掛た所へ或人來ッて曰「
 頃日或家よて桃を喰ひしよ忽然腹の工
 合を損ねたれば逆豫て持合せの寶丹を取
 出し飲めハ怪しやアラ怪しや五體一時よ
 四苦八苦合せて十二苦の大騒ぎをした事
 がある一ト聞て見れば事實の經驗ハサテ
 措き是亦記さざるを得ざることに茲よ併
 せて載せましたが此事よ就き近日府下北
 豊島郡下駒込村（池の端の守田の別荘）
 に至り寶丹主人と種々の問答もあれハ其
 委しい話ハ次編よ記して玉耳よ入れるで

ありませうと上翁よ代りて於山走海筆記

○寄合話第二會

- 自由の階梯(政黨) ○中將姫の結末
- 流語(もろく) ○俳諧(秋風)
- 狂句(隨意) ○狂詩(隨意)
- 狂歌(隨意) ○情歌(漢語讀込)
- 前句附(はつかいいたる) ○冠附(ういてみた)
- 政島奇談 ○桃と寶丹の喰合せ
- 生れ年よ因りて父母交合の模様を知る
- いろは道歌 ○短句詳解
- 今ハ昔江戸の新聞。此外未來稿數々
- 右の内◎印分の猶追々諸家の原稿よ因る

廣告

菊亭香水纂輯 松山旭齋圖書 (郵稅六錢)

永代文化の夢 全一冊正價廿錢

右の文化四丁卯の年(今と距る七十七年前) 八月十九日江戸深川富ヶ岡八幡宮の大祭日

江戸 梅亭金鷲著 靜岡 福地萬櫻閣

妙竹七偏人 初編より上中下合本 正價十二錢郵稅四錢

江戸 瀧亭鯉丈著 東京 深川梅園閣

花よみ八笑人 初編より上中下合本 正價十二錢郵稅四錢

江戸 瀧亭鯉丈著 横濱 澤野穂垂閣

こつ和合人 初編より上中下合本 正價十二錢郵稅四錢

東京 松村櫻雨著 横濱 灣々堂參閣

浮世之人情 五人五情全一冊 價郵稅共十六錢

但し(妻女(寡婦)(處女)(妾婦)(下婢)等の内幕 ならべ男子たる諸君の殊更に見書也

木瀧清類編輯

演說笑話萬邦史 全一冊價廿錢 但郵送料とも

日本珍史十五件(支那珍史三十件)歐米珍史二十六件(編者奇談八件(合計七十九件) 右何れも御送金次第郵送可仕候 萬字堂

土屋郁之介編輯 (新版銅鑄折本全一冊)

近世日本年契 定價廿五錢 着次第郵送

弘化元年荷蘭土人長崎へ來りし事より朝鮮 修信使朴泳孝以下入朝の近事も畢る

矢野晋六編輯 (新版銅鑄折本全一冊) 和漢洋年曆箋 定價十八錢 着次第郵送

天神七。地神五。人皇卅六。漢曆代帝王。皇朝 年曆。支那年曆。西洋年曆。大祭祝日。五等親 忌服令。和洋度量。干支方位。土用辨。節分辨 彼岸辨。八十八夜辨。二百十日辨。八せん辨。 入梅辨。陽曆季節一覽。七十二候辨。利足早 見法。諸證文法。日本國分。五十韻。府縣表。 鐵道發着時限。相性名頭字類。編冠字類便覽 夫婦相性圖解。九星辨。五行相剋圖。廿四節。 日輪出沒晝夜長短表。七曜表。以上卅四餘件

善惡心之通行 定價十二錢 着次第郵送

四十喧嘩鳶口 定價十五錢 着次第郵送

開成東京繁榮錄 定價金壹圓 郵送料十錢

東京府知事 芳川顯正君題 合編全部 銅版圖入

東京府深川區長 堀田正義君閱 同明治小學校長 小谷茂實氏輯

東京府 達學事要令 全一冊價廿貳錢 但全國郵稅八錢

(第一編)目次 ○教育令 ○小學教則 ○小學校規則 ○中學教則大綱 ○醫學學校規則 ○師範學校規則 ○第一編)目次 ○學區 ○學務委員 ○藥學校規則 ○就學督責規則 ○學務委員事務要項 ○町村立小學校事務掛選任方 ○町村立小學校事務掛職務心得 ○學務掛書記事務要項 ○町村立私立學校。幼稚園。書籍館。設置廢止規則

(第二編)目次 ○小學教員學力檢定規則 ○教員免許授與規則 ○教員任用規則 ○府縣立町村立學校職員名稱并準官等表 ○町村立小學校教員月俸官等表 ○町村立小學校教員庶費規則 ○町村立小學校長訓導。準訓導。助教。職務心得

本書ハ東京府下の學事改正規則なれば音一 地方而已ならず全國各學校諸家の採て以て眼 目と爲す所よ付き荷も學事關係諸君及び我 子弟教育の任ある父兄後見人等ハ實よ其 座右欠く可らざる要書也(八月十日出版)

發賣元 東京木挽町一丁目 萬字堂本店

全國同盟發兌書房

東京○大坂○京都○彦根○
 名古屋○半田○岐阜○德島○
 姫路○廣島○豐岡○竹田○
 和歌山○津○神戸○長野○
 松本○上田○福井○金澤○
 長岡○新瀉○青森○弘前○
 秋田○若松○水戸○仙臺○
 石の巻○宇都宮○土浦○
 佐原○千葉○木更津○館山○
 甲府○前橋○高崎○浦和○
 八王子○小田原○湯本○
 伊香保○熱海○横須賀○浦賀○
 厚木○横濱○長崎○鹿兒島○高知○
 此外各地有名賣捌所數多あり
 餘白無きを以て店名茲に畧す
 但し此類の書お求下さる節ハ
 萬字堂發賣の品と御尋奉願ハ

明治十六年八月廿三日御届
 明治十六年九月五日出版
 東京府平民

定價金八錢

編輯人

神田國藏

東京府神田區蠅燭町
 十四番地

訂正人

菊亭香水

東京府平民

出版人

淺井橘治郎

東京府京橋區木挽町
 壹丁目六番地

東京府京橋區木挽町壹丁目六番地

東京發賣所

萬字堂本店

大坂備後町四丁目三番地

大坂發兌元

岡島支店

横濱太田町三丁目四十九番地

横濱發兌元

萬字屋書店

菊亭香水校閱
 神田國藏編輯

面白小説
 叢書

第二會

萬字堂本店

面白 叢談 寄合話

○面白 叢談 寄合話

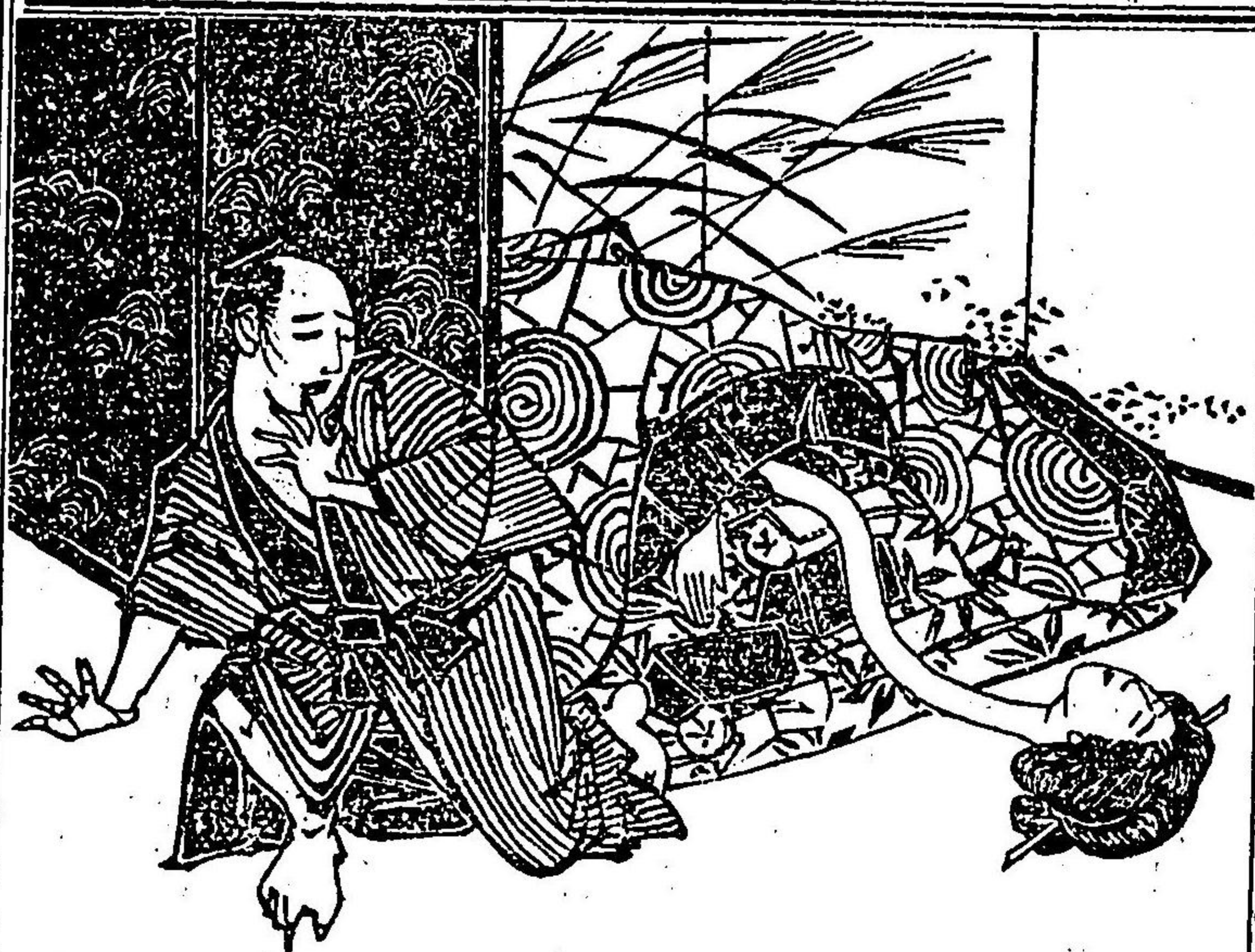
毎月五日出版。一冊定價八錢。五冊前金卅六錢。十冊前金六拾八錢。全國郵税一冊一錢。○此面白叢談の表題の如く總て古人今人抱はらず其當時の一茶話と過さざるものと雖も或可可笑味あり或悟道教訓勸善懲惡の筋も因り見るに隨ひ聞くに隨ひ又得る(原稿)に隨ふて録すものなれば叢談の目的身はだ廣くして毎會如何もの顯はれ出るやを圖り知る可らざる我日本三千六百萬人の兄弟居ながらにして其思ひ按ざる言を述べ廣げ又聞き集むるの主義なればあり然ればもや其各自既按ト或之を他を發言せんと欲する事ハ順次この叢談に載せ又他の心意話説をも見聞して更思ひ合する事を慥或ハ十人寄れば十種百人寄れば百類に違ふ所のものに感じ若しくハ一取進激杯も皆具會話要する所の功能にて業既西洋文明の國ハ専ら中等社會に流行するの書物なり故今之を摸し採て以て此一書冊編むコレ寄合話の名ある所以あり乞ふ諸君ヨ増益雲願を垂れ賜へ



江戸の新聞

長頭破春心ヲ 宇曾尾岩内

文化の末文政の始めでありました江戸品川の奈賀屋と云ふ妓樓に或る人遊びに至り兎も角も初會と云ふのでおまさと云可なり美しくしい女相方に出で引付の盆盤を以て彼方様へ此方様など、先づ一枚一本に曲利が一枚一本で一枚一本との肴の壘が一枚酒の徳利が一本又曲利が一挺とい三粒の事にて即ち猫一疋なりお座つきも濟み初會の事もハザツと切り上げて房中となり萬々陸言の後風と云が



覺めて。傍に寐て居る女と見るとコハ如何
 何又頭が無いから尙も醉眼を定めて能く
 見ると天窓のいつか蒲團を離れて四尺五
 寸ばかり向ふの疊の上にコロリところげ
 落ちて居たゆへ客の大ひに驚きあへとい
 しく部屋を逃出すとき女の忽ち目を覺ま
 し直地に後より追駈け来る。客の益々驚
 き氣も轉動して面色土の如く身體のがた
 く物も得云はず震へ出せば女の暫し涙
 を流して「ママどうぞ後生一生のお願ひ
 が有んですから是非とも床へ歸てお呉な
 りいヨ」と其愁歎限りなければ客もハテ

こいつ。手古變。知氣倫妙な譯だわいと思
 ひながら是非なく再度臥所へ歸れぬ女
 の言葉を改め「定めて怪しき事をや見た
 まひ候いぬ」と云たか堂だか何でもおま
 ん妾の事又就て何か見たんでせう左も
 なければ出し抜けに黙ッてお歸んなる
 氣遣ひの無んですから妾キヤア眞實に恥
 かしくツて恥かしくツてならさいんです
 ヨ。よう早く話してお呉なりいよ。ヨ
 ツ鱈ヨ」と頻り責問ふゆへ「ナニ實
 の己が出し抜けに歸る所かお前の首が出
 し抜けにころげ落ちたのを。風と目が覺

めて見たのだから驚くめへ事か愕然して
 シヤツツリが止つた位な時疑たらうじや
 アねへか「サア妾も誠其事が氣よなる
 んですヨ。だからどうぞ此一件はおま
 ん生涯他も言ず居てお呉なはいナ後生
 ですから」など、只簡に頼み入りて情泣
 く語り出す様「妾のさる邊鄙な所の出生
 で田畑家藏も相應に所持して居る農家の
 娘なれども何を申すも此病症ゆへ他へ嫁
 にゆく事も出来ず余議なく浮き川竹の流
 れに身を沈めましたが此里に来て既にハ
 ヲ六ヶ年の歲月を經れども客に此恥を見

られた事の有ません何故なれば常時も臥
 所に入る折の豫て人に知れぬ様三弦の糸
 の黒く染めたのを以て髪の中へ通し其左
 右の脇の下へく、り付け置くゆへどの様
 にも兼込んでも首の飛び出す氣遣ひあし然
 而今夜の宵の一醉に前後を忘れ例の糸で
 ぬることをせず生涯に無い耻を人に見
 せたのの返すくも殘念でならさいんで
 す」トさめく泣沈み呉々他言なき様
 願ふとて死に廻ッて歎きの色眞に顯はれ
 揚代に勿論皆婦人から償ひ其上猶種々款
 待し誠意を盡し却ッて客の一時の興に入

り互ひよ其情も深くなり一と併しこの後
生涯他言すな。イヤせまじと誓ひし抑
も一朝一夕の言も非ざるゆへ年月経れば
薄情も打忘れて人に物語りでもとそら
な事なれど底の氣味悪きものか責め問ふ
人ありても決して他に語らざりしゆへ流
石に男女の交情最と深きものと感じ又強
て問ふ者も無りし由ア、世のさまじくの
夢の世の中にも亦かゝる夢の様なる奇談
もあるものぞト記し之所。此頃風説に
東京の或る廓に（但しこれの品川で無
いテ）随分評判の別嬪で四尺五寸の無い

が凡そ其半分程ころげ出したのを夜中に
風と見付けた人が有つて大ひに驚いた事
があるとしてツイ昨今の内証ばなしゆへ御
承知の方も未だ少なからうと序ながら書
き添えましたたが何れいつか一度コレハ江
戸てなく東京の新聞ものでありませう
編者曰江戸の新聞の尙奇々妙々種々雑
多なる事件が澤山聞へて居りますゆへ
毎會一席ツ、其事實を擧て持出しませ
が又諸君の内でも御見聞の事實ハ何卒
其實際の書とも添えてお投じを願ひ升

茶
説

笠ノ説

香水生稿

禮記ニ曰腐草化為螢ト又格物論ニ
曰ク螢ハ是レ腐草及ヒ爛竹根ノ化スル所
ナリ初メ猶虫ノ如クナラザルトキ腹下已
ニ光アリ數日ニシテ体ヲ變ジテ能ク飛ブ
云云而シテ彼和漢三才圖會ヲ閱スルニ螢
ハ大抵大サ三四分黒色ニシテ兩額ニ赤點
アリ臭氣アリ其體銀色ノ處夜光ヲ出ス云
云ト其他會テ閱スルノ諸書載スル所概テ
皆ナ異ナルコトナシ一名ヲ暉夜ト云ヒ一
名ヲ丹良ト云フ其他丹鳥ノ夜光ノ燐ノ燭ノ
燿燿ノ等僉ナ其別稱ナリ夫レ此蟲ヤ大暑

ノ前後ニ最も多ク而シテ亦各地到ル處
概テ産セザルハ甚ナシト云フ。香水熟ラ
ノ事ヲ按ズルニ往昔漢ノ武威ノ太守ハ之
ヲ丸ト爲シ矢ヲ却クルノ法ヲ務成子ニ得
テ吳ト戰ヒ大ニ功アリ亦隋ノ煬帝ハ景華
宮ニ數斛ヲ聚メテ夜遊ノ具トシ其光恰モ
火ヲ山岳ニ放ツガ如キニ至リシト而シテ
彼晋ノ車胤ガ讀書ヲ照ラシ秋夜深雪ガ良
縁ヲ煤セシガ如キハ其最モ著シキモノニ
シテ今尙ホ世上ノ人口ニ膾炙ス。日暮群
飛シテ百星空中ニ散シ雨後流レニ入テ銀
河地上ヲ行ク遠ク水光ニ接ル處玉月ニ映

近ク林影ヲ離ル、時金煙ヲ生ズ綱代木
 繁キ宇治川ノ畔蒹葭水暗キ難波江ノ邊王
 公貴紳雅客文人或ハ賞シテ之ヲ詩ニシ或
 ハ愛シテ之ヲ歌ニス而シテ其一ビ籠中ニ
 養ハル、ヤ深窓ノ下甘泉ニ飽キ珠簾ノ裡
 玉露ヲ嘗ム嗚呼何ゾ螢ノ殊遇ヲ裝ル夫レ
 斯ノ如ク甚ダシキヤ若シ他昆蟲ノ種屬ナ
 シテ一ビ之ヲ聞カシメハ亦必ズ怨嗟措カ
 ザル可シ嗚呼抑モ螢ヤ元ト果シテ何物ゾ
 胎生ニ非ラス卵生ニ非ラズ而シテ又溼生
 ノ類ニモ非ラズ只是レ一種化生中ノ最モ
 下等ニ位セル腐敗物ヨリ生シタル小蟲ノ

屬ニ過ギズ然リ而シテ人々ニ鍾愛セラル
 、彼レガ如ク。人々ニ優待セラル、彼レ
 ガ如ク甚ダシキニ至レルモノハ果シテ何
 等ノ故ナル歟知ル是レ只々譬光ノ一種人
 目ヲシテ眩惑セシムルニ足ルモノ有テ在
 スレハナリ若シ今螢出ニシテ其光勿ラシ
 メハ誰カ何ゾ之ヲ顧ル者アラシヤ何人カ
 之ヲ袋ニスル者アラシヤ又只彼モ蠢爾タ
 ル蠶蟲ト同一視サル、ノミ嗚呼譬光ノ其
 身ヲ幸ヒスル夫レ斯ノ如ク大ナルカ嗚呼
 譬光ノ其身ヲ利スル夫レ斯ノ如ク甚シキ
 平聊カ感ズル所アリテ學餘之ガ説ヲ作ル

○摩頭飄掌談 渡邊 晉 小解
 てらちちくく トハ壁ハ市人の賣買ノ手
 を拍ガ如ク人と心を合してよく物事を承
 知せよと云事なり○後藤正速の小兒教草
 二ハ十八なり萬人なり心を合せよとの教
 なり○沙門存統が神國幼童訓の注よハ是
 即ち天地なり大極兩儀を分つを云是則ち
 萬物の初を示すの深意ありとあれども牽
 強の説よや
 あいゝく トハ小兒をして早く言葉を巧
 よ慣らしむるの教なりト云ふハ開口發
 端の音なれば四十七言皆之より生るが故

あア
 てらちちくく



あアわアわア

母ちやん コリヤ
 何の言たチエ
 教へてお呉ナ
 夫共母チヤンも
 知らないの歟イ

にあより初めて教るありのト云ふの手を口に當て發聲せばあつくとなるなり是戯れの教ならん○小兒教草の説で人毎よ心を合するにも人の僻言も云ぬ様よ心の中を抑え慎めよとの教なりトあり如何
よや

流語 (まどしはなし)

チ、危険既んでの事泥まぶれよなる處を
「ア能く手を突いたお蔭で轉はずよ濟んだ。よかつた」是だから常々懐手の止すが宜と云つたのよ。手さへ出して歩行バ丸で轉と云ふ事いからア、怠惰ハす

るものでないテ「そらとも天智天皇の歌にもあるじやアぬヘカ」ナント「我が轉ふ手の杖よなりツ」と 櫻岡亭 子
「ア君何方へ御出遊でケヌか」僕ハ只今少し私用序淨羅く然と申す譯テ君ハ「僕ハ一寸餘り大評判故芝居の切見といふ一件サ所が調度安達の三の始り中とサ」ソノ安達の三で思出したがアノ淨瑠璃の中に「琴の組と引のへて露命を繋ぐ古糸の皮も破れし三味線の罰も慮外も願みずお願ひ申し奉る」と有が實よ其文句の通り以前の備扶の娘なれと今ハ非人の

身の上なれば破れ三味も相當なれど何處の芝居をする時よも破れ三味を持事のな
く然も上等の三味を持つが是等の少し狂者道方の注意す可き處でケヌな「君又例の不理屈カチ下さらないヨ止玉へ其處が夫れ芝居の艶といふ物ダ「イヤ夫れ斗りでない一體全体アノ袖袂ハ以前の兎もあれ今ハ非人故縷衣を着て出るころ當然なるよ何處でも絹布を被て出るが實に僕如き觀巧者の目から見ると一向感心しないテ「イヤ君にも似合なひ其處が夫れ作者の注意と感賞す可き所でケヌハ其譯とい

ふハアノ芝居へ縷衣にて出られてハ見物人が見苦しく又絹衣なれば後世君は様なる人よ黙を駁る、も残念ゆへ其處で以て作者が知惠袋を開るけ表を飾りて暗に縷衣をさかせたのサ「イヤ其暗に縷衣を聞せばとは「夫れ其の名を袖はぎと云ふでハ執仙か
横濱 右峯
モシお爺さんアノ土藏にも矢張り男や女なんぞが有升かチー「馬鹿な事を言なさんなナ生物ぢやア有まいし土藏や家よ男女が有ものか「それでもアノ左官屋よ今日ハ何處をしますのでと尋ねたら「さね柱

に腰巻どきますと云ました。

麴町 婦美

チイ熊公昨日の情死を聞たか「何處の」
ソレ上野でサ「知らね」「知らねへけりや
話すが何でも一昨日の晩らしいて拙者の
考へよやア夫婦約束までしたか兩親が承
知しさい處から遂に斯ふあり果た物ふし
い先づ其處の体裁の男が家桶の役廻り女
が源之助で男の着付が藍鼠の南部の裕よ
萌黄博多の帯を締め都て大家の若旦那風
又女の着付が何ふだといふと是れも糸織
の胡摩敷縮の裕よ更細縮緬と黒縞子の腹

合は帯都て意氣な拵へ時間も恰と丑満の
頃と来て居るから有難い處へ相方が念佛
の鉦へ水の音を冠せ兩吟の出よなるヲ。
するとバツ／＼よて女が花道へ来て轉が
る男も足早よ出て之を助ける是から宜し
く名残の文句よなつて「御身の跡よ存命
て亡き我が後と弔ふて給もナカといふか
ら女も負け惜みが強ひテ。其りや聞へま
せぬ常太郎さんソーモと來らア「チイ何
だ」見振だ「最ふ能加減よ仕ねへ長くなる
から」チット承知其處で男も仕方かさい
といふ思入れよて其程までよ此我身を思

ふて覺悟を極めたから未來の愚か三世の
夫婦女「嬉しうござんす」男「覺悟の能か
女「南無阿彌佉佛と果ない契り忍ばずの
池の深水にさんぶりと共よ其身を投げよ
けり「大層詳細知て居るが實地を見たの
か「イ、エ何れ斯んなものたるふと思つ
てサ。一寸氣取て見たのヨ然が上野もも
交番所があるのよ此情死の知れあつた
事は少し不思議だテ「イヤ其りやア左様
かも知れねへ「何故「東台元暗しといふ言
があるゆゑ 横濱 蕩獲軒さつね
迷甚さん今日「「イヨ一誰だと思つたら

へ五工門さんかマア此方へ上りなせ「
有難お御座り升。時よとんでるチ一事と
聞きお参したが新聞の種てふ物の何の木
よ結るんで御座るますかチ「左様サ己も
確よの知らないが何でも人の話しよへ「
浮木の枝よ結るといふ事だ
全 迷甚太樓
言七君聞て呉れ玉へ僕ハ先達て余議ない
入用よより去る人より四十圓の金を當借
した所が途方途轍もなる利子にて兼て一
歩六朱ハ規則の事と思ひも寄らぬ二割半
の利息と取られたが何と斯事ハ政府よ

りナト殿い取締り出来ないものか子
ナニそりヤア君が悪いヲ當時「利子自由
の世の中だものチ

金春

於山 走海

ヲイ藤八君何をするのだ一イヤ是の原公
かお珍らしいマア此方へ揚り玉へ丁度宜
敷の寄る處へ玉とやら君も夫れ御
心の滑稽雜誌が今度面白談寄合話と改
ッて出たから今より益と投書せんと其準
備中一夫れ蛇ア何でも立つ様に寄文
を山玉へ一ナニ其處に扱がある物か何
が宜からう茶話よ仕やうか流語と出掛や

うか「イヤ君ハ獲句がイ人蛇アないか
「處が皆無サ」狂句ハ堂だ子「夫も五〇んだ
狂詩ハエ「エ、んばくないが少しも知
らねー」一件「狂哥や情哥ハ堂だ」さう
イ「イヤ尋ねられ茶ア何もかも出来ぬへ
唐一ろの事最八に仕やう

武州

多久庵 光孝

經學先生あり性太だ酒を嗜む嘗て妻を喪
ひ一妾と畜く其家固より富めるよ非ざれ
は酒價毎ね山の如し一日机と對して孟
子を讀む時婦速しく來り傍座し涙
と共は聲曇らせて恨らめしそら言て曰

夫りや餘りで御座ります。以て妾代に彼
悪知レ之を知らんと御思召れても妾しや
那處まで聞きよした妾を質よ遣ふといあ
んまり無戀いお胴慾と机の此方又打伏し
て怨み涙も哽ひける。此時先生後へを願
み詞除かよ論して曰。舍レ之吾不忍無罪而
遣質。と然して又笑て曰。是誠何心哉

於山 走海

サテ是までの種々御世話預りました僕
も愈よ明後日を以て出發仕る心得一寸御
服乞の爲めよ「イヤ夫れでは彌よ御手前
よは御歸國なされる積で御ざりますか」

實又何程當地に滞在致すとして到底意志を
達するの目的も付き難ければ又何乎方向
を定め自立の途を求めんと存しますれば
幾ろ何時までとて果しもあき地も在らん
より至急歸國するよりは如かずと存じ升一
それも尤もでは有升がマア諺も待て
ば官途のあきがあるぞ申し升から

東京

無名氏

○かなのくわい ト云ふ日本の文章
を悉皆假名のみよて記すことが出来れり
我國の學問の道ハ何ばかり便利あらんか
との議論數年前より起りて先づ「かあ

ども「と云ふ社を起し其社則も出来更よ
 「かなのみちびき」と云ふ雑誌を世に發行
 すること、なりしが同時又「しろは會」
 「しろは文會」「しろの音」などいふ社も
 出来て其趣意大抵同しものありとて今年
 七月頃合併して即ち「かなのくわい」と
 名づけしと付き此度其會長を有栖川三
 品親王より願ひ出て御承諾ありしとて十月
 の七日を以て東京神田錦町の學習院にて
 其拜禮式を行はれたりしと聞く其頃會員
 への通知書(郵便葉書)の

このつき 七か(よろちえうび) ひるご

「トより。かんだ よしちやう
 がくまふん(くわぞくがくかう)
 よ おいて わが くわいの ちや
 う ある。ありすがは の みやへ
 いちどう はいえつまき とりおこ
 ちふ まま。よろづ おんくりあはせ。
 つとめて おんいで あらんこと
 を こふ。
 た、し。れいふく の フロツコ
 ウト あるひハ ハンマンタル は
 かまはせりの こと。
 十ぐわつ三か かきのくわい

右の如く皆其言葉は區別あるゆへ素より
 此文意も就ては解し難き言無かるべしと
 雖も惜むらくは言葉の區別のみよて文字
 (即ち原字)の區別無きを今試みよ改め
 て之を擧げば

この つき なのか(たら えう び)ひ
 る ぞ いら ト より かん だ に
 しき ちやう がく しふ んん(くわ
 ぞく がく かう)よ おいて わが
 くわいの ちやう なる わりす
 がいの みやへ いち どう は
 い えつ まき とり おこなふ ま、

よろづ おん くり あはせ つとめ
 て おん いで あらん こと を
 こふ。たゞし れい ふく の フロツ
 コウト あるひ の ハンマンタル
 はかま はせりの こと。
 トふ ぐわつ みツか

ト云ふ言もある此如くすれば見慣れ聞き
 訓れたる文字も言葉も判然と區別立ち
 て誰が讀み見るも惑迷することなき昔時
 鐵授子屋金兵衛龜井戸へ引越申候と假
 名文字よて其舊宅は張り札せしことあり

蓋シ落語
家ノ説ク
所ニシテ
準實アリ
ザルニハ
ベシ非

かきとやくじやきんへしり
めいとへひつこしもふしころ

これを人讀で「悲しや櫛屋金兵衛が冥途
へ引越申候」ト解したる由。これを

かきトやくしやのきんべ

いかめぬとへひつこし

まをしころ

ト書たあらば其事柄の解と誤りもあらざ

るべし又昔時或る風呂よて一人の老翁他

多識の聞えあれども總て文章の區切く

又五月蠅も句讀を付る言多きゆへ讀むよ

とも恐れ入りしと大に詫るゆへ是は於て

馬琴翁微笑して曰此頃其許が或る風呂屋

よて和文章などよ句讀の不要ものなりと

て馬琴の著書よ句讀多きと悪さまよ云れ

と時拙者傍へ在りて之を聞き居たり予

ハ即はち馬琴なり因て「ひとまははてよて

くびへ。はまるほどの。じゆす」と書くべ

きなれど試みよ句讀を入れずして認めし

なり然るよ果して此如き思ひ違ひを生ト

嗚呼なる業を出かされしゆへ和文章に句

讀の要不要論より證據此一事よても分

りしならんト態と事を設けて示されしに

ゆへ即はち首へはまる丈の大きさは製造

致したるが夫れは甚はだ心得違ひよて何

却て煩はし豈和文章よ句讀を要すること
あらんやあど話せしと圖らすも馬琴翁の
傍よて之を聞き頓て其打語りし老人の居
所及び業体を他の者よ尋ねし所或る珠數
家の某なりとの事ゆへ其後彼珠數家へ尋
ね行き拙者珠數を一ツ詠へたとて人よ
頼まれしよ依り其注文を書付けて置く間
よろしく拵らへ給はれと認めし注文の
ひとまのりよてくびへ
はまるほどのじゆす
トあるゆへ老人心得て一ツの珠數を拵へ
さり豫て約束の日限よ至り馬琴翁來つて

とも恐れ入りしと大に詫るゆへ是は於て
馬琴翁微笑して曰此頃其許が或る風呂屋
よて和文章などよ句讀の不要ものなりと
て馬琴の著書よ句讀多きと悪さまよ云れ
と時拙者傍へ在りて之を聞き居たり予
ハ即はち馬琴なり因て「ひとまははてよて
くびへ。はまるほどの。じゆす」と書くべ
きなれど試みよ句讀を入れずして認めし
なり然るよ果して此如き思ひ違ひを生ト
嗚呼なる業を出かされしゆへ和文章に句
讀の要不要論より證據此一事よても分
りしならんト態と事を設けて示されしに

付き珠敷家の閉口して遂に只後悔の外無
りしと馬琴翁が手記を見えされ今其意
を摘で記しましたるが併し如何な物既歎
きやうばしくほんはつてう
ぼりにてうめのよこて
うのてうちんやのちやう
じふらうよりこびさちや
うのまんじだうへおくる

古今髪の結び分け 在横濱 林泰翁

サテ拙者の年老て既七十を越ゆるもよ
々れと未だ己が天窓の蠅も追ずして人の
頭を彼是云んとするの畢竟己が頭も只一

筋のチヨシじるしさへ無きゆへ兎角他の
頭も難癖付て先云んとするが我癖ジャと
此も其結分の口上と述ぶる

○剃下奴

男子の髪の結び
振りへ昔時織田
家の記録などに
「將軍上洛の所



信長一國を令し
て曰く 信長に同心せんとする者の月代を
廣大にして頭の半を剃り而して下髻ます
べし云々」成る程當時の書を見るも髪の

皆盆の窪の邊にて丸め束ねてあり併其頃
より後の甚はだしくなりて次第又剃り下
げ遂に糸髻さへも出來る程に至りたれ
ども亦其人物は依りての事ゆへ強ち移り
變つて髪の様を皆崩したりと云ふにいあ
らず此奴の矢張り此奴まで久しく世は行
はれ就中 元祿の頃の江戸の材木屋など
も最も多かりしゆへ此髪の風を指して俗
よ材木屋風とまでも云ひはせし由され
ばはや今東京深川區の木場邊に現る百
人の内一二人位は此天窓が見ゆる様に思
へるなり

○島田髻

東海道名所記 と云ふ書に馬かたが。島
田のことならば髪を結ひたる事を讀み給
へど云ふに心付きて「旅籠屋の女の産の
つくも髪をせめて島田にゆるよしもがな」
と讀みたり又春元が發句は一名はゆふや
氣にも嶋田
の柳がみ
など、あ
り島田曲
にも昔時より種ありて「一代女」と云ふ
書はつとなどのなげきまた。隠し結ひの



淨世もどゆひ云々又「女重寶記」と云ふ書
 大島田より今はやるやつし島田此外種
 結やうあり又わきつめのやつし島田ハ
 鬚らしく。目に立つ振り袖の。かうがいわ
 げハおとあぶりて異なるものなれば宜し
 くそとく結ふべし然れど島田或ハ
 又かうがいわけどもに高きハ田舎めきた
 り云々とあり。今茲はわらハせしハ俗に
 鍋町島田と云ふ形あれど兎に角只島田わ
 げと云ふハ元和元年大坂落城せし前後の
 頃より殊更ハ流行し鄙も都も結ぬハなく
 して今日に及びしものなりと云ふ

籠すること一七
 日殆ど満する夜
 又至り夢ハ女子
 を授け給ふと見
 れハ忽ち覺めて夜ハほの
 くくと明たり因て只何と
 く一心ハ其奇瑞を禮拜して
 家に歸り彼の觀音の靈夢を
 内室ハ物語りしたる後果し
 て其頃より懷妊せられ追々
 月も満ちて輕々と安産な
 りましたのハ前會も申す



此外男達の頭や又奥方の頭がわれと餘
 白が赤いゆへ大會でおおふら下げ升

古今佛々叢談 其日暮の大曹上

○中將姫の話

人皇四十五代聖武天皇の御宇ハ右大臣横
 佩豊成と云ふ人がありましたア此人ハ抑
 々大職冠の孫父武内麿と云ふて才智藝
 能有て君へ事へ民を撫し心意正直あるを
 以て聖武天皇ことごとく御寵愛遊ばさる
 故ハ百官ハ於ても亦此人を尊敬す然るハ
 年齢三十にして未一人の子も無いゆへ深
 く之を愛ひて彼の長谷寺の觀音へ祈り泰

通り實ハ端正有相と謂つべき玉の様ある
 女子にして宛も天女の生れ代り玉ひしよ
 やと疑ふ計り實にハヤ娯善上等天下無双
 無類無敵頗ぶる飛切りの別嬪あれハ今時
 ある中の上位でハなく上の上上なれど
 先づ其名をハ中將姫と名たり時ハ父母の
 寵愛淺うらす追々成長ハ隨ハ春ハ吉野の
 花の鐘秋ハ北野の紅葉と時ハ寄せ事によ
 せて寵れハ愛しみ玉ふ然るハ中將姫ハ何
 時歟世の無常なる事を感じてやうき世と
 此ハ捨て小舟二八の年の夏の頃我家を忍
 び出る月の蔭ハ其儘當麻寺の僧正の許へ

便り直ぐ剃髪して一ツの草庵を設け一日
 に三卷ツ、浄土經を書き寫す事都合一千
 卷と成たれば最早此上の生身の彌陀を拜
 まばやとて更に大願と起し食を斷ち一必
 不亂と祈念して居る所へ風と何れよりか
 年老たる尼忽然と姫の前へ顯れ「我の西
 方より來りし予。イヤ汝は極樂の莊嚴を
 寫して拜せんと」云れて姫の飛立ばか
 り是非とも拜させ給はれと云ふよ老尼の
 打は、笑み開け百駄の蓮の莖をもどめよ
 とて差圖ありしゆへ姫の直ちに父豊成よ
 文を送り頼むと其三日目よ數多の蓮の莖

を差越しより因て姫の老尼と共よ此蓮の
 莖を以て糸と取り井戸の水よひたして糸
 を染め日數二十三日目よ至つて糸も既よ
 染上る折柄とこども亦く容顏美麗ある頗
 別の婦人が尋ね來つて最早糸も出來上り
 しか然らば今夜より織るべしと教へらる
 因て又當所御堂の乾の角にて織はトめん
 と姫の燃火の用意ととして既よ準備も調
 ひたれば其夜三人よて亥の刻より丑の刻
 までに全く織上つたり然るよ若い方の婦
 人の忽ち菩薩の形と成り光明かく々然
 として紫の雲に折乗り歸り玉ふゆへ老

たる尼も將に歸らんとする所を姫の深く
 名残を惜しみ強て推止むるよ依り老尼曰
 今何をか隠さん我の極樂より來り彌
 陀如來なり。アレ今彼所へ歸り行る、ハ
 觀音菩薩なり汝是より十二年の春と過ぎ
 て其年三月十四日よ死すべし故よ其時汝
 の迎ひよ來るべし必ず一菩提心を脩め
 ヨと言葉終るや否金色の如來と成つて忽
 然西の方へ歸り玉ふ姫の益倍あり難涙
 よ袖をまぼり伏拜みつ、彌々菩提の業を
 行きひ遂よ寶龜六年三月十四日年齢二十
 九歳を一期とし樂々と端座合掌して往生

と玉ふ是即のち中將姫が菩提心を以て身
 を終られた事柄よて其謂れ因縁の委しい
 事の中々長いもへ茲に省きますが若し
 モット知りたくは當麻寺へ往き其縁記を
 見れば能く分る。儲今云ふ菩提との離欲
 の字を明むと讀み離るゝと讀む離るゝハ
 貪瞋痴の煩惱を離るゝと云ふ義理よて又
 明む時の貪瞋痴を法界と明むる義理で此
 貪ひむさばると云ひ瞋ひいがるど云ふ痴
 の愚痴よしてひがむ心が絶ぬを云ふ總て
 人ハ此貪瞋痴の三ツから起り或ひ邪見
 或ひ疾妬と種々様々の心と成り終り八

万四千の病の問屋とある底で我思念を改めて一心を願へせば一旦死んで蘇生した様お煩腦即剃提と成る底で又只今云邪見の事で一寸したお話があるテ。頃ハ天祿年中の事よて出雲國松平山羽守の母君で瑠臺院と云ふの剃髮して平生念佛三昧ま居らるゝ所の召使ひま於玉と云ふ生れ付き邪見なる女が有て或る時風と頭の髪の中の少し瘡が出来たれど人の面も見へぬゆへさのみ苦よせせして居たがサア夫れが追々ニヨキ〜と長く成て既よ五寸程にあり其瘡の肉が段々無くなッ

て見ると全く骨ばかり残ッて鬼の角の如くなれば人の前も耻かしく如何いせんと思ふ時瑠臺院ハ於玉に厚く意見を加へ其方ハ平生邪見なるゆへ佛の戒しめ玉ふ所にて其方が頭の角。生あがら鬼となりしハ前の世の悪業も亦此世へ報ひ來たに相違ない故よ今より佛よ向ひ我罪過を懺悔せよと我剃髮の時授けられ懺悔の文を教へたり(其文ハ今茲よ略す)底でお玉ハ毎夜一心よ佛を拜し懺悔する事凡一年半程たち或る日瑠臺院より菩提所へ袈裟を縫て納める筈よて其雛形を拵へお玉よ渡

し其方の宿業を滅する爲め佛を念じて之を縫へヨと渡されしかバ有り難く心得て身を清め一心よ懺悔の言を唱へながら右の袈裟を五日程掛ッて縫上らうとする時頻りよ眠りを催ふしうつ〜とする内豈鬨んや頭の上の角がころりと袈裟の上へ轉げ落ちたのを見てお玉ハ驚然夢でハ無い歎と首振り廻し。驚愕。首振。くびふり。びツくり。ア、有り難や〜我昔所造諸悪業と思はず知らず大音聲よ唱ふれば其聲お驚ら瑠臺院も駈付けて見ればおたまのあたまの角が落ちたゆへヤレ歡をし其

方ハ能く我教へを守り一心に懺悔したゆへ佛も感應よしましたのである先つ其袈裟を早々菩提所へ角と共に納めて來ヨと厚く教訓しお玉も亦邪見の角全く折て生涯瑠臺院へ事へて後剃髮し安々と此世を送りましたの當時事實現在の事であります何と寄り合話を見聞さる、此席よ決して邪見のお方ハあるまいが能く諺言よモナヨツ又内の山は神が角を生シヤアがツと云ふが女房の角ハなよかで叩き折れト狂句よある通り例の角ハ時よ依て出たり引込んだりするがお玉の角の様よ

なるどコリヤ容易事での其角が折れま
 せんテ故又邪見の種あるしハせぬ様よ心
 掛けて此世を安く送りまへ然すれば若
 し善男の子を欲しいと思へど智慧も福德
 も具ツ男子を設け又善女子を欲しいと
 思へバ奇麗な愛敬のある女子を設くるハ
 自然の道理で親の心は邪があれハ其邪ん
 だものが殖るども滅るもので無い又昔か
 く観音又祈ッて善子を授けた人ハ其例少
 なかつと雖も彼の邪見の心を持って居な
 がら之を祈るとも何ぞ神や佛が夫れを許
 しませう故又前會も申した通りソレ

宿植ニ徳本と云ふ次第でござる
 情諸君より我輩投書する者杯でも能く
 天狗と云ふ言があれど一体全体天狗と
 云ふ者の有るか無いか之を説教せよ。
 又何時も團子と喰へバ彼岸と思ふトハ
 云ふもの、彼岸とハ何の事ジャ。おど
 く種のお尋ね事が来て居りますすが中
 々何もかも一篇の述べ切れませんや
 へ次會ハ先づ天狗の話を持出しませ
 う其次ハ彼岸と歎又其次ハ何と歎何で
 も區切を付けて續きものとあらぬ様一會
 又一説ツ、順ハ説き立てませうが追々

と妙な言を吐き出す歎も知れませんか
 ら其お積りでお聞き下才

三人寄れば何ぞの茶話

○政黨 高知 運野新一

政黨とハ志ざしの同じき人の寄集まりて
 政治の事を評議するをいふなり。決して
 悪き事をするものゝあらず。然るに昔時
 から日本や支那の習ひとして。徒黨とさ
 へ言へバ悪き事を働らく爲めの寄り合ひ
 のやうな言なしけるゆゑ。今日となりて
 も未だこの習ひの脱ずして政黨といふ徒
 黨を組立とを見て。矢張悪き事を謀る

爲めならんと思ひ過まりて云觸すハ非が
 言とや申さん抑々立憲政治とヤすものハ
 上と下との權限を確と定め。國會とて日
 本全國中の物大寄合を開き。百事を相談
 する物代人即ち國會議員を。三千五百万
 人の多勢の中から。學問も出來。智識もあ
 り經驗もあり。能く道理と弁へて居る賢
 人君子を撰び出し。國の法律を定め租稅
 を増したり減したりするなど。悉皆國會
 の評議に依て定むる仕組を申すなり。去
 らバ日本も來る明治廿三年ハ。國會を
 開くといふ有がたき大詔あり。此有がた

き大詔は對して無我無中の人のイザ知ら
 せ。心あるもの今からその準備を取掛
 るの勿論のとあるべし。其準備との如何
 なる事かと尋るよ。則ち各自が好く所の
 政黨に入て。己が幸福を全くせべき政黨
 の人をして。太政大臣ともなし参議とも
 なして。天下の政事をなさしめんと勉む
 るなり。西洋文明の國々よて政黨の盛ん
 なる有さまの實は譬へんものなく。雜と
 言へる角力場の如し。東西南北を奔走り
 て政談演説を開き。或ひは新聞雜誌を發
 兌へ。政治上の議論を闘わす力士あり。又

甲の政黨乙の政黨と言張る道理の良惡を
 聞け。其勝負を見て己が最負の政黨を
 助け。輿論の力を添へて勝を取らせんと
 謀る人あり。底で行司の役廻りなる政府
 の勝を占める全國中の最負角力の方へ團
 扇をあげて政黨の交代をなさしむるな
 り。何とこの仕組に至極公平のことなら
 ずや。去れば我日本の大相撲即ち國會の
 開くるも今より八年の後始まるよ。此八
 年の光陰を等閑に過し下稽古の準備もせ
 ず。其土儀入の場合もなつて周章狼狽。足
 元から鳥の立やうに俄に土儀登らんと

し。又見物人も下稽古も見ず居る時
 迎も方士の強いか弱いか。その勝負をも
 見分け難し。若し輿論たる見物人が角力
 不案内なるより。行司が團扇の揚方を間
 違へるとあらば是れ誰の失策なるか。
 只兩國回向院の角抵なれば。團扇の揚や
 うは誤ちがあらふとも。我々何の差間
 へなきも直ち我々の頭の上よか、る。
 政黨の勝敗も團扇の揚違ひのあらんお
 の。其不幸如何斗りか。世の人々よ。政黨
 を見て向ふ河岸の火事と見做し給ふを

何處の店でも少し大な店よ。主人計り
 での手の廻らぬより番頭を置き手代を抱
 へ丁稚を使ふあり。此丁稚は十二三から
 其店へ住込み。追々生長するに従ひ手
 代もあり。夫より番頭にまで出世するも
 のなれば。丁稚を抱へる時主人も丁稚
 の親達もよく考へ。此子ならば呉服や
 向くだらう。是ならば唐物店も宜らう此
 位よ端が働けば書肆も出来るで有うと
 云ふ如く。一旦見込と立しからの未々ま
 でも能く勤めあげ。暖簾を分て貰ふ積り
 で住込み。抱主の方でも首尾よく務めた

○役所の丁稚 東京 稻村省造

ら店の一ツも出して遣る丁箇ゆる。朝早く起て店の掃除から火鉢烟草盆の世話。ッレお茶を出せ。ヤレ履物を直せ使ひよゆけのど賤しき業をもさせるもの。其間に手習ひをさせ算盤と教え。尙よく手の届く店での夜學校へも通ひせる等。一人前の眞人間とする迄の主人も随分骨を折るなり。然るよ丁稚の中にて一種異りたるもの、役所の丁稚なり。名の小舎人とか給仕とか立派なれど如何あるとするか、聞けば、役人のお弁當。お茶。烟草盆。手紙の使ひ。名刺は取次。書類の遣

り取り。杯の外、別段の用事もあらず然れども其遣遣る、事烈しきゆゑ。寸時でも卓上より倚て物書く術を學ぶことゝして置き。我弁當などの時間外に喰ふ事常なり。此如きは敢て使役方の善しからざるに非ずして。必らば極繁務場所なるべしサア是が商人の店に居る丁稚ならば。小使同様に使ひられても手習や算盤の申すまでもなく。其使はる、こと。悉皆商賈用の事ゆゑ。少しツ、其道を覺へ。駈引の如何なるもの。取引の斯様なこと、自然に商賈を覺へて。廿年位も成ると随分店の

掛引も出来るなり。之に反して役人の仕事の見覺へ聞覺への學問での中々出来るものゝあらず。法律なり。經濟なり。十分ある學問と見識との入用あつた。お給仕は丁稚などが百年見て居ても覺へる譯にあらず。況して此丁稚が多く、怠惰者も於るをや（因に日舊新治縣令たりし中山信安君が茨城縣令に任れし時豫て愛育心を以て。縣廳に日勤せし給仕十人を二十人に増し。而して更に隔日出勤を爲したれば。其親々等の内より自然給料の日數も應トて減ぜしを彼是と恨みし者もあり

しとかや。去りながら爾來の出勤外一日ツ、ハ全く脩業の餘暇あるゆゑ。尋常日勤の者より比較すればマア貧士族の子息杯をして。傍ら食料を補ひ。兼て應分の脩業をもなさしむる兩便より宜るべけれど。是迎も亦止を得ざる姑息手段として且其長官の注意も出でしことゆる。素より此如き使ひ方の世間「諸縣敷」一般及びばせしものより無るべし。然れば現今東京の諸官省のみよて此丁稚を仕て居る者凡そ二三百人よりハ少なからざるべく。若し全國中の諸役所を概數で見ると

の。随分千と以て算へる程も至るべし。此の丁稚もよく教えたからば相應な人間も成れる者を。其親等の如何なる見込のありてか。一月は僅か三圓か四五圓の給金を取せて。可惜稚木を材木どころか。炭も薪ももならぬものよして朽果さしむるの誠又嘆かひしき次第ならずや親の見込恐らくは本途の官員又仕上ると云ふ了簡なるべし。本人の丁稚も亦是も外ならざるべしと雖ども。其本人の幼者ゆゑ何の分別なく。只朝から晩まで働らく商家の丁稚などよりも。其正味の勤め時間の

早くて朝八時より遅くて午後四時の柏子くまで水迄なれば。其苦勞大いよ薄し。此苦勞少きハ則ち怠惰者となるべき証據あれど。其を真き事と思ひ居るハ又幼くして分別なき者なれば是非もなし。故も少しく親よ心得ある者ハ假令官員又成さんとするも。先づ相應なる修業をなさしめて。然る後其本人の性質又適當すべき業務又就しむべきものあり。敢て御役人又仕上んとするを惡しと云ふべきも非き。其子を育てる親の見込の宜しからぬ弊あるを云ふれば。兎も角役人の味ひを知ら

ぬ親等の勿論。是を知る者と雖ども底よか氣の注れぬ人の宜しく意すべきことあり。支那の學者が彼の人の子を傷なふと言れたるも。是等の誠言よやあらん歎

○善國との何ぞや 大坂 中林秀雄

凡そ地球又種々の國々あり。其が中よも善國と語る、もあり。悪い國と申すもあり。誰とて善國よ住て安樂よ一生を送らんと思ひぬ者ハあるまじ。然れば如何なる國を善國と唱へ。如何なる邦を惡き國と云ふ歟と尋ぬるも。大なる國を指して善國と言ひ、亞非利加などハ其國たる。

日本や英吉利を十も二十も集合たてて及ばぬ程の大なる國柄あり。去れど其國の中に沙漠もあり野山もあり。沙漠にハ旅人の群を爲さねば通行もならぬ程の不便あり。又野山にハ猛獸など多く住で人に害を加へ。法律ハ固よりの事。風俗も甚だ宜しからず。その人々の皆蒙昧ものみにして。始終争ひを止る時なく。少しも安樂の國ハあらざ。去れば土地の廣き斗りにて善國とハ申し難し。また土地が豊饒よて景色のよきとて夫れが立派な威と言ハ。日本あぢの土地も豊饒にて四方

の海なり。随分風景もよい國なれど。彼の徳川時代の有様を回顧れば。其頃平民の丸で人間の様でなく見做し。幕府の威光で壓制つけ。政治も無理のみ多く。下は立つ人民の一旦氣を悶やして自由にならんとは少しも思はず。遂に泣く兒と地頭よの勝難しとの。可哀き語言を爲すに至れり。武士の斬捨御免といふ何の寄ごころもなき理窟を付け。あはれ人々を酷き目に達せても何の沙汰なく。加之ならず平民の如何なる器量ありても生涯よき役目になりて。政治に関かる如きは思ひも

寄らず。何事も一切政府任せと言ふやうにて。益々上へ壓制を極め。實に安心ならぬ世の中なりき。畢竟は人間の知識が開けず随つて政治が悪く。自由など、云ふ事の夢も知ざりき故なり。シテ見ると如何に土地が豊饒なりと云へ。言ひの實を溝渠の中へ捨置くと同様なれば争でよい國と申すべき。去れば如何ある國ぞよき國なるかと問へば。先づ人民の智識が開けて政治のよく行届き。些しも壓制がましきとなく自由安樂な暮せる國こそ眞實の善國あり。如何となれば政治

の悪き國よての善制度のあきより。心悪しき役人達が勝手な事をなし。人民が汗氷垂して稼いだ金も。鋤鋤擔いで収た米も。追々よ絞取り取り人民の迷惑言はん方なく。夫れより政府と人民の間が折合悪く。遂に戦争が起りて國中乱れ。結局其國の滅亡たる殷鑑の古家より随分あり。その政治の悪さも外でなく全くその國人の智識が開けぬに依れり。夫れ引換ひかし亞米利加國の英吉利國の所領なりしが。餘り英國よて壓制をせしかば米國人の大いよ怒りて戦争を始め遂に獨立國と

なり。別によき政治を立て國を治め當今での世界中で一二を争ふ程のよき國となれり。是れらの國人の智識が開けて自由を賞ひ。よき政治を立てるに依れり。左れば善國よ住て安樂に一生を送らんとなら。第一よ奮發勉強して各自己が智識を研き。よき政治を立て安樂にならんと思へ。其時こそ豊饒の土地の益々豊饒になり。農業にまれば商業もまれば共に盛んよして。實に自由富強の國となり世に生れたる甲斐あらん。斯てこそ始めて至き善國と申すべけれ

祝詞

面白 叢談 寄合話ノ發兌ヲ祝ス

在東京 鶴谷山人

諺ニ曰○播カヌ種子ハ生ヘヌト實ニ然リ○
三千年ニ花咲テ三千年ニ實ヲ結ブ西王母
ガ蟠桃モ元ハ一粒ノ種子ヨリ生シ八千歳
ヲ春ト爲シ八千歳ヲ秋ト爲ス○ズツト昔
ノ玉椿モ失張リ一粒ノ種子ヨリ生セリ○
吉野ノ春ノ山櫻○立田ノ秋ノ川楓モ亦是
レ種子ヨリ生ヘザルモノナリ○嗟哉知友
萬字堂ノ主人ハ先キニ話ノ種ヲ詞ノ林ニ
播キ今茲ニ面白叢談寄合話ナルモノ勃然

トシテ其新芽ヲ發ス○嗚呼何等ノ快事ゾ○
聞ク旗檀ノ樹ハ嫩ニシテ馨シト○余輩亦
謂ントス○叢談ノ書ハ一冊ニシテ面白カ
ラント○而シテ又切ニ望ムラクハ○此書漸
ク成長シテ永ク世上ニ榮エンコトハ三千年
ノ桃ノ如ク又ハ八千代ノ椿ノ如ク言葉ノ
花ノ咲キ出テ、人ノ賞譽ヲ享ンコトハ吉野
ノ春ノ櫻ノ如ク立田ノ秋ノ楓ノ如ク以テ
將來都鄙遠近推童延子ニ至ルマデ寄合話
モ鳥ガ啼ク東ノ都ニ名モシルキ萬字堂ヨ
リ出版セル面白叢談見ズヤハアルト本局
アテ、鋸ノ刃ヲ摺ル如ク木挽町○一丁目

狂詩

先祖傳來寶 豐後 直入生

從レ親讓受何物貴。是此珍寶

秘所深。今日縱爲ニ身代限。不

費股間囊中金

香水評 臨命終時仍隨

盜難

全

深閨有花在三親。傍○春情雖レ動

未レ放レ香油斷火敵隣家。悴○何

時解レ紐箱入娘○

香水評 隣郎解箱紐娘亦自解我下紐

寄ニ萬字堂

蝶舞園 匪猫

出度六番地ノ書林ノ榮ヘテ祈ルニナン
横濱 灣々堂

今度寄合話の出板を祝して

面白奇はなしの種をもちこんで

今日寄合ひを開く楽しさ

商賈ハ萬事をはげむ木挽町洗石よ

客のひツきりもなし

金春 おやま走海

粹あか方の寄合ひばなしきツと面白

そらだらち

話の種くら芽の出た蔓よや料な詞の

はあが咲く 兩國 東仙房

螢雪餘光試投書。欲寄貴店
恥粗疎。乍去拙作。勿處沒。古
人有言自隗初。

香水曰 然故自今待千里之名作

孝女賣身

全

容歲父作野邊煙阿母就床
已三年。欲煮飯米絕五合。思
迎醫家無餘錢。一碗素粥含愛
進。半帖汗藥乍泣煎。貧極賣
身。真下直。結着代價正百圓。
香水曰 處女容姿美醜如何知之
而後予又有所思

題好男子堂+史寫真

橫濱

澤の穂垂

石見堂々士。滑稽家隊長。被
寄祝。真影。柔和如娟娘。

香水評 信偽如何難保証

見穂垂君之寫真

石見

堂々士

何女惣相面。容美又風能。始
知尊名起。每晚響應燈

香水曰 評同前

代少女呈劉郎

全

難哉戀路坂。焦慮事皆空。郎

乎幸母厭。粹有辛苦中。

香水評 結句何等好文字

婚姻

全

銀燭如畫酒肴佳。合盃成盟
喜可思。花嫁此際心配多。大
少難推。鞞殿鼻
某評 助倍偶吟

澤の穂垂

造化機論。意味深。圖畫萌情
最難禁。直招荆妻。催添臥。共
覺美快。和腎心。
香水評 無妻者如何

都々逸

「ふかい議員と鹿瓜らしく言ってもお智
恵ハ浅い人 寒水石

「政治の四想の五想の言ッていらぬ九楚
うを嘗る奴 頓智喜

「ほれたほの字ハ何むらのほの字燃ゆる
思も無理ハない 轉苦樂

「主の浮氣の夢見た朝ハ醒めた後また興
さめる 全

「月も二人が素振をさッし粹をとほして
雲入る 山走海

「頼む方ハ梢よひとり頼まぬ月めがさ

し昇る

全

「斯も妾しん思ひの絶ぬ胸の苦勞の無盡

藏り

三日坊主

「月と穂の字と招た薄き今いふるやの櫓

に朽ち

松の家

「譯も言ねば子細も告げず何が不平の御

立腹

富士山人

「薬のめまの用心シヨのとわしが病の根

もまらで

久の市

「主に覺へがあるゆへ明けて言ひぬ先

までくぐり門

加藤行永

「其様な言譯するのの駄目よ主が主あふ

妾も妾

全

「主に欺され獨りで寐れば水鶏めまでが

来て欺す

南無山坊

「何よもしらない妾も向ひあかせの云の

と無理斗

典舖小僧

「共にくろろを仕て見る程も包む私よか

聞のせき

全

「千歳變らぬ二人が中へ末に實と持つ青

松葉

「お前の色だと言ひれてパット赤らむ眼

尻もさがり藤

全

「赤い仕掛をたすきに代て主とくろろが

去て見たい

全

「一寸暫しのアイウエオくら直ぐと浮名

のクナツテト

全

「心石盤氣の石筆よ合て嫌しの西洋算

只野 權助

「そんな心と露ほど知らば雨の降るほど

通やせぬ

全

狂句 (獸類) (鳥類)

○獸類の部

なま真ひ杯と羊の喰わぬ紙

灣々堂

化かす氣の狐の聲を立す啼

全

鍍金の入齒で狐めが喰られ

全

「ナクで犬も喰ない喧嘩をし

「嫉妬の牝鹿角に亦枝を増し

「夜這とる鬼が引する虎の皮

「子を鬼よする狼のやうな母

「芝居する猿も劣る無學の子

「戀猫のやつれて眠る椽の先

「虎の牙さへ立かぬる孝の肌

「お茶うけに晝寝の夢を猿が喰

「世へ不思議夕のギウが朝の馬

「似た物を殖す氣で飲む牛乳

「書置を書て鮎の尻をばたれ

「甚い和尚虎の子を取て喰ひ

全

穂 垂

全

全

曉 雨

全

全

佛 荷 庵

全

全

き つ ね

香 痴

集會を小金が原でする野馬 迷甚太樓
 猫根引されて唐又寝また化 全
 朝馬を連て孫々する野呂馬 全
 狐ゆへ馬を連るも道理あり 全
 地獄へも時々のる白鼠 典鋪小僧
 狐をば買ひ朝になり馬を連れ 全
 ○鳥類の部
 鴛鴦の陸みを羨んで覗く月 佛荷庵
 口へ灸すへて遣たい明け鳥 全
 朝起の身ハ鳥金杯からす 穂垂
 厂の行義も人もむつみたし 全
 人好のする鶯も數から出 全

慈善家に居候する乙鳥 全
 鳥社會勅任官と雲雀しやれ 曉雨
 啼く乙鳥見世も積だる束錢 全
 鶴の見世物見物も長いくび 灣々堂
 花嫁が泣こんだ頃雞がなき 香痴
 女房の夜鷹宿六晝どんび 全
 摺鉢のばち前へ来る三十三才 きつね
 周の世ハ風凰空よ群て翺ひ 全
 教育ハ爲せ山雀も仕付よふ 典鋪小僧
 啼て見せてハ愛され籠の鳥 全
 目的が鳩の嘴で厂が殖へ 全

漢語 讀入 都々逸 加藤行永

胸の烟りの閣下の事を思ひ駿河の不二の峯
 「君が嫌疑も理なきに非らば約束事實を知らされりや
 爲と思つて忠告したヨ忌諱に觸れたら海海あれ
 「盡ぬ思ひハ亞弗利加州も曠き佐原の砂の敷
 「其様過激も出でさいとて事も事の條理のわかる事
 「獨坐寂く君待つ程よこんど知らせて鐘の聲

「知らす何等の源因あつて殊も今宵の歌も出ぬ
 狂歌 澤の穂垂
 逢戀 ひとすじよ結び初めたる下紐の解て嬉し
 き夜半の陸言 全
 猫 色けづくうちの牡猫もつま定めとれも尻尾の長し短し
 雷 雷も彼の仙人よさらひてや雲踏みはづし木のまたに墜つ

漢學者

向水生

漢學者五倫の道をよく説く。一錢ほどの算勘もあつ

萬字堂

加藤行水

萬字堂下から讀めば。字萬堂姓の淺井として。慾の深けり

全

典舖小僧

萬字堂より積つて。山とある送りし文の。没のたまりて

没書

上氣舍

没々と積る木の葉の天狗状どり扱ひも重からぬあり

袖乞

典舖小僧

藝の身をたすけるもの。の不仕合せ彼の四ツ辻に座する老婆の

船

澤の穂垂

もやひたる船の明るし夏の月板子の上も地獄を不見る

結納

全

結納よおくるするめと見るよつけわる足多き嫁とこそしれ

滑稽政島一週奇譚 (前會ノ續キ)

向水生稿

齡ヒ四十チ小餘緩ノ。五十モ今ニ稍近キ。

カ。此日モ例ノ茶ヲ煮ントテ。自ラ端山ニ

赴キツ。枯木ノ枝ヲ拾フ折カラ。柴樵ル童

子ノ二人シテ。何ヤヲ頻リニ語ル者アリ。

酒瀟軒風雅ハ其ガ傍ナル。松ノ古根ニ腰

ウチ掛ケテ。ソチ餘所ナガラニ聞キケル

ニ。豈圖ンヤ童子等ガ。頻リニ喋々語レル

モノハ。皆ナ是政治ノ可否ヲ論ジテ。其得

失チ述ベヌハナク。政黨各派ノ組織ヨリ。

主義ノ優劣邪正ヲ談ジテ。餘念ナゲナル

有様ナルニ。風雅ハ打聞キ感歎シツ。胸

裏大ニ悟ルガ如ク。獨リ熟ラ思ヒケルヤ

ウ。實ニ世運ノ開化スルコト猶ホ斯クマ

デニ神速ナルカ。昔日ハ上チ語ル可キ。中

人以上ノ方々サヘ。知ラヌガチナル政談

チ。斯ル野山ニ抹刈ル賤ノ童ガ喋々ト可

否得失ヲ論辨シテ。最ト樂氣ナル容子ハ。

時世ノ風トハ言ヒ乍ラ。實ニ殊勝ナル一

ニコソ。夫レニ引カヘ我が身猶ホ。五十ニ

足ラヌ齡モテ。此片山家ニ世ヲ抛チ。月ト

風トナ樂シミテ。自カラ足レリト思フコ

ソ。愚鈍ナリケル考ヘナリ。人生纔カ五十

年ト言ツタラ短カヒ様ナレドモ惜シキハ

死後ノ名ニコソアレ。此儘此處ニ朽果ナ

バ。尾上ノ落葉谿谷ノ苔。誰カハ我が名チ

知ル者アランヤ。男兒必竟大志ナカラン。晩暮ト人ノ譏ヲバツシレ。我が身モ今ヨリ奮發シテ國會コウト鷄ガ鳴ク。東都ノ空ニ名ヲ轟ロカシ。日本ノ男兒洒瀟軒風雅ト人ニ知ラレテ得ズ止ムベキ。ト俄カニ名利ノ心ヲ起シテ。此日ハ慮ニ歸リシガ。夫レヨリ忽チ風雅ヲ抛チ大ニ政治ノ思想ヲ懷キテ。自ラ任ズル一個ノ政治家。傍ノ小池ニ鮒魚ヲ釣ルニモ。尙ホ生殺ノ柄ヲ樂シミ。奥ノ一室ニ棋ヲ圍ムモ。亦戰争ノ心ヲ喜ビ。兎角ニ山家ノ棲居ヲ厭ヒテ。疑リニ都會ノ風土ヲ慕ヒ。獨リ自カラ

思ヒケル様。斯ル慮ニ何時マデカ。斯ク籠居シテ居ダトテモ。二度ハ愚カ一度モ願ミ來ル惣理ハアラフ。再ビ得難キ此時ニ。一度都會ヘ到ラズバ。争テカ高名手柄ヲセンヤ。ト日夜ニ心ハ急躁テドモ。又如仙人富隠士ナシト。世ノ諺ニモイフ如ク。旅費ノ金ノ出來様ナケレバ。如何スルコソ宜カラント。切リニ夫レノミ案ゼシガ。風雅ハ工夫ヤ付キタリケン。俄カニ一日出行シガ。頓ガチ一人ノ植木屋チ。自カラ廬ニ連レ歸リテ。門ノ五本ノ柳ノ樹モ。丸窓外ノ芭蕉ノ株モ。檐端ノ松モ。臭竹モ。皆

ナ悉ク堀トテセテ。彼ノ植木屋ヲカヘセシ。後ニ風雅ハ獨リ含笑ツ。漸ク之レニテ旅費ハ出來タト。心大ヒニ歡ビナシ。夫レヨリ紀行ノ準備ヲ調ヘ。居馴レシ故山チ跡ニシツ東都ヲ指シテツ起出ケル

第二回

宿モ風雅ハ日ナラズシテ。東京ニ到着ナシ。宿チ銀坐ノ旅館ニ求メテ。先ツ第一ニ志ガス。自由黨ニ加入セントテ一日己ガ旅館ヲ立出。同處三丁目ノ十九番地。寧靜館ニ赴シト。其近傍マデ至リケル時。向路ヨリ來ル一個ノ壯士。年齢マダ二十四五

ナルベキガ。威風凜凜トシテ駭チ畜ヘ。一見平人トハ思ハレヌヨリ。洒瀟軒風雅ハ心ノ裏ニ。天晴ナル人品骨格。是コソ自由黨ナラント。思ヘバ我レカラ禮ヲ厚クシ。其人ニ向ヒ問ヒケル様。事甚ダ卒爾ナガラ。御身ノ容貌ヲ見受ケ申スニ。中々平人トハ思ハレ申サズ。必ズ自由黨員ナラント。推察仕リテ候ラヒヌガ若シモ果シテ然ランニハ。御身ニ聊カ願望アリ。ト最ト折入ツテ陳ベケルニツ。件ノ壯士ハ。途中ニ於テ。見モ知モセヌ田舎漢ガ。我ニ向ツテ何事ヲカ。事々シクモ尋ヌルカト。思

へバ心可咲ケレドモ。左アラヌ休ニテ旅人ニ向ヒ。何事ノ御頼ミナルヤト。言ハレテ風雅ハ傍ニ進ミ。何チカ包ミ申ス可キ。固我輩ハ山間ノ者ナリシガ（餘白ナキチ以テ其子細委シクハ次會ニ於テ皆申シ上

○寄合話出版延期の理由

寄合話ハ第一會を發せし以來茲又數月を経て第二會を編みし其編輯の遅延ある非也又發兌の不手廻しあるももあらずして唯其筋の濟むと濟まざりしとの云々あるのみ故又看官此儀を諒察せられ初會

より二會に至るの間は二月の時日を経過したるハ發行所の等閑はあらずして其事實止むを得ざる場合ありしこと、宥恕を願ひます。倍々寄合ひも追々込合の大入と相成り且段々人智の進む所あり隨ツて又少しツ、高尙らしくして最早畫さがしの考物でも有めへと歎字さがしの附會でも面黒くねへと歎自然彼でも無へ此でも無からうと更又第三會より

○いまい江戸の新聞（米世生三隻手）

○諺小説（井の中の蛙大海を知ぞ）

○外國奇話（結婚は奇妙な慣習）

○古今髪結び分け（伊達奴。講武所風。片とづし。藝者島田。洗ひ髪の種類）

○親父の小言（總計百ヶ條）

此外三人寄れば何々の茶話を始め例の其日暮しの大曹上が佛々叢談及び猶各地諸君が話題未定の件も種々あるべきされと先づ取り敢ず編輯又取掛りしもの丈け茲は一寸

（又諸君へ更告る）三人寄れば何々の茶話と題するものハ必ら第一會又三名を限り即ち三話を限ることとて甚だ其區域

の狭い様あれども是れハ落し話杯と違ひ兎も角も今日の實理と踏で話す物あれは多くの中の寄合話より殊更又取り分けし所以なり因て猶諸君の御投書あるも其事柄と其次第は依りてハ此中又編入するを例として追々書をも挿入で出しますすが何れも毎會讀み切り話のみを掲げて續き物ハ一切載せぬ事と極めました又今ハ昔江戸の新聞も毎會一話ツ、ハ出ますが猶江戸計りでなく田舎のも妙々物の別に出す様も致す等御投書の調査中踰唐追々増々御愛顧御評判を飽迄も廣く願ひます

廣告之部

島田三郎先生序 郡司篤信翁序 當士一月 野口勝一先生跋 郡司正名君著 廿日出版

日本醒眠論

全一册正價十六錢 但全國郵送料四錢 〇第一章 建國論「我が日本國の成立する

〇第二章 勤王論 勤王の志なき者ハ我が國民よあらざる事

〇第三章 時勢論「社會の風潮を見て邦家

〇第四章 卑屈論「甘んじて卑屈に陥る可らざる事」

〇第五章 習慣論「習風慣俗ハ從ひ方向と誤る可らざる事」

〇第六章 管見論「己レの説のみ主張して他人の笑ひと招く可らざる事」

〇第七章 自由論「天賦の自由を重んずべき事」

〇第八章 權利論「權利を失ふ可らざる事」

〇第九章 參政論「立法の權を得て善良の政治を

〇第十章 國民論「國民の本分を失ふ可らざる事」

附論(過激論) 健國。勤王。時勢。卑屈。習慣。管見。自由。權利。參政。國民等ハ係る諸論及び過激論共

總て今日ハ必要正當なる條件未嘗有の書也 發賣書林 東京木挽町一丁目 萬字堂本店

末廣重恭君演說 萬字堂出版 獨立政黨論

定價十錢郵稅受持 但シ郵券代用不苦 東京木挽町一丁目 萬字堂本店

同麻布飯倉五丁目 萬字堂本店

同村松町卅四番地 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

同濱田町三丁目 萬字堂本店

新聞雜誌 東京同盟組

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御方有之甚だ難澁仕候ハ付今般我々申無之

御名札

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

前金

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

御注文の方ハ例年の通り

全國同盟發兌書房

東京○大坂○京都○彦根○
 名古屋○半田○岐阜○德島○
 姫路○廣島○豐岡○竹田○
 和歌山○津○神戸○長野○
 松本○上田○福井○金澤○
 長岡○新潟○青森○弘前○
 秋田○若松○水戸○仙臺○
 石ノ巻○宇都宮○土浦○
 佐原○千葉○木更津○館山○
 甲府○前橋○高崎○浦和○
 八王子○小田原○湯本○
 伊香保○熱海○横須賀浦賀○
 厚木○横濱長崎鹿兒島高知○
 此外各地有名賣捌所數多あり
 餘白無さを以て店名茲に略す
 但し此類の書お求下さる節は
 萬字堂發賣の品と御尋奉願候

明治十六年十一月十四日御届
 明治十六年十一月十日出版

東京府平民 定價金八錢

編輯人 神田國藏

東京府神田區巖崎町
 十四番地

訂正人 菊亭香水

東京府平民

出版人 淺井橋治郎

東京府京橋區木挽町
 壹丁目六番地

東京京橋區木挽町壹丁目六番地

東京發賣所 萬字堂本店

大坂備後町四丁目三番地

大坂發兌元 岡島支店

横濱太田町三丁目四十九番地

横濱發兌元 萬字屋書店

驛遞局認可

菊亭香水校閱
 神田國藏編輯

面油
 叢書
 寄答
 第三會

萬字堂本店

面白 寄合話

◎ 面白 寄合話
 毎月五日出版。一冊定價八錢。五冊前金卅六錢
 十冊前金六拾八錢。全國郵税一冊一錢、

◎ 此面白 寄合話の表題の如く總て古人今人に拘
 らず其當時の一茶話に過ぎざるものと雖も
 或は可笑味あり或は悟道教訓勸善懲惡の筋に
 因り見るに隨ひ聞くに隨ひ又得る(原稿)に隨
 ふて録しものなれば 寄合話の目的與之を廣くと
 て毎會如何もの顯はれ出るやを圖り知る可らざるは
 我日本三千六百萬人の兄弟

居ながらにして其思ひ接する言を述べ廣げ又聞き集むるの主義なればなり然れば
 にや其各自既よ接し或は之を他よ發言せんと欲する事ハ順次この叢談よ載せ又他
 の心意說話をも見聞して更よ思ひ合する事と惜し或は十人寄れば十種百人寄れば
 百類よ違ふ所のものも感じ若しくハ一駁進激杯も皆是會話よ要する所の功能よて
 業既よ西洋文明の國よハ専ら中等社會よ流行するの書物なり故に今之を撰し採て
 以て此一書冊に編むコト寄合話の名ある所以也乞ふ諸君ヨマます云願を垂賜へ



米苞

米苞 二隻手

弘化未四年の事ありしが徳川御三卿と稱
 する内よ番頭役を勤むる某何の若黨十藏
 と云ふ番頭家よて川輩の婢女かよと云ふ

近在の産よて生質至ッて愚ある上俗よ云
 悪女の深情おれハ朝夕十藏の後を追ハ掛
 追廻しおまへ百まで妾シヤ九十九迄 銀
 やまの中までもト未始終未來を約し添ひ
 透る了簡よて只管實情を盡せしよ男ハ是
 を能い事と思ひ成る程上総房州婦人の夜



這ひとへ能云たもの實は五月蠅のわれど
己の様な者も足駄をはいさか幸ひ杯と大
着よも女の衣類の勿論前掛細帯糖袋まで
も借り出して質も置き何が我が別遊ぶ
所へ費せしものか今のかよも丸で裸の如
くよなり詮方なく同家の奉公を引退
さ先づ江戸の内親類のあるを幸ひ其
方へ身を寄せしし何ゆか妊娠の様子なれ
ば又其儘も居がたく因て彼の十藏と屋
敷より呼び出してかよ「十さん私のお腹
が此様よふくれた」十「ろりやア焼芋で
も喰ひ過ぎたららうかよ」アレサ戯談

じやア無いわ子。ろも逢ひかゝる始めよ
り末のすゑまで云かをし夜るの御浴をふ
かし辛。固い屋敷の八頭。二人ねいもの共
ぶすま。じねんと出来た此お腹。今さら里
辛へも歸ふれず。衣類も悉皆すり辛で。泡
の立程くやしいけれど。おまへの心を薩
摩辛。氣を長芋と今まで。待て居たれど
果し無し。一先茲を唐の辛としてお呉れ
か「十馬鹿ア云おさんナ。己も屋敷奉公
して居る身。今暇を取ての扶持ばなれ。先
兎も角も二三年辛抱して氣安く世帯を持
としやうが併し其様よ妊娠と成ての實よ

困るナア其許も知ての通り屋敷の奉公中
の寄合部屋に居る事なれば己の方へ引取
るさど氣の利た譯もゆかずハテどう
した者だヲットある。ソレ兼てより
云ひ聞せた通り己の親父の加州家の藩で
五百石も取る身分なれば己が是まで種々
偽つて金を借り潰した末の事ゆへ今實の
ケ儼々か次第でト此難儀を話しても更
よ眞實の言と思ふまいから逆もの事よ
直其許と俱に親父の所へ行き折入て頼ん
だから親父も肉身を分けた己が難儀を
余所よ見放す筈もあるまい就ての外ども

違つて加州家への出入を糺すが殊更よ
嚴重ゆへ中々以て婦人かどを携行ことハ
決して出来ぬうら窮屈でもあらうが己が
米俵を算談して来るゆへ其俵の中へ這入
て居るが能い然すれば加州の藩中へ米を
運び込む体よして行く積りだが何と甘い
工風だらうト種々云れて女の素より愚
鈍の質なる上は我身を生涯任せたる男の
云ふ言おれ何の疑ふ念もなく其意よ同
じて遂に米俵の中へ屈まり居る。十藏心
ようちづいて早々小口を綴り身俵及び上
皮ども形よく揃へて同繩横繩堅繩とも常

時御着屋で扶持切米の手傳をする様な心
 持で頼て俵拵らへも出来たる頃増上寺の
 暮六ボヤーン（當時の江戸中よ住居する
 者多く芝の増上寺。上野の東叡山。淺草
 の觀音。本所の入江町。又中央よ本石町
 の新道。先づ此數ヶ所を以て時の鐘の重
 かるものとす。ト誰でも知て居る事おが
 ら）十藏の獨り言。ヤレノ、重い俵だ。御
 藏前の三斗五升俵から較ると餘程貫目が
 強いヲ。イヤ其筈ダ。中身がひとだから」
 などと詰らぬ事を云ながら昌平橋（今の
 萬代橋の北脇）掛つて白木の木戸門あり

し橋也）の上へ差懸りて闌干よ倚り掛け
 暫し休息して居るヨと見えしがソツと荷
 繩を緩めて手と放せば脊負たる俵ハ水中
 へザンブと落るを仕濟したりと喜びつゝ
 急ぎてかよが居所よ立戻り少し残せし衣
 類の内猶聊よても錢よならうと思ふ品と
 撰り取り又屋敷よある其身の所持品も取
 り集めて何國ともおく逐電せり。然るよ
 彼の女の天命未だ盡ざるよや橋より落さ
 れし途端の柏子よ鳴と喚びて思はず手足
 を伸せしよ脚ハ出されども手ハ双方ども
 俵の外へニユツと出しかハ宛から風船よ

乗たる心地して双方の手と船舵となし漕
 ぐとも無く漕ぎ行しハ實よ不思議の中の
 不思議よありし（當時或る船頭の説に
 此俵の中の者若し脚を出したらんよハ泳
 ぐ事川はず必らず溺死すべきを唯手計り
 出してハ未だ天運の盡ざる所なりとぞ）
 斯くて俵ハ流る、儘よ和泉橋の下まで至
 りしが折節御城勤の坊主三四人連れよて
 兩國橋前後の會席より戻り掛けと見え家
 根舟の内より一人の坊主水中よ俵の泳ぎ
 來るを見認め大よ恠み舟近寄しよ正しく
 活たる人を見しまし何者ぞと言葉を懸し

かハ俵ハ「モン助けて下さり」トさも愁れ氣
 に頼む言葉の聞ゆるにぞ頼て舟中へ引上
 させ俵を解けバコハ如何に二十ばかりの
 婦人濡れ手を合して伏し拜むさま何れ子
 細あるべき様子と察しよれば坊主衆ハ若
 し懸り合よなりてハ後日の爲に不都合且
 至て氣も慥なれば醫師の手當にも及ぶま
 じ何れにも當所の厄介なればとて外神田
 佐久間町三丁目の河岸へ押し揚げ皆々舟
 を走らせ立去りけり。女ハ辛ふじて陸に
 ハ揚りしも何分暗さハ暗し屋敷奉公して
 町方不案内の事よもわれハ詮方なく唯大

聲をあげて「助けて呉れエー」と喚び
 しかば廻りの番人聞き付けて直ぐ町番屋
 へ連れ行き土地の町役人立會委細を尋ね
 粥など喰せ彼是手當して早速南町奉行所
 へ訴へ出に依り女の宿前へ預けとなり
 夫々手當方厚く申し渡され又十藏の捕亡
 方も定廻り加役共夫々の手先へ至急の手
 配りありしかば男の甲府街道よて早速召
 捕れたり。此よ於て直ぐ奉行所の吟味ど
 なりしが女の愚味ながらも其情の流石に
 厚くして兎角男の非なるを覆ひ隠さん
 と唯過つて我身自から俵のまゝ落たる由

申立たれど十藏の残忍なる愚鈍の一婦人
 己れよ愛着するを見込みて衣類諸道具を
 も竊め取り其上イザ身の詰りと成りたる
 段に至り女と暗々水中よ打込みて殺さん
 とし剩さへ其遺物を掻さらひ旅費として
 逐電せし心の汚穢さ如何ある盜賊も其徒
 類も容るゝ事を欲せざるべく天もとより
 彼を免さず終に死刑に處せられしとぞ
 附言 淺草寺地中誠心院地借小太郎店
 鉄次郎と云ふ者新吉原町二丁目清七店
 遊女屋幾太郎抱遊女ふねと云ふ婦人に
 買ひ馴染み夫婦約束迄の致したるもの

其後身請とる手段無しとて天保十三年
 寅の十一月四日の夜幾太郎方へ来りふ
 ねを連れ出し其夜直に同所揚や町の五
 人組持店松次郎後見己之助なる者の方
 へ預け置き止宿致し居る所翌五日の鷺
 大明神の祭禮なれば當日の鳥の町とて
 江戸中の男女我も〜と参詣するゆへ
 吉原の廊中でも此日の非常口と明るが
 例なり。コン幸ひと鉄次郎のふねを明
 俵へ入れ己が家よ食容として置く幸
 吉と云ふ者と俱よ此俵を擔ぎ出したる
 事露顯して終よ鉄次郎ハ手鎖三十日又

己之助の過料三貫文申付られ遊女ふね
 の急度叱り置く旨同年十二月七日北の
 町奉行遠山左衛門尉より申渡されし事
 ありしが是はふねを奪えんが爲にし
 たるゆへ其罪怪しと雖も本文の如きハ
 全くおかよとブク〜にしておどぎど
 改名させる悪業なれば其罪甚はだ悪む
 べき者なれど婦人と俵へ詰めたる奇談
 の似寄つて當時の一話なりしゆへ併せ
 て茲に載せまじと猶諸君よりも追々
 先の變つた江戸の新聞が着て居りま
 すゆへ何れ次會又何か擔ぎ出させら

○井の中の蛙大海を知らず

此諺ハ世俗の云ふ所とハ少しく異なり情
〔莊子〕云ふ所の井蛙 不可_三以_テ語_ニ於
海_一拘_ニ於_ニ 虚_一也_一〔後漢書〕馬援謂_ニ隗
囂_一曰_ク子陽 井底蛙耳とあるが如き
ハ井の中の蛙ハ大海の事と知らぬ故_ニ又
語ること勿れとて謂ふ言あれ世俗_ニ謂
所の〔本朝文粹〕蛙 在_ニ曲井_一不知_ニ滄
海之寛_一又井蛙淺心 忽迷_ニ三千
尺之激浪_一此の意を和歌_ニはかなし
や。つ、井の蛙我ばかり。外とも知らず

淺き心の「杯」あるハ。蛙ハ大海を知らぬ
ト云ふ言なれども開ハ唯大同小異の説有
る而已_ニよして強て異なる事なし。されバ
〔禮記〕ハ獨學無_レ友 則_チ孤陋寡聞
と有_ル此諺ハ當れり實_ニ獨學孤陋_ニされバ
井の中の蛙とも云ふべく友無く聞_ク事
寡ければ大海を知らずとも謂べし。總て
學文などハ廣聞博見の人_ニあらずんバ
天下の大事ハ論ずべからず寡聞_ニ倫見_一の人
よして天下の大事を論ずるハ井の中の蛙
ガ群集して大海の事を評論するが如_ク豈
鯢鯨の笑ひと受ざらんや。今世の學者ガ

外國奇話

○結婚ハ奇妙な慣とし

歐羅巴各國の内_ニあつて最_モも奇々妙々
なる風習ある國ハ露西亞だと云ひますが
成程_ニの奇妙な風と云ふ内_ニも是_レぞコレ
如何_ニも奇妙だと思ふ事ハ人の女房と成
た者にして若し何かの過ちが有_テ其良人
の意_ニ背くとも先_ニづ良人の爲_メ苛酷_ニ鞭
打_ル、苦しみ堪へ忍んで居る時_ハ其
鞭打_ル、時を限りとして其夜琴瑟の情合
ハ又不斷の如_ク中和_ニなるが常なりと云
又娘たる者他の家_ニ嫁る時_ハ方_ニ其親父

國會を唱ふるが如_ク洋學を知_テ漢學を知
ず又漢學を知_テ和學と知ざるが如_ク者を
井の中の蛙大海と知ずとて謂ふべく
誠_ニ笑ふべきの甚_ニだしきなりア、井の
中の蛙_ニ諸を慎_シめよト云て見ると
何か一般の人に對_シおしなべて云ふ様に
聞えませんが決して左様な次第でもなし底
ガソレ寄り台話の事あれば先_ニづ兎も角も
茲_レハ此はなしを持出したまでの事なれど
此説を必らず惡し、と思ふ人のあるまじ
萬一此小言_ニ對して服を立つ様な人あら
バアサお出なせへ夫れころ井の中の

たる者ハ其婚禮の晩一本の棒を携へ來たり
 たり聲よ向ひ一貴君我輩の女と娶らん
 ことを望みますか」ト云ふと。其聲殿ハ
 「左様であります如何にも尊公の女子を
 小生の女房に貰つて私が一生の妻と致し
 たいと思ひますから豫て御相談の通りサ
 お渡し下さい請取りませう」ト云ふのを
 合圖は用意の棒と振り上げて女子の脊中を
 丁々えつと三度打て「コレ女能く聞け
 今此親父が汝の背中を打たのハ即ち是
 今生の鞭終りであるぞヨ就てハ爾後また
 汝を打つ者ハ即ち汝の良人でコレ茲よ

立會聲殿なり。ギヤよ依て己ハ今此棒を
 引出物と致し且汝を打つ丈けの權利を添
 て汝の良人に譲るぞヨ尤も今より汝の夫
 とある人ハ己よりも年齢が若いから汝を
 打つも突くも棒ハ定めて達者であらう哩
 アハハハハト笑ひながら其女又申し聞せ
 置ら「サテ聲殿や聞く、通りの次第なれば
 不足でもあらうが。サ此棒ろれへお渡し
 申す」と忠臣藏五段目の幕明きで勘平が
 彌五郎の前で火の消た火繩鉄炮を差出す
 様を身振り目六分に両方の手で彼の棒
 を渡さんととる。聲ハ既に此女の柔順な



「イヤ〜左様でありません是非とも此
 棒をお受取り下さい」此女子ハへ受取れ
 バ即ち拙者の女房。此女房の外に棒まで
 受取るに及びません」でもあらうけれど
 何でも彼でも」と聲が容易に受けずして
 再三辭退するをも聞かばこころ時計十五分
 の間ハ棒を渡せらう。棒ハ受けぬと押問答
 をする（此間嫁ハ只うつむひて居る討り）

る有様を驚と見すまして「サテ〜これハ
 恐れ入たことでありませ尊公の女子の如
 き柔順者を娶るに何で別段打つ程の棒
 を用なませうコレハ平にお断り申します
 「イヤ〜左様でありません是非とも此
 棒をお受取り下さい」此女子ハへ受取れ
 バ即ち拙者の女房。此女房の外に棒まで
 受取るに及びません」でもあらうけれど
 何でも彼でも」と聲が容易に受けずして
 再三辭退するをも聞かばこころ時計十五分
 の間ハ棒を渡せらう。棒ハ受けぬと押問答
 をする（此間嫁ハ只うつむひて居る討り）

庭で終よ御の止むを得ずして其棒を受取
コレが婚禮の儀式だと云ふとこの頃或
る他國の西洋人が見聞して斯も有ふか
「俸るを禮儀どころは云ふべけれ
敷から棒で打ちわたすとい

古今髪ここんかみの結むすひ分け 林泰翁

○伊達奴

天和年中てんわねんちゆうのころ
（今より貳百年
程前）より伊達
奴と云ふ風の髪
行まわれて専まばら



俠客あきやくある者ものが結むすひしあり故ゆへに唐犬てんけん權兵衛
とか死人あひびの小平こへいとか差紙さしあみ十兵衛とか金神
長五郎ちやうごろうとか云ふ様な者もの皆みな此風このふうよ結むすへり尤
も夢ゆめの市郎兵衛いちろうべゑを始め。花川戸はながはの助六すけろく。
播隨院はんにいあんの長兵衛ちやうべゑなどよ至いたつてハ少せうしく人品
の違ちがふ所ところあれハ自然しぜん又髪またかみの結むすひ様ようも異也
又深見またふかみ十左衛門じふさゑもんと云ふ者ものの如ごときハ寛文くわんぶんの
頃の男達おとこたちなりしが額ひたいと摺ぬきあけたる様さまハ
粗ぼろこの伊達奴いだけやくハ似にたり此深見このふかみハ男達おとこたちの内
よても六方組ろくぱうぐみの頭かみよて強つよきをくじさ弱よわさ
を助たすけ人ひとの危急あふらぎと見て救たすえずと云ふこと
奇あまき眞まの狹客あきやくよてありしが其氣立そのきだてよハ似

もやらす又またやさしき風雅ふうがの人ひとにて曾さうて伊
諧かいと難波なにはの梅宗ばいそう因いん（延寶年中えんぽうねんちゆうの人ひと）が江
戸えどに下くだりし頃ころ其門そのもんハ學まなび一時ひとときの發句はつぐに
「名月めいげつや來きて見みよがしの額際いさい」ト讀よみし事
あり身みの丈たいさく低ひくき男おとこあれども額いさいハ廣ひろく扱めさ
上あたれば此句このく在ありしあるべし又其頃またそのころの小歌こた
に「額いさいのさその前まへから見みえぬを來きて見みよ
がしのエー」ト唄うたひし由よし今茲いまここにに顯あはせし
様さまハ深見ふかみが若わかき時ときの摸樣もように依よりて寫うつせ
しものにして顔かほハ違ちがへど他ほかの男達おとこたちも皆凡
る此風このふうにてありし也なり。但たゞし深見ふかみハ天和てんわの
頃ころ事故じこありて謫つらせられ其翌春そのあつしゆの句くに「梅

かれや花橘はなたちばなハかがねども」ト此句このく吉兆きちしやうと
也なり。後のち二十八にじゅうはち年ねんを過へぎ寶永ほうえい年中ねんちゆうに放免ほうめんと
あり老年らうねんに及およびても尙なほ二尺四五寸にじふにすんの朱鞘しゆせう
の大脇差おほわきざしを帶おびたれば其形そのかたち容ようハ年としよりも
若わかく氣力きりき壯年さうねんの者ものに増まりしとぞ。後のち遂つひに
剃髮ていぱつして自休じきゆうと號なづし享保きやうほ十五年ごねんの三月さんげつ十
八日じゅうはちにち年ねん九十じゅうじゅう歳さいにして死しせり。現げんに江戶本
郷片町ごうかたまち龍光寺りゆうかうじと云ふ菩提所ぼだいじよに其墓そのはか碑いあり
「一應院いつおういん心溪しんせき自休じきゆう菴あん主しゆ墓ぼ」ト記きせり此深見
十左衛門じふさゑもん若わかき時とき人ひとと打合うちあひ。向齒まへばと二枚共ふたまいとも
飲かきたるゆへ純金じゆんきんを以もつて之これと入齒いればしたり
近頃ちかごろ金きんの入齒いればする者もの間ま々まあれど昔時むかしは貳

拾五兩も出して金入齒せし世深見より
 外よ聞かざりしと云ふ然も在べし今の紙
 幣貳百圓程にも對すべき故評判せしも理
 りなり。又云ふ齒の爲より髪を蓄ふる方
 宜しき由。時の名器の説に依りて老年よ
 至り髪を生と其鬘最と美しき故人呼で鬘
 の自休と云ふ。コレ即ち劇場の狂言に
 鬘の意休と云ふ者。實に此人の事也とぞ

○講武所風

俗に講武所風とて徳川幕府の旗本御家人
 等が前髪まへかみの所と極く細目ほそめに明けて左右の
 所を殊更に立てしゆへ角と生したる如く

になり且掃の頭
 より刷毛先まで
 大概長サハ曲尺
 にて短くも六寸
 五分位より七寸
 長さハ八寸前後のものありて眞直なる故
 月代つきしろと刷毛先とは壹寸五分或ひは貳寸位
 離れて居る。町の者之を稱して壹人前の
 撥子はたきこと云へり併し此天窓あまのまどが流行せしは文
 久きく錢せんの出来し頃なれば今の人でも早野勘
 平はなやのかんが年齢格合より以上あらば大体ハ知て
 居らるゝ事あらん



○片はづし
 婦人の首飾り程入用多き物のちし髪かみの油
 びんびん付つけ。ぎん出しだ。長ながうもじもじ。小抗こまぐら。平元
 結むすひひ。忍しのびび元結もとむすひひ。笄かすがい。かんざしかんざし(髪指也)
 つと出しだ。指櫛さし。前髪立まへかみたて。紅べに。白粉おしろい。花はなの露つゆ。
 まゆまゆずみずみ。さそさそずみずみ。おもおもり頭巾づかん。留針とどめはり。
 加賀笠かががさ。頂いたきき。
 くくけけ紐いも。何なんの
 彼かととああららままし
 此この如ごとききも古昔ふるむかし
 此この様ようよよなし
 先御主殿まごしやうでんの風ふう
 ハ此片このかたはづしはづし。これハ元もとかうかうがいいわけ



と云ふものよして即ち笄と扱あく時ときハ
 直ぐ下さげ髪かみとなる様ようは結むすぶぶを中興ちゆうかうに
 至いたりてハ皆みなつけつけけた地ちと云ふて笄かすがい鬘むすと
 片かたはづしはづしとハ全く異ことなるものとす古いにししへ
 [吉原徒然草]と云ふ書ほんハ新造しんぞうなどの髪かみを
 結むすぶぶ下したより上うへへあるへい糖たうの様ようも曲まて
 笄かすがいを横よこさまさまよよ差さすハ常つねの事ことなり。昔時むかし
 勝山かつやまと云ふ女郎ぢやうらうが結むすひひ始めはじめと云へり然さ
 れどもこれハ片かたはづしはづしの直ちなるものよ
 て平たいげげたる髪かみの元末もとすえとも同おなじ幅はにはする物もの
 なり云々うんげんとあり故ゆへハ片かたはづしはづしの結むすひひ始めはじめ
 年代ねんだいハ定さだららねねど餘程あま古ふるくより結むすひ

来りしものなり上等社會の婦人より此
風塵らざらんことを望む

○藝者島田

藝者の島田今ハ専らつづしよ結へど昔時
は皆此風流行し

これと藝者島田

と云ふ故も今で

も吉原其他此結

方を爲す者あり



此風の流行せしハ天明(今より百年前)の
頃最も多く其後享和前後より一旦廢りて
程なく又流行せし髪なりと云ふ

○洗ひ髪

古へ婦人の髪ひき繕らふにハ必らず先づ
其髪を洗ふを常とす(源氏)(若菜の上)よ
紫のうへ明石のうへは逢ふ所明石の君
のはづかし氣よてましらんを。おぼせ
ハ御ぐしすまし。ひき繕らひて。おどする
たぐひあらじ云々ト見え其外東屋も
亦見え(枕草紙)も出たり然れども中興
追々せうは成りし者上下は拘はらず
紙と洗ふ事ハ結ふ度よせず故も婦人の
髪程臭きものなむ唯香ひある油など付て
居るゆへ其香油の爲め臭き香ひ暫らく

打消して置く而已其實は段々上へ上へと
付るうち古い油ハ皆腐りて頭の垢と合併
し垢と油とが互ひに腐り合ふよ依り遂よ
ハ何程香ひ能き油と付るとも一夜の内に
實ハ腐るもの也

今茲に願はせし

ハ洗ひ髪ハ儘あ

れど是を櫛に巻

付けて結ふを櫛

巻と唱へたり此くし巻ハ寶曆(今より百

三十年程前)の頃淺草觀音の地内おふく

茶屋と云ふ茶見世にて港屋お六と云ふ者



あり江戸に名代の美人ありしが常に髪を
洗ふ癖ありて大概一日に二度洗ひ又髪と
結ぶと上手にて櫛を逆さまに巻込みて結
び始めしゆへ追々此真似をして遂にハ江
戸中の女皆此くし巻に結ぶことハありし
と云ふ併し其頃の川柳点に「櫛まさになす
るのが要のくづしどめ」お六の髪如何に
も清潔にして髪わりし故男これを見てお
六ハ髪も亦美し。世上にお六程美しき髪
ハ余もわらじ杯と評せしより此如く他の
婦人其髪ハ風と真似たれどお六ハ髪を洗
ふ事のためハしきより別して美しき事

ありしを唯くし巻のみ真似て髪洗ふ事お
六どの反對にて更におせら勝なる故多く
の其風を真似しませでの事なりしとぞ
緒また上等下髪より中等の丸髷又の島
田崩し下等の達摩返し。上島田。投島田。
ぶつつぶし。田舎島田。京島田。兵庫。
天神。かッくる返し。角兵衛獅子。千鳥。
おし鳥。銀杏曲。其外小女の唐人髷から
お婆さんの蟹の甲に至る迄猶數々あれ
ば其謂れ因縁故事來歴の銘々正物丸出
しの書を入で訓次第次會よりおめに掛
ませう(勿論殿形も野郎も亦取交せて)

古今佛々叢談 其日暮の大曹上

○天狗の話

煙囪鬼神鳩槃茶天
狗土公大歳神山神
木神江海神水神火
神饞餓神塚神蛇神呪詛神靈神
路神竈宅神云々。さて斯讀み
上て見ると些へチ六ヶ敷様な
れどこれのヨシ地蔵經の文よ
して此文の中に天狗と云ふ言
がある此天狗なる者凡そ佛
の戒法を受けて行ひながら漸々



慢心を起し終に我慢増長して魔道に落入
て天狗になると云。然而此天狗となるも
尋常の坊主や行者杯で中々天狗の仲間
へ入る事出来ませんテ。先づ佛の飛行
と云ふものを守つて世間に人なきが如く
漫心増長したる程の高徳な出家や行者が
多くの天狗と成る者にて凡そ其天狗の名
を數ふるに○鞍馬山の僧正坊○愛宕山の
太郎坊○比良山の次郎坊○比叡山の法性
坊○伊都奈の三郎○富士の太郎坊○上州
の妙義坊○常陸の筑波法印○彦山の豊前
坊○太山の伯耆坊○大峯の善鬼坊○肥後

の阿闍梨○葛城の行者高間坊○高嶺山の
内子○秋葉山の三尺坊○身延山の太郎坊
○向く太郎房○相州の道了薩睡○上州大
光院の香菴和尚或ハ讃州の金毘羅坊又ハ
日光山と云ふが原の集人のなと申して凡
ろ是等の天狗と云ふ中より大天狗の類で
御坐るが昔時事は應じて佛菩薩の相と顯
はじ或ハ出家山伏の貌となり又或る時ハ
優しき女は身を粧ひ或ハ小兒の姿と變じ
或ハ鬼神の相を現じ又ハ禽獸鳥類と變じ
て自由自在に諸方を飛行す。然れども半
増長の天狗ハ常々乱を好むが故に世の治

るを浦山敷思ひ兎角諍闘と起さして世を
 乱し或ハ人の有福を見てハ禍ひと變せし
 め人の喜びを見てハ愁ひと成し又ハ火難
 水難風難等を起して種々の怨をなすが天
 狗の性質なり。サテ此天狗と云者ハ平生
 怒る心が絶ぬ故に兎角善事を喜ばず惡
 い事のみを望む(世の人ガ災難又逢たり
 其外の煩ひ事を見て口よハ氣の毒と云
 ども腹の中での能氣味じやと思ふ心の人
 が世の中よハ澤山あるが是亦天狗の親類
 と云ざるを得ず)ソレ數年の聖經も一時
 の慢心より破るト云ふ言ハ大般若經にも

説てある。底で前に云ふ遠州秋葉山の天
 狗ハ三尺坊と申して身の丈が三尺不無
 く生國ハ越後で尾州宮の宿禰禪宗にて圓
 通寺と云ふ寺に住職と成て居る中に段々
 鼻が高くなりし者と見え遂に秋葉山の住
 職と移り天狗の名ハ三尺坊と稱すとあり
 先づ元と糺せば此のごとく道了權現でも
 吞竜和尚でも皆人より天狗に成り立つ者
 である。昔時風來山人(平賀源内)の編み
 し六部集の中に天狗の鬪體を監定したと
 云ふ事もあれど現今ハ學文が進むに隨ひ
 世上に天狗の類が多くなりしゆへ天狗の

天狗たる直打を監定する事もむづかし
 なりましたるが何れも斯の如きハ西洋にて
 ペケバア天狗と云ひ日本で俗に木の葉天
 狗と云ふ蓋し數ふるに足ぬべし。天狗
 なり○サテ茲に讃岐の國阿野郡に白峯と
 云ふ巖々たる高山あり此山にハ昔時より
 相撲坊と云ふ名高い天狗ありしが其山の
 麓にて左兵衛(五十六年)と呼ぶ獨身者ハ
 生れ付き極々正直なるが山中故外に渡世
 の道もなく日々活計の爲め白峯の山へ登
 り枯枝を折りてハ之を市中に賣る事と常
 とせし處大天狗の相撲坊が左兵衛の正直

なるを知り左兵衛の山へ入る度毎に相撲
 坊が出てハ話をするが定式の様になりて
 左兵衛も亦並の坊主と思ひ何も彼も遠慮
 なく互ひに断し合ふたるに或日不思議や
 何所ともなく大音に御客と云ふ聲がする
 と相撲坊が「コン左兵衛早く此社の縁の
 下へ隠れてままへ」と云れて左兵衛五體
 すくみ漸く這込み息をこらして窺ひ居た
 れハ相撲坊ハ社の内に座を改め又遙向ふ
 よりハ緋の衣着たる威光氣高い出家が入
 來り「先頃中より侍者と以て我れ命乞ひ
 を致せども御承知あり因て今日態々参り

しなり彼者の我山へ足を運びし者ゆへ命ばかり免されよ」ト云ひもあへず相撲坊のかんらからくと打笑ひ「扱も貴坊折角の命乞ひなれと彼我氏子の命を果させし者ゆへ何如程貴坊が頼みでも助け難し夫れが爲め先日此方よりも使者を以て斷りしなり」成る程貴坊の言葉至當也然らば彼が命の貴坊に任すなり」ト云ひあがら四邊を見込しハテ此社の中に人間臭ひ香がすると云ふゆへ相撲坊の「イヤ人間臭きの御尤もがら其の天性正直なる者ゆへ我之を愛すお構ひなく歸られよ」

ト云ふは緋の衣の坊主ハ「然らばお暇申さん」と威儀とらしくとして歸り行く。相撲坊の左兵衛くんと呼び出すゆへ左兵衛ホッと息をつき敢す椽の下より出る。這ひ出し「今の仕客の何所の方で御在居ます歟」われれ鞍馬山の僧正坊だ「へーエ底で何御用有て」外でもない。此頃高松の城下で大和屋利兵衛と云ふ質屋の手代の常太郎なる者主人の金三十両餘んを傍輩の政吉と云ふ者に罪を貸せたり其常太郎の正直らしくのめり、高見で見物ゆへ政吉も余りの無念さ遂は首を縊つて死にけり

底で政吉は我氏子なるゆへ常太郎を引裂き呉んと思ふ所又常太郎の僧正坊の氏子なるゆへ今日自身僧正坊が来りしなれど争で我之を免すべき遂に常太郎の命の我が有分みする筈で今断し合ひを付たり汝へ早く此山を下り家へ歸り外出をせず能く慎み居れヨ」と云ふ歎と思ふと相撲坊の顔色變じ眼さかだち今にも一掴みに掻き寄せんとする如き勢ひも見えたる故愕然仰天足もまどるで地ま付らず左兵衛ならんとも何とも云はず峻岨の山を藤葛に取付き命からく逃歸ると俄に大風

吹き起り空一面に吹き曇り雨の盆を傾けし如くは降り石を飛び大木を折り震動雷電して天地も崩るゝと疑ふ程なりしが程なく雨も止み風も静まり頓て元の如く晴大となる。高松の城下の大和屋の手代一人行衛知れざしゆへ主人利兵衛肝を潰し番頭清八なる者に云ひ付け諸所方々を尋ねさせしに豈計らん常太郎の首の引抜け手も足も背幾ツまかみぎれて城の石垣や松の木まぶら下である故城下り云ふまでもなく近郊近在より數萬人が見物よ出掛ると云ふ騒ぎよでありしを左兵衛も

思ひ當りし事あれハ最前山よてありし事
 冬も人々よ云ひ聞せたりしと云ふこれハ
 延享年中の實事ある由ある恐るしやヲ、
 こわや去りながら人間ハ心中正直でさへ
 あれば生涯恐ろしひと思ふものハ世の中
 よ無い筈既よ五十よも順ハ天者存 逆
 天者亡とある通り總て天理に随ひ今
 日を行へハ無事息才何も天狗が此様を裁
 判をするよも及ばぬ事あれど中々人の心
 中の無証據よして圖られぬ事のあるもの
 ゆへ天狗と云ふ者も亦此如き世話をやく
 者じやと云ふ

本文の中ハ氏子と云ふ事あり此ハ子
 譯柄ハ別題ゆへ何れ追てお断し致し升
 が次會よのお回でたく書を入れて七福
 神の説と出させませうヤン〜毎度おや
 かまきふ

俳句 (はつく) 面白庵評

○春乱題 淨進食物の名詠込

透逸の部 (到來順)

管笠の一きと白と花菜摘 曲舖 小僧
 春風や焼鉄投込む橋の上 下谷ばか丸
 荒磯の波向に生て海苔味 越後 荆香
 飯事は脊戸散じ見花菜時 越前堀旭雲

敷入の袂よ重しうき密柑 仙台金水亭
 行春や蒺子も花の咲小口 全 人
 橙々も轉たがるや三ヶ日 仙台尾花庵
 雨三日木芽の賣る豆腐哉 全 人
 屠蘇祝ふ肴よ狭む昆布哉 仙台 晴心
 袂から密柑轉や兒の禮者 全 人
 湯豆腐の馳走も有や花曇り 吉名齋
 時めらぬ空よも賣や櫻海苔 篤 志
 鶯鳥よ味贈摺る手元休め見 芭庭堂
 御慶云頭よ近し熨斗毘布 奇 聞
 ○同 春乱題 吉野舍宗園
 言足ぬ子の愛らしき御慶哉

情歌 (と・う)

○づくし

「昨日逢ひそ 今日馴初て粹な人だと
 おもひろ 横濱 典舖 小僧
 「骨と地紙のお前ととたしうな 便りよ

してくらそ

尾張

志樓登久生

「ぬしの糸は調子のよさよ上りつた

よいかのぼり

横濱

右

巖

「では知せど夫ども云ぬ人がじやま

する此座敷

旭雲堂

「人の親の忍んだ耐で今じやどうせう

此愛

下谷

ばか

丸

「見るより惚たが無理かぬしの粹な

る見容貌

湯嶋

愛

子

「はつとた息よ持なみた今日も不首

尾が見ぬま

上總

小

さん

「アレサは飽よ話の種は萬字ぬけれな

いさぶん

同

維々亭辭所

「惚た欲か私が見れば何やら抜れな

いかまへ

同

全

人

「ぬしは元よく似た此子人の忍んで

出来た中

尾張

志

樓登

「人の忍んで出来たる中も今じや人のよ

付く身軀

花園

亭

歌樂

親父小言百ヶ條 神田 壽老人

○火の決して鹿末よするをヨ

○朝へ成るべく丈早く起るヨ

○朝も夜も氣言を善くしろヨ

○神佛も常り意中で敬へヨ

○我が身の別て大切は持てヨ

○關係なくば不淨を見るなヨ

○常は我が身の出世を願へヨ

○假も不吉の言を云ふなヨ

○家内一同皆笑ツて暮らせヨ

○人よ腹をば立せまいぞヨ

○人よ恥をばかくせるなヨ

○人よわりを喰せまいぞヨ

○人よ馬鹿よされて居ろヨ

○人よ對して恨みを云ふなヨ

○人の利口の利口として置ヨ

○年の寄と者よ宜く撫へしヨ

○恩のどうかして厚く返せヨ

○何でも萬事由斷をすろなヨ

○女房の云ふ言の判分聞けヨ

○子の云ふ言の九ツ聞かヨ

○我が家業丈げの丹精しろヨ

○何事も堪忍のするが宜ぞヨ

○子供乃天窓の打つまいぞヨ

- 常よ己が股の捻ッて見るヨ
- 自力で澤山もふけて遣へヨ
- 親乃脛の成るべく噛るあヨ
- 人よ金を借りて遣ふなヨ
- 人よ余議かくハ貸てやれヨ
- 女郎を買て瘡毒を煩ふなヨ
- 藝者よ手切れを取れるあヨ
- 女房の顔姿よを人を選びヨ
- 病人よハ優しく物を云へヨ
- 難滞して居る人よハ施せヨ

- 儉約の皆出来る丈なしろヨ
- 謂れも無く生物を殺てあヨ
- 鳥獸類の知らぬ喰ふあヨ
- 故人乃年忌法要の宜くせヨ
- 死だ人乃日の萬事慎しめヨ
- 人よ必らぬ義理を欠くなヨ
- 子供の宜く論して育てろヨ
- 用心して女房よ欺れるあヨ
- 強欲の無欲博奕ハするなヨ
- 忘ても人と喧嘩をするあヨ

- 外でも内でも大酒の廢せヨ
- 極た外よハ太飯を喰ふなヨ
- 頼れても證文事のするなヨ
- 人よ世話やまこと云れるなヨ
- 我家の門口ハ清淨よしろヨ
- 月よ一度ハ氏神へまゐれヨ
- 月末よハ家の掃除をしろヨ
- びて五十ヶ條となる後五十ヶ條ハ餘白グ
- 無いから次會よツテリと出しますヨ

問 子が家よ英一蝶が書さし四季の富

岳四幅ありこれを傳ふる既よ久し而して
又干が小傳あり然れども其事蹟の判然せ
ざる者なきよあらざれば黨員諸君の中よ
識る人あらば其知れる所を以て教え玉へ
長崎(大浦山人事)吾窓庵五筆
答 右英一蝶のどの數種の書よ載する
所多しと雖ども亦其誤まりある事少なか
らず且もらせし事多し接するよ一蝶ハ承
應の元年攝州よ生れ父ハ石川侯の侍醫よ
して多賀伯庵と云ふ醫師なり寛文六年十
五歳の時江戸よ下り石川侯の命よよりて
狩野安信を師とし如ハ藤原多賀氏名の信

香始めは安雄幼名ハ猪三郎と云ふ(望海
 旬談と云ふ書あり)後ハ助之進と改め
 剃髪して刺湖と稱せり又翠鄰翁の牛麿。曉
 雲堂舊草堂。一峰閑人(後門人ハ譲る)一
 閑散人。隣松庵。鄰濤庵。北窓翁等の諸
 號あり書と佐支龍ハ學びて其書最とも名
 だかし俳諧を芭蕉ハ學び其角。嵐雪。等ハ
 も交り深し俳名ハ曉雲又ハ和央(洞房諸
 園と云ふ書あり)或ハ和應(江戸眞砂よ
 わり)と云ふ元禄十一年十二月(元禄八年
 と云事諸書ハわれと指誤りなり)江戸吳
 服町壹丁目新道ハ住居せし時事故ありて

誦せらる于時年齢四十才謫居ハあると
 十二箇年寛永六年九月歸郷して後ハ英
 (一説ハ母の姓ハ花房なり)一蝶と稱し
 北窓翁と號す深川永堀町ハ住せり(これ
 ハ人物志ハあり梅園手記にもあり又萬字
 開録にもあり)享保九年甲辰正月十三日
 病を以て没す享年七十二歳二本榎承教寺
 (日蓮宗)檀中顯乘寺ハ葬むる法名ハ英受
 院ハ蝶日意
 辭世
 まぎらへず變世の業の色どりよ
 ありとや月のうす墨の空

英 一蝶の男即ち二世一蝶ハ名を信勝
 俗稱を長八と云ふ二男ハ一蝶又狐雲と號
 し俗稱を百松又源内と云ふ養子一舟ハ一
 蝶の門人よしと讀書家なり名と信種號を
 東窓翁俗稱を彌と云ふ此ハ明和五年正月
 二十七日没す何れも一蝶ハ續ひて其頃ハ
 名あり又一蝶の母ハ妙壽と云ふ一蝶謫居
 ハ在る内ハ友人横谷宗珉ハ其を養ふ正徳
 四年大晦日ハ身まかりぬ又「花ハ來て拾
 せ羽織りの盛りかき」ト云ふも曉雲の句
 よて名ありしが其頃又「刺寢して櫻ハ止
 れ四日の雛」ト云ふも秀逸ありと歎云ふ

又温故集ハ「此みぎりひだり鎌倉すぢ鯉
 ト云ふハ東海道戸塚よて一蝶ガものせし
 名残りあり一蝶剃髪の後流罪ハ處せられ
 しハ彼の柳澤百萬石一件よしして淺妻舟で
 己ガ奥方ハ時の將軍○○公ハヘコツカセ
 タト云ふ穴探し己ハならす其實政事上の
 宜しからぬを譏りし罪ハ依てあり故ハ其
 時の罪ハ次第ハ甚ハな腹味よてありし
 (編者曰)本文の中ハ淺妻舟の件ハ大ハ
 世ハ秘する所のものなる由なれと頃日
 或る方より別ハ得たる○○の原稿ハれ
 ハ何れ追て顯せず事あるべし

江戸吳服町一丁目御道

勘左衛門店

多賀朝湖

北條安房守殿掛り流罪四十七才元録
六年酉の八月十一日御詮議の儀有之
二付安房守宅揚屋入

トあり又

元録十一年寅の十二月二日三宅島に
流罪御船手邊見八左衛門へ渡す寶永
六年九月大赦ありて歸る年五十八才

舊記より又

本石町四丁目

茂左衛門店

佛師 民部

八月十五日

本銀町三丁目

朝湖一卷の者

次左衛門店

村田 半衛

トあり其後これも元録十一年寅の十二月
二日八丈嶋に流罪御船手邊見八左衛門へ
渡されしと云ふ今人口は傳ふる所の虚説
多し以上の話の實説と信せり故に記す

編者曰是れハ深川梅園翁の答も係れり
梅園翁ハ舊來江戸深川萬年町に住す。

(本年七十六齡にして現ハ府下の郵便
局取締りと奉じ老て倍々健なり)故を
以て一蝶が住せし隣町なきハ舊記も亦
確實なる事と思はる又萬字堂主人も昔
ハ同所の同じく舊家にて徳川幕府及び
諸大名用達たりし米商垂氷屋清右衛門
の丁稚と勤めし頃一蝶が剃髮の際一世
一代の絶妙を遺さんとて凡そ六尺四方
の二枚折屏風へ一毫も揮はれし墨霽の
狂ハ獅子ハ曾て同家より譲り受けて今

尙所持する因縁有ハ与翁も亦英の履歷
ハ聊カ知れる事もあるべけれど當時常
陽に至りて不在なれば此ハ略す

三人寄れば何ぞの茶話

○婦人の教へ

我が日本にてハ昔よりハ慣習にて。女子
ハ別段學問を爲せると云ふ事なき。唯
少し計りて讀み書きや。縫針は道のみ教
る位にて事ハ濟むればとすは先づ上等
は部也夫れより下等ハ至ッてハ。多く三
味線俗歌杯を以て。眞は藝と心得居る者
有然れば娘は子ハ藝を仕込と云ハハ。必ず

言はずしてペン／＼たるを知るべきあり
 故よ「お稽古で御坐る歟と云へば問はず
 して唄ふべき事たるを知る。是れ皆婦女
 よは學問と必要ならずと思ひ誤り。只縫
 針三絃の婦女は藝ゆへ之と知らざるの耻
 辱とれみ心得るより起る。實は魯鈍さも
 亦甚だしき事ならずや。如何にも縫針は
 事たるや。婦女にハ至極必要ある事勿論
 あれども。然ればとて往昔ハイザ知ず。
 今より以後ハ。社會ハ漸次開くるに隨ひ
 婦女ありとも夫れ相應に智識があくてハ
 叶ひませんヨ。又特リ縫針の道はみ巧妙

あれバとて其他の事ハ暗くして事物は道
 理とも辨へずハ誰か之を賞べさか。況や
 三絃は如きは聖人の古言にもあるが如く
 淫色を養ふは器あり(トハ餘り固過るが)
 先づ知て居るも差支へなく。知らぬも亦
 決して耻辱はあらず。凡る人たる者は
 智識は乏しひ程世の中ハ耻べき事ならん
 例へ手ハ三味線を持って能く語ればとてマ
 夫れまでハ事よて唯一坐れ興よ過ぎざる
 べし。彼ハ洋犬や猿でさへ習はず時ハ彼
 一通りハ。劇場ハ眞似をそるよあらずや。
 斯る藝があれバとて彼は。猿でなし。犬で

なしとは云ふまじ。矢張猿は猿。犬ハ犬也
 唯人と畜生と違ふ所あるは道理を能く知
 ると知らざるの差別のみ。さればや。人
 にして少し計りの藝ありとも物は差別を
 知らぬ時は争で人と申すべき。然るに前
 よも述る如く我國ハ慣習として婦女には
 何事をも教へぬゆへ。如何ハ天賦の才能
 あるとも可憐やそれ智識を磨く方法なく
 依然朽ち果る者多し。之と物ハ譬て見れ
 ハ美質寶玉なりとも玉職が磨けばこそ其
 玉ハ光輝をも生ずべけれ。若し之を泥に
 中よ投棄て置るや争で光りを生ずるは手

段を得べきぞ。人ハ智識も之と同じく教
 る人われバころ。始めて光輝を生ずべし。
 されバ我が國ハ婦女を見るよ往々才氣ハ
 ある者を見れば其才氣は唯天賦だけ者
 よて。教育ハ無きより。物ハ道理ハ暗きが
 如し。然れども之を嘲りて婦女ハ猿智慧
 杯と云ふは是亦大なる謬見なり
 前段よ説く通り婦女ハ學問を爲せぬよ
 りして才能少しと云はハ人或ひハ云をん
 「其ハ婦女ハみ責むるもれでなし。男あり
 とて下等者よハ。學問ハ無い者が多い。
 併し同じ學問ハ男子と婦女と智識を較ぶ

れバ。男子は方が屹度立勝ツて居る者である。コレ何故ぞや。願ふは男子よは才能に必要多し故に其体格は組織方を智慧才能に多かるべき様よ造物者が拵へたるものならん。而して婦女に然らずで才能の必要な事なき爲めに自然とその体格の組織方も才能を少くしたるに相違なし然るに今強て婦女に才能の有る様よとするの無理ある沙汰なりト。コレ如何にも淺薄の考案とや云はん。成る程男子よは才能のある者多からんが。是とて此才能の皆天性なりと計りの云がたし。多くの

他所に出て。見たり聞たりする所の。學問の學問をする事多きが爲めよ其才能を増く養ふは隨つて倍々磨く者よなる也。話頭一轉同じ無學の者よ就き。男子の方優りしと云ふ考案ハ一寸其もの如く聞ゆれば壁へは東京の町人の如き一家の内よ夫婦を始め何程の學問ありや。多くの無學の方なるべし。然るよ其家々を見れば(但し何所の家を見たと云ふ限りの無いが)先男子の實は婦女より才能多きやと窺へど必らず然ありとのみの中し難く。唯事物は依て男子の方幾分歟識別あるが如く

よ見ゆる事あるのみ。さりとて之と指して直に男子の天性才能多しと云ふべき者は非ず。コレ男と女との世間の交際よ差違わるか故あり。婦女の常は家よ在て家内の事を處辨するが故に其交際の唯親類歟父の常々出入れ者或は近隣の人よ過ぎざるべし。之は反つて男子は家の外なる用事多きゆへ其交際も廣かる自然の事あり。此交際する人れ才能を増す器械也然れば男子の交際は廣き爲め何でも見聞すること多くして婦女よりも識別あるの即ち交際と云ふ學問にて其才能を

増々磨けはなり。之を見て婦女よりは天赋稟性れ才能多からざるを知るべきなり(藝妓輩の世俗に通じて並の婦人よりも稍賢き風あるは多く他の人よ接して自然と實地交際は學問に依れず也然れども教育の道は疎き事甚だしきゆへ是亦採るべき所なしと云ふも可あり)叔又婦女と云へば才能あれは事物の條理を辨へ居ることを肝要なりと云むハ「否」とよ婦女の然まて六ヶ數務めいなし。又條理の下駄のと辨へて置く程の要事いなしト申す人もあらんが。是を以ての外の言とや云えん

委敷云へバ實は婦女の務を知らざる人の
 言草なり。凡そ婦女の職分の數々の中
 も兒子を養育すると云ふは最も六ヶ敷事
 ぞかし。素より其心得の無くては叶はぬ
 ものなれど婦女の始めて人の妻とある者
 を見るは多くは何なる心得もなく只子を
 産むは婦女の本職などのみ思ひ。唯腹部
 がホテツキさへすればそれで宜いと心
 得。教育の事に至つては些少も知らざる
 者の如し。之を早く云へバ婦女の人の妻
 女と成て子を産むより、外は藝なし猿と
 謂ざるを給猿なり斯く考へなバ恰も婦女

の子を産むの一器械と云ふべき歟。人間
 として器物も同様に見做さるゝとい。實
 は口惜しい事でありませんか俚言よ家
 鴨の放りッばなしと云ふ言あり、開ハ彼の
 家鴨が其卵子を自身よ産み乍ら之と卵化
 事と知らずして其儘よ爲し置くや嘲笑ふ
 云し譬論なり。今我が邦の婦女豈此家鴨
 に等しき事なからんか。斯く云ふは婦女
 の我々を咎めて。コハ怪しがる申し分ど
 や云ふからん。されど我々とても婦女が
 子を養ひ育て得る事と知らずと一概よ云
 ふよあらず但真正に育て上たりと云はぬ

のみ。看よ。假令其子と首尾よく赤子から
 手足の伸び成長せしめられたれば、逆夫れで親
 の職掌と爲し盡したりとハ決して申され
 ず。兒童ハ生れてより七八歳の頃迄ハ皆
 母親の教へよ依らざる事な。此母親たる
 者にして物の筋道を能く辨へねバ何を以
 て子を教へたや。人或ひハ云えん「學校
 と云ふ教授場あり。何ぞ子の爲よ母親が
 然まで物を辨へ居るよ及ばんや」と。良し
 教授場のありとするも家ありて母親が
 何時となく。物に依り事よ因り。彼是と誠
 實よ教へな。學校の稽古よ優ること夫

れ幾干ぞや今より後繼ハ明治三十年頃
 も至らバ必らず婦女の中でも政治法律
 學其他思ひ。諸般の學術ハ富む者幾
 許ハ殖るに相違あり其時よ至つてハ。是
 と無學の婦女と較べて見らるべき時節到
 來して提灯ハ釣り鐘。搔附木と尺ハ柱木。
 スツポンよお月さま。手鞠と地球。寶ハ大
 違ひの鬼子母神ハケサランパンの後悔あ
 るべし。又世の男子たる者よて今より妻
 を定めんとせば宜しく其面構(俗よ云ふ
 面喰)杯に拘はらず先づ智識才能のある
 者ヲ撰むべき事なり(但し其家の姑女若

し無智の無才の漠然婆ならん智識才能ある嫁を貰ふ事と嫌ふ癖あるものなれども其姑女は依ての亦山様な了簡達ひの者計りもあるまじ底で今日日本の眞は極上等人物を殖さんとするに第一は婦女の才識智能ある者を多く得ずんばあるべからず。何ぞと三平二満あると否らざるを論ずるの違わらんや是婦女の教を必要と云ふ所以也

巡査の職掌 愛宕山 東雲山人
巡査の何の爲めに設けてあるやと云へば人民の身を守護するが爲めなりと。尙委

人少からず。又悪人が不問何時我々人民に迷惑をかける事あるも圖られず。ざりとて乱暴人の入り来りなば我々自ら之を捕へ。悪人ありて我自ら之を獲へんとする時。之が爲め夜となく晝となく常に注意せざるを得ず。殊に悪人即ち盗賊の如き何如にも巧みに其身を隠すゆへ。之と探り出さんハ随分とみに容易の事ならず。俗に稲葉小僧ハ盗人で五ざる。奪れる者ハ五〇〇。五ざる。ト云ふもの、其奪る、者に油断ありて。盗る者に油断なきハ常の事なり

し論ずれハ我々人民
社曾は在りて安心せん
が爲めは設けあるも
のよて其給金や其費
用ハ我々人民が支出



して置くもの也ソソ世ハ乱暴の

又盜賊よて中興の祖先と云をる、彼の五右衛門が辭世よ石川や濱の眞砂の盡るとも世は盜人のたねハ盡さまじト。これ巡査の設けある所以なり。されば人民が己れ自ら悪人の取締りを爲さんハ實以て六ヶ敷く。況や亂な人の如きハ。男子ハ稍之と禦ぐよ足るべきも婦女や小兒年寄りよ至ッてハ争で然る拒ぎと爲す事の出来得べきや。斯く考ふればどうしても巡査ハ我々良民を護り悪人と捕ふる職掌なるゆへ其心得あるべきハ勿論のことなれども。折々見もし。聞もしつる所に依り悪

人よもあらざる良民よ向ッて横柄權幕さ
 る言語を用ゐるが如きもの無き非ざる
 由(但し東京よハ多分無かるべし)豈守護
 とか保護とか云ふの名よ昔く甚だしき者
 あらざるや。尤も東京ハ都會丈け殊よ警視
 廳よて正しき規短のあるされば左まで著
 るしき事ハ決して無きものトハ思へども
 亦此事全く無しと斷言する事ハ出来まじ
 各縣下の内よハ嚴然として良民を輕蔑む
 事往々ありと歎聞さぬ。思はざるも亦甚
 だしからずや。然れハ巡査たる者ハ守護
 の名よ昔かぬ操能く心してあらんことを

ころ願えしけれ(先此所でハ左様なら)
 ○安じるより産むが安し
 鶴龜の齡もいとど高砂や。これ蒲船ハ帆
 を上て蓬萊山よ遊ばんと。彼の煤酌ハ渡
 し守り。渡りに舟を得る儘よ。向ふへ飮る
 島臺ハ尉と姥とれ共白髮。三々九度と盃
 の數も重まり百千歳。變るまらそ。變らじ
 ど。契りし縁ハ最と。出度。富士の高根ハ
 築山の如く。利根川ハ流れハ小溝の如く
 變ればとて。あどそ夫婦の其中よ。盆水
 とハ覆がへし。圓き鏡を破るハとぞと。翠
 燭まはゆき綿帽子の。中よ赤らみ恥られ

顔ハ。實に紅梅の蕾ハ花。將に綻びんとし
 て吹雪よか、りし風情なりとハ。女の子
 も年頃よなり父母ハ懷を離れて良人ハ
 許に嫁付く時の有様なり。是より良人ハ
 家よ在りて舅及姑よ事へ。良人よ從ひ。夫
 婦の中睦まじく春去り。夏來り。秋も過ぎ
 冬籠りの頃よなり。堂やら氣分も常なら
 ず。月經も滞り酸も甘いも食物の。味
 も平常と異變り。三月四月ハ其間ハ。米だ
 夫れども五月滯。道々月も重なりて。身重
 の体とあるに從ひ。最早十月ハ産月も。間
 近くなるよ未踏みも。見ぬ初産ハ土俵

入。其苦しみハ如何ならん。日夜よ案じ
 暮しつ。安さ心ハ中々よ。唯ク。ハ
 と打過し。儲産期よ成て見ると。否でも應
 でも腹中よ溜つた以上ハ月満ちて。何で
 も彼でも産ねばならず。産婆を頼み醫者
 を招き。親類縁者ハ加勢を乞ひ。其大層
 あること限りなければ。産めば案じた。程
 でもなく。母親ハ身体も丈夫あり。赤子も
 達者で玉に様なる幼顔とハ。此兒を云た
 る事ならん。初めハ案事に引換へて。喜
 悦ハ眉を開くべし。政治ハ事も亦然り。我
 國も立憲政治と云ふハ開闢以來見ること

もなく聞た事もなく國會と立る如き新らしき組織ハ如何なるもの歟と考へて膽玉を潰し疝氣と頭痛は疾む人ハ宛然花嫁が初産と案じるよ齊しく然まで案じるに及ばぬことあり。只明治二十三年は曉天にハ玉は様なる美事を姿を見る計りで恐れる事も驚くこともなし。今より我々ハ指を折て其産期の來るを待つのみ。世間に花嫁と學ぶ夢中の心配家もあらん歟と此に一言す。併し初産迄ハ殊更に其用意をして置くこと種々あるべし。只漠然として生産と待つべきのみに非ざるハ勿論

なれば亦明治二十三年に至る國會の初産もマンザラウかりボカンとして居られまい。其用意と云ふハマサカ襦袢は襪襪衣に桐油紙でもあるまいがハアーテホア

滑稽政嶋一週奇譚(前會) 向水生稿

夫ノ大詔一降立憲ノ事定リテ。萬世一遇ノ盛時ニ遭ヘハ此際如何ナル計畫ヲナシ。又如何ナル職分ヲ盡サンコハ。帝國臣民タルニ愧ルコトナキカト。日夜ニ思ヒテ盡ス中。來リテ政黨ヲ結ブベシ。來リテ輿望ヲ表スベシト。最ト懇ロナル。〇〇〇

ナルヨリ。此度態々出京致シヌ。固ヨリ我儕ガ主義ト申スハ。彼ノ急驟ヲ惟レ競ヒテ。徒ラニ激昂ヲ務ムルガ如キ輕薄浮躁ノ事ニ非ズ。啻ニ亦アラザルノミナラズ此等ノ者ヲハ卻ケテ冀望ヲ與ニセザル者ナリ。ト此所迄ハ來リシガ。斯ク執ル所ノ主義ヲ以テ。自油黨ニ申込ントスルモ。知己無キ身トテ傳手ヲ得ザレバ甚ダ當惑ツカマツリヌ。最ト憚リナル事ナガラ。何トゾ御身ノ情モテ。此等ノ主義ノ者ナリト。該黨ニ申込レテ。同盟ノ義ヲ致サセ呉レナハ。偏ニ有リ難キ事ト存ズルナリト

門ヲ違ヘテ取り次ギニ。壯士ハ愈々可笑ケレドモ。故意ト殊更言葉ヲ改メ「御依頼筋ハ承知致セド。御身ノ容貌ヲ見受ケ申スニ。慷慨悲憤ノ氣象ニ乏。進取活潑ノ相ナキカラハ。迎モ該黨ヘハ容ラレマシ。今ヨリ一層奮發セラレテ。慷慨悲憤ノ氣象ヲ著ヘ。進取活潑ノ精神ヲ養ヒ。然セシ上ニテ該黨ニ同盟ノ義ヲ請フン。ニハ。或ハ許サルベシト雖モ。其風ニテハ六ヶ敷カラシ」ト一言ノ下ニ刻付ケラレテ風雅ハ今更物ヲモ云ヒ得ズ只呆然トシテ居タリシガ。頓テ壯士ハ行キ過ギケルニ

ゾ。跡ニ風雅ハ必ノ中ニテ獨リ熟々思フ
 機「ア、詰ラス事ヲ云フ奴カナ。慷慨悲憤
 ノ氣象ヲ蓄ヘ進取活潑ノ精神ヲ養ヘトテ
 萬年青ヤ松ノ肥料ヲ成長ヤウニユクモノ
 カハ。如カズ。自油黨ナドヘ入ルヲ止シ
 テ。開進黨ニ加盟セン。民智六ヶ敷野郎ニ
 出逢フテ。由ナキ小言ヲ云ンタルヨナト
 囁ギナガラ打起チテ。夫レヨリ兼テ聞キ
 居タル。神田ノ方ニ踵ヲ旋ラシ。開進黨ノ
 事務所ヲ指シテ。欄リヒヨコノ。赴キシ
 ガ。風雅ハ行々思フ様。トハ云フモノ、
 我容貌慷慨悲憤ノ氣象ニ乏シク。進取活

潑ノ風ナキ時ハ。彼レ開進黨ニモ猶拒絶
 セラレシ。若シ亦然ル事シモアラバ重テ
 ノ耻辱ト云フベシ。斯ル面倒ナキ先
 カラ這回ハ少シク勇氣ヲ含ミテ。面ニ悲
 憤ノ氣色ヲ露ハシ。胸ニ慷慨ノ勇氣ヲ懷
 キテ。該黨ニ申シ込ムコソ宜ケレト。心ノ
 中ニ工風ヲ定メシ。諸開進黨ノ事務所ニ
 行キ。腕ヲ擦リ齒ヲキシリナガラ。ヤア
 受付諸君ニ物申サント。云フ詞サヘ
 荒々シク。四下ヲ睨ンテ陳ベケルニ。何國
 ノ馬ノ骨ヲラン。世知レヌ者ノ荒レ込
 デ。無禮極ムル舉動カナト。思ヘド流石ハ

開進黨。受付ケニアアル小使マデ。猥リニ怒
 リヲ面ニ出サズ。其言葉サヘ物靜カニ。御
 身ハ何國ノ人士ニシテ。何等ノ所用ニ來
 ラレシゾ。ト最ト叮嚀ニ問ヒケレバ。風雅
 ハ玆ゾト道ミ寄リ。余輩ハ山間ノ一男子。
 洒落斬風雅ト呼ベル者ニテ。自由ノ爲メ
 ニ。性命ヲ惜ム者ニハ非ズ。治乱
 極リ無ハ古今ノ常態。變轉側リ難キハ時
 事ノ活動。今日昇平ヲ謳歐スルモ。明日修
 羅ノ街テ現シ。今年平穩ニ日子ヲ送ルモ。
 明年ノ事知ルヘキニ非ズ。萬一我が國ニ
 事アル時ハ。開進黨中斯人アリト五枚銀

ヲ猪首ニ着ナシ。大身ノ片銀鎗ヲ馬ノ平
 首ニ横クヘテ。エーイ。エーイ。エーイ。ト
 何テモ一番眞先キニ突進シテ。我身
 ノミカハ開進黨ノ榮譽ヲ宇内ニ輝カサン
 ト。思フ赤心ノアル所ヲ。推察セラレテ加
 入ノ義ヲ。掌事ニ取り次ギ頼ムナリト威
 ナクテ猛ク述べケルニゾ。受付ノ者ハ面
 ヲ見合セ。暫シ詞モ無カリシガ。到底斯ル
 變人ニ向ツテ。長ク問答スルガ如キハ。無
 益ノ業ト策ヲ圖ラシ。詞短カニ答テ曰ク
 「御身ガ精神モ然ルコトナランガ。固我黨
 ノ主義ト云バ。着實ノ精神ト。順正ノ手毀

トニ依リテ。政治ノ改良ヲ望ムモノナ
 リ。御身ノ如キ。事アル日ニハ。我真先ニ
 突進セン杯ト。急驟激昂ノ徒輩ハ我黨ノ
 郤ケテ。希望ヲ與ニセザルナリ。掌事ニ取
 ツテ。事ヤハアル。疾々此所ヲ罷ラルベシ
 ト言レテ風雅。コリヤ再び又失策ヲカ無
 念ヤト。穴へ入ベキ術モナク。初メノ悲憤
 コ引キ換ヘテ。最ト情々タル顔容セツ。
 終ニ其場ヲ立チ去リケリ。底デ此風雅先
 生此末如何成リ行クヘキ歎。并ハ次會ノ
 卷ニ揚グルヲ待テ聞キテカシ。

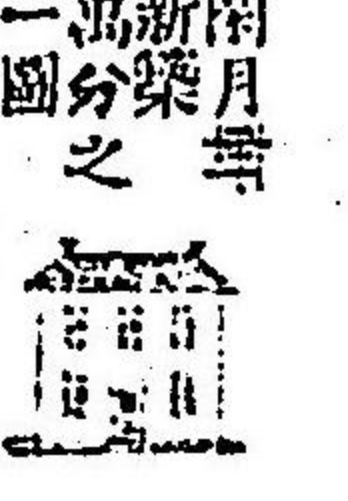
○招客石(お客を招く石并に妙奇○○石)
 ○三人寄れば何ぞの茶話
 「忠孝の解き方」(ポン)の流行
 「官員のこゝろゑ」以上三話
 ○滑稽政島一週奇譚

右の外猶諸君の御投書ありませうが先
 づ差向き調べかけた原稿がこれだけでは
 亦書を澤山入れますゆへ看官の中でも
 モシよほくした。おににてハ來春七
 種までかゝつても多分見てお仕舞ひなれ
 る事が出来まい歎と夫れが真にお氣の毒
 様と存て此第四會に限り五日の處を元旦
 早々から發します積りで準備最中なれバ
 前記の廉々を以て惠方から吉方まで御同
 好の諸君へも尙相變らず御吹聴を願ひま
 す何れ來陽へイ左様なら

○寄合話第四會の目錄(御披露)
 ○今昔江戸の新聞(禁酒の彦兵衛)
 ○古今佛々叢談(七福神)
 ○親父の小言百ヶ條
 「是」第三會の差引残り五十五ヶ條
 ○古今髮の結び分け(數件)
 ○落語(諸君の投書數件)
 ○狂詩(轉々曲の其外數句)
 ○俳句(春亂題讀込外數句)
 ○狂歌(亂題數首)
 ○狂句(亂題數句并びに見立物數句)
 ○情歌(鳥の名讀込吉原のさまし連)
 ○冠り付け(大騒ぎ)
 ○吹き寄せ(端唄并びに情歌の變調)
 ○傳記の名残り(淀屋辰五郎遺產の店卸)
 ○八百年間の夢裁判

一寸粹南誌但無入花五首限り
 一編
 右の天下滑稽家諸君と交際媒介の爲め

(狂詩)(狂歌)(狂句)(清哥)等と問答各其
 長技とせらるる所を蒐集し製本の上一冊
 宛拜呈致し候間何卒マツ郵便の税貳錢を
 氣張つて陸續御投寄願ひ上候其爲口上左様
 催主 長州 夢廼舎轉苦樂
 贊者 石州 雁廼家堂々士
 補助 武州 灣々堂喃漢子
 金玉 届所
 長門國 阿武郡 地福村 閑月軒



閑月軒

廣善之部

長梅外翁輯 長三洲先生校

古雷先生書

本書發賣元 萬字堂本店

古今異字叢

既發一冊真正價 卅錢○郵稅八錢

○但美製木版半紙本六十八丁余
右の一天萬上の君に御手本を捧げられし
長先生の家に積年の調査を以て選ばれたる
古今異類異形の文字を悉皆索引を以て輯め

五分四方

の一寸線

且字體の正確なる楷書にして凡曲尺
字宛を掲げれば一、一、と雖も一目瞭然
ならざるの無き實に古今未曾有の珍書なり
○今回其筋献納の上本月十日發賣相成且
新版と雖も追々諸所の御用にて數多摺立の
筈に付き可成り少しも御注文の早き方可然
と存じ此段諸君に御通知申上候○但し前記
郵税半額ハ弊店受持候得共郵便切手代用よ
て御送全の分ハ必らず全額御送全を乞ふ

新工夫輕便

馬喰町岳陽堂平尾贊平製造

懷中湯たんば

代價大形廿錢 小形十錢

夫れ温石の夏日の炎熱の如く湯たんばは冬
日の暖和の如し。夏日の恐るべく。冬日の愛
すべし。名醫某先生評して曰。温石何ぞソレ
湯たんばの効用に及ばんやト抑も此新工夫
懷中湯たんばは金属製の器にして中に温素
を保有せる所の薬水を入れ。専ら養生第一
携帯至便なるを以て安座歩行等の嫌ひなく
何時でも懷中したまはば。嚴冬を知らず
過し又寒夜臥床に入る時。直に肌を抱くか
或ハ被衾の間に置く時。奇温神身に適して
忽然睡夢の佳境に遊ぶの思ひあらしむ實に
方今衛生を貴む人の缺く可らざる無類品也
効用○疝氣持○瘡持○打身○節々の痛み○

通訴訟手續獨案内

○訴訟の手續き○訴答の文例○訴訟に係る入
費○訴訟用野紙の規則○訴訟入費償却の規
則○諸裁判所の種類及ビ權限○治安裁判所
○始審裁判所○控訴裁判所○大審院○勸解
○手續き○始審の手續き○控訴上告手續き
○執行の期限○負債者失踪後の訴訟○裁判
○告知の規則○私訴等の規則(附録)地所質
○入則○土地の規則○土地の賣買又ハ譲り渡
○物書入れ質の規則○分割取り扱ひ手續き○建
○但し紙數貳百一十シ余にて此正價十五錢
全國郵税六錢内半持(尤郵券代用ハ全額)
東京木挽町壹丁目六番地 萬字堂本店
○新葉於皆心の黒髮
○名吉原娼妓の離討
○行何れも今回新版にして高名なる芳年級
又ハ歌川千等の畫を入れたる珍らしき話也
賣捌 東京木挽町壹丁目 萬字堂本店
横濱太田町三丁目 萬字堂支店

夜間讀書家其他不働業の人の勿論總て常時
根氣を遣ふ人又ハ夜行○旅行長途○或ハ兩中
の滋氣を掃ひ雪中の防凍縮等皆用而可知也
「用法」尋常の湯丹保と違ひ少しも手數ハ懸
らず其用の方の器に書添えし故今茲に零す
○定價御送金の分ハ即時通運會社便に托し
全國遠近に拘らず貨先拂にて御届申上候

便利の爲當店 東京木挽町壹丁目 萬字堂本店
横濱太田町三丁目 萬字堂支店
但し東京横濱ハ諸新聞配達人の内にて
取次仕候者數多有之候間右兩地ハ御便宜
と以ては求めを乞ふ 萬字堂本店支店弘報
右湯たんばハ私共見世ても取次賣捌仕候
東京 飯倉五丁目第一番地 萬字堂安治郎
愛宕下三丁目三番地 萬字堂端次郎
東 丸の内三丁目四番地 萬字堂錫治郎
京 海老根三丁目四番地 萬字堂權次郎
東 海道相州戸塚驛貳丁目 萬字堂權次郎
○此外三府諸縣其(小町水)看板ある所の
勿論其他大小賣捌店數多有之今茲に略す

全國同盟發兌書房

東京○大坂○京都○彦根○
 名古屋○半田○岐阜○德島○
 姫路○廣島○豐岡○竹田○
 和歌山○津○神戸○長野○
 松本○上田○福井○金澤○
 長岡○新瀉○青森○弘前○
 秋田○若松○水戸○仙臺○
 石の巻○宇都宮○土浦○
 佐原○千葉○木更津○館山○
 甲府○前橋○高崎○浦和○
 八王子○小田原○湯本○
 伊香保○熱海○横須賀浦賀○
 厚木○横濱長崎鹿兒島高知○
 此外各地有名賣捌所數多あり
 餘白無さを以て店名茲に略す
 但し此類の書お求下さる節は
 萬字堂發賣の品と御尋奉願候

明治十六年十一月十三日御届
明治十六年十二月十日出版

東京府平民

編輯人

神田國藏

東京府神田區蟻塚町
十四番地

訂正人

菊亭香水

東京府平民

出版人

淺井橋治郎

東京府京橋區木挽町
壹丁目六番地

東京京橋區木挽町壹丁目六番地

東京發賣所

萬字堂本店

大坂備後町四丁目三番地

大坂發賣元

岡島支店

横濱太田町三丁目四十九番地

横濱發賣元

萬字堂支店

菊亭香水校閱

神田國藏編輯

面油 叢書

第四會

萬字堂本店

面白寄合話

毎月五日。一冊定價八錢。五冊前金卅六錢
十冊前金六拾八錢。全國郵税一冊一錢ツ、

◎此面白叢談の表題の如く總て古人今人に拘
をらず其當時の一茶話に過ぎざるものと雖も
或可笑味あり或ハ悟道教訓勸善懲惡の筋に
因り見るに隨ひ聞くに隨ひ又得る(原稿)に隨
て録するものなれば叢談の目的與た廣くし
て毎會如何もの頭をれ出るやを圖り知る可らざるハ我日本三千六百萬人の兄弟
居ながらにして其思ひ接する言を述べ傳げ又聞き集むるの主義なればなり然れば
に其各自既よ按じ或ハ之を他よ發言せんと欲する事ハ順次この叢談よ載せ又他
の心意說話をも見聞して更よ思ひ合する事と惜し或ハ十八寄れば十種百人寄れば
百類よ達ふ所のものも感じ若しくハ一駁進激杯も皆是會話よ要する所の功能よて
業既よ西洋文明の國よハ専ら中等社會よ流行するの書物なり故に今之を採し採て
以此二書冊に編むニ寄合話の名ある所以也乞ふ諸君ヨマます一雲願を垂賜へ



江戸の新聞

○結婚御三森 婚

嘉永四年(今より二十三年前)江戸高輪の
北町彦兵衛(當時四十六歳)と云ふ者
り其妻かたつと云ふ此彦兵衛ハ元たつ
方へ入夫よ成りし者あるが甚だしき酗酒
よて鬼角不筋の事など言ひ張り時々夫婦
喧嘩として間内中を騒げせ殊更よ向三軒
兩隣りの者杯ハ常時此夫婦喧嘩の爲めよ
仲裁となり折々天窓へボンコツの傍杖よ
喰せせらるゝ事もあり何時でも家主の清
三郎と云ふ者が立會の上で其間違ひし事

アノ一入殺しイ、
誰か来て早く助け
て下は「ヨ」と云ふ
所かれ口が利けな



「ウヌー何するら恐へて居や
アがれ。此三平二満女が

の始末と糺す杯よてこれが爲め他人の暇
を費やす事も亦少からねば遂に店立を
云付けられしより世間の風聞も悪くなり
て何所でも店を貸す者さへ無りしよ同助
内の女六と云ふ者と其養母の妙要と云ふ
者二人へ頼み自今以後堅く禁酒して身分
を慎むべき旨の證文を

差入申禁酒證文之事

一私儀是迄致大酒也角心得違而已仕居
候而世間之人様々の勿論自身番等之御
厄介又相成候事々屢々之有遂に舊來之
家も難住居候故實以て困難之次第よ

する事とのありしに此彦兵衛一人の養
女あり其名をおくまよ云ひ容儀頗る麗
えしく然も二八の花の顔はせよて町藝者
よ出せしゆへ南北品川總て阿娜美くしの
お熊よと云えぬ者ころ無りける然るよ
彦兵衛の酒を止めたる後何となく手持
無沙汰よて居たりしも元來好きなる物の
酒ばかりよて無く一件の方も大好物ゆへ
何時しに此くまよ戀慕の情を發して事よ
觸れ物よつてつつけて挑みければ。くまの
心よ五月蠅と思ひあけらる。流石養女の
悲しさの然ながら。素氣なくもてなし難

付貴殿方今般歎願候處格別之以御厚
意當助よ安住仕以様相成以段誠又難
有仕合奉存以就而者極り宜今日堅く
致禁酒證へ焼酎屠蘇味淋酒等之類よ
以共生涯一切禁物と可仕以若萬一相背
き候節如何様之御處置よても相受可
申此段天上天下八百萬神よ誓而以差入
申禁酒證文仍而如件

亥ノ正月一日 禁酒 彦兵衛(印)

妙要殿 文六殿

と云ふものよして漸く其町内の店よ居住

さう先一寸免れよ程よくわしらひ又折よ
ハ一笑百媚の場合もわりしと見え彦兵衛
の心で嗜しく「磁石の見當じやア無へけ
必らずキタよ相違なし」杯と早合点よて
嘉永四年四月九日の夜自分の旅人の体
出で立ちてお熊を連れ出し近所の旅籠屋
藤兵衛方へ態とお熊が案内にて行き(此
旅籠屋と云ふもの當時同所よて即ちち
妓樓にて賣女の飲盛女と稱し實ハ女郎屋
なり熊の内々町藝者と唱ふる者ゆへ此の
藤兵衛方の俗よ且那場とて花主先とて云
もの、由)儲くまよ共々飯食を爲し其座

敷み出でしおふでと云ふ酌取り女に外の
 用を云ひ付けて退らせし跡で「コレかく
 ま己が是まで其方を可愛ッて養ッて置く
 のも十千両の鐵ヶ獄じやねへが。ソレ
 魚心あれバ水心ヨ。大概承知でもあらう
 けれど何もこれが血を分けたと云者じや
 ア無しヨ。家に妻が居たかゞとて元より
 こりやア眞の床の間の置き物ヨ。又其方
 が可愛ららこそ己も影よかり日向も成て。
 妻に小言の一ツも云せず置くのヨ。本
 途よ其方が毎晩お座敷へ出てお歸ッて來
 るまでハマンガンギリともせず寝るの

も寝ずに必配して居る位だらうじやアね
 へり。ダカラヲ「杯と頼問な言草で種々様
 々口説て見たが中々之を聞べころ。外
 見は障らバ落ん風情なるも其實内心は下
 紐の締めく、り能き挨拶ゆへ迎も尋常の
 事での恥づしいとの氣味あらんと遂も帶
 を捕へて迫りければ「アア否殆よチ！堪
 忍してお呉なといヨ」ト聲を發して泣
 き出す折柄酌取り女のおふでも來りしり
 ば彦兵衛もア、残念と涙とこぼし（按ず
 るよ涙を垂らせし彦兵衛の悴でもあら
 う歎）先づ何氣なき昧よして其場をこま

かし程よく藤兵衛方の立出しが最早曉雲
 近き空をれば。妻のたつ。我良人と云ひ
 養女のくまが共歸りの遅さを案じて兩
 人の迎ひよ出でしが其途中よて行逢しに
 依り「アヤお前さん今お歸りですか。お
 くまも大層遅ひじやアないか。而して今
 まで何所よ」と云へとも彦兵衛の物をも
 云とす委細構えず先さへ戻りしり。龍
 の心は尙怪しく思ふより道くはくまよ向
 ひ。如何ある謂にて此如く隙取りしごと
 段々責め問ひし熊も亦隠し難く遂よわ
 りし事ども有り休は物語りしかバ龍の心

の中よて無論これの彦兵衛と密通せしよ
 相違ならんと疑ひながら又連歸りしとて
 る彦兵衛の又我が云ふ言をおくまが聞
 ざりしを憤はりて。如何様是の他は通じ
 合ふ男があるゆへ我意は從わざる事あら
 ん併し幸きめ見せたらんよ。又靡く心も
 出でなんと思ふより或る日たつを欺き云
 ひける様「何とあつ。其許の未よくも知
 るめへが。とうもアノおくまの身持が宜
 くねへので町内の風聞も悪し亦夫々出入
 先さへも響きよなッて仕舞よやア活計の
 妨害も成るから斯云ふ事よしふらどう

だらう」と耳又口寄せ。さ、やけべ。龍ハ
 偽りと知りながらも豫てよりくまが彦兵
 衛との既に通じ居りし事と思ひて其所爲
 の心よりらざる折柄なれば早速に同意し
 同年五月十七日よりおくまに猿股引を着
 せて唯小便の時の爲め淫門丈けの所ハ
 太き絹糸の綱を縫ひ付けて其紐の結び目
 又封印したり然るも翌十八日妻のたつハ
 浅草観音へ参詣せんと朝より出掛けたれ
 ど江戸の内よても南の果なる高輪より
 北の果なる浅草寺までハ路程も凡そ一口
 よ云へハ四里ども云ふべきを弟々と歩く

事ゆへ其夜五ツ時(今の午後八時)頃漸く
 歸りしよ。くまの「チャおッ母様お歸りで
 したか今日ハ一日お留守居して居りまし
 た所何分よも小便が問へて堪へる事も度
 々でありましたが迎もお歸りの程も分り
 ませんゆへ餘議なく前の封印を解て致し
 ましたヨ」「チャ致しましたヨとの何をいた
 したのだへ」と又更疑ひと生じ元來嫉
 妬の強き女なれば。扱ハ我が留守よ亦彦
 兵衛と密通せしものならん思へハ心
 憎しと思ひしが先づ其時ハ然ほを咎むる
 事もならず又証據もなき事ゆへ其儘で濟

せし彦兵衛ハ最前の禁酒と何時か打忘
 れて時々酒狂の上取り留めざる不筋の言
 を云ひ張り或る日又たつと喧嘩をせしゆ
 へ。たつハ豫て憎しと思ひしことなれば
 胸よ蓄へし怒氣一時よ發し種々の悪口を
 並べし上よ四月九日の夜よ歸りの遅かり
 し始末ハ勿論又此頃我が留守中よ前の封
 印を解さしも全く彦兵衛の所爲ならんと
 云争ひしかば彦兵衛も亦酒亂ゆへ大よ怒
 り速時よ此家を立去るべし然もなくバ目
 も物見せんとあり合ふ薪割を持て立上り
 しゆへ。たつハ餘りの事よ呆れはて且驚

さ此儘居らんハ打殺さるゝやも圖り難
 しと腹立紛れに親戚の何某方へ行き。敢
 て歸らざりければ。彦兵衛心に思ふ様ハ扱
 いくま女が先夜の次第をたつへ白地に云
 ハ聞せしよナ加之ならずして我が云言ハ
 聞かずヨシ。此上の要こうあれト熱醉
 せし酒氣ハ怒りと共に發したる事なれば。
 突然くまを捕へて二階へ引き摺り上げ。
 手計に有合ひし木切れを以て急所目鼻の
 別ちもなく打叩き打のめし尙其上に葛籠
 の細紐を以て後手に縛り又燈を立てさせ
 じと手拭をまるめて口中へ押込。崩れ解

し島田橋を糞掘みに搦んで二階中を挽き
 摺り廻しこれぞ固より婦人の髪の毛極強
 さもの奇しと云ふ如く却て己が腕の草臥
 る位なれハ「エ、面倒ナ」ト我が烟管に
 お熊の髪の毛をばからみ付け後手に縛り
 し細目に片足を踏み掛けて握りし烟管を
 所張れば向かい以て溜るべき。ミリ
 と血肉の付きし儘に引き抜けるゆへ凡そ
 七十篇程からみて過半抜き取りしに。く
 まの最早息も堪々になりし頃彦兵衛の十
 分酒の廻りし上の事なれば勞れて自然と
 手足もゆるみしがくまの其透を見合せ一

生懸命に逃れ出で此上の我が生命とて
 助るまじとなれど彼の儘彦兵衛の手に掛
 り死す時の後世迄も熊の如何なる所業あ
 りて死せし歟と人の疑ひを晴らすに由な
 し因て此事を一言なりと我が實家に告げ
 し上身を投げて死ぬころ宜ければ海邊と
 指して走る折から豫て様子を開き居りし
 町内の多藏と云ふ者これを見付けて後よ
 り追ひ付き引き止め「ア、コレノ」お熊
 さんアア待ちなヨエ、折悪ふ雨も降り出
 し此暗ひのに我身一人での浮雲ノ「イ
 エノ」壁へ死でも懸ひのせぬ「イヤ

「イヤ、夫れハ左右でも婦人の身で海邊の
 浮雲ノこれハ素たりあふないと云ふに
 「イヤ」ノと突き退け刎ね退け足を力に降
 ら雨も如何な厭ぬ婦人の念力ト云ふ程
 の騒ぎなりしが多藏の種々と論しただめ
 お熊が入水の覺悟をも止めて實家へ送り
 しよ此事程なく町方手先の探索と成て時
 の尹市府へ掛り合の者一同呼び出したの上
 同年十二月十三日彦兵衛の遠嶋。たつ
 押込。くまの急度叱り置くとの申渡しよ
 て其外掛り合ひ一統の掛ひなく事済みし

と云。俗諺よ色の思案の外とて實に智慧
 賢不肖共此情欲にの惑ひやすき凡人
 の免れざる所にて彼の法華經譬論品よも
 慾 欲 熾 盛 不 擇 禽 獸
 又一休和尚の作られし中にも
 三世諸佛出世門。一切衆生迷惑穴
 と云ふ通り眞に慎しむべきの色欲の道な
 ること勿論あれど彦兵衛の如き。酒乱の
 上とい申しながら非道にも亦其はたしき
 非道なれば其當時江戸中の讀み賣りとな
 りし事柄なり

古今佛々叢談 其日暮の大曹上

○七福神の話

無盡福。愛敬福。智慧福。長命福。寿眉福。勝軍福。田畠福。



斯く讀み上げし十の福を得ると云ふて昔時天竺の竹林精舎に佛が在ます時阿難尊者に毘沙門天王の功徳經を説れて即ち毘沙門天王を祈れば十の福徳を得るものと告げ玉ふ天王の身に金の甲を被り手に寶塔を



捧げ右の手に如意寶珠と云ふ物を取りて足よの藍婆の毗藍婆と云ふ二個の鬼とば跌へて普ねく佛法を守護し玉ふ。此金の甲の惡魔の軍を除かん爲め又左の手の寶塔の八萬四千の法藏十二部經の文義を具し又右の手の寶珠よりの無量の財寶を出して衆生に與へ玉ふ。抑も毗沙門と云ふの大論に梵語なりと云ひ或は秦にて多門と云ふ又金光明經の疏に須彌山北水精の山の王を毗沙門と云ひ素隱にも亦多聞(或ひは普聞とも翻す)と云ふ。底で唐の玄宗皇帝天寶九年に異國より軍兵を



差向けて安西と圖まんとする時玄宗皇帝の三藏法師に勅詔ありて宮中に祈念せしめられし時。天子の夢よ神兵五百餘騎打集まりしと云へり然るに果して安西の東北の角より神兵現れ鼓鞞を鳴らし天地も今や轉覆せんとする勢ひに異國の軍兵の大に驚き恐れて忽ち四方八方へ逃げ散りしが斯くて其城門の上に光明赫々として毗沙門天王現れ玉へバ籠城の官軍の勿論全國の人民とも始めて蘇生の思ひして萬歳と云ふ祝したりと云ふ此に於て天子の毗沙門が國の護りを爲し玉ひしと以

て天下一般へ勅命を降し國々の良之隅方
 又毗沙門の像を祭らせ玉ふ又我朝でハ聖
 德太子が守屋を追討せられし時此度官軍
 勝利を得たらんハ必らず四天王寺を建
 立すべしと誓ひ玉ふ。故に守屋亡びて後
 四天王寺を建らる。又楠正立ハ。子なき
 を以て志貴山の毗沙門天又祈誓を懸けし
 又或る夜妻の夢に帝の鎧を着たる人が口
 中へ飛び入るヨと見し後ハ懐胎したるハ
 即ち正成あり故に其幼名を多門丸と名
 けたりと云ふ。○次ぎハ辨才天の利生と云
 ふハ弘法大師の根本式も云ふ如く福徳

愛敬武勇才智其望みハ隨ツて成就せしめ
 玉ふとあり彼の神書の舊傳にハ四ツの島
 ありと載せたり其第一ハ安藝の嚴島。第
 二ハ近江の竹生島。第三ハ駿河の富士の
 御嶽。第四ハ相摸の江の嶋。之ハ奥州の
 金花山と添て是を本朝五の杭國と云ふ又
 舊記に曰欽明天皇の御宇六年乙丑年四月
 上ノ己の日に天照皇太神大殿へ出現し玉
 び欽明天皇に告げてのたまえく。吾ハコ
 ノ東の方梭編の國の柄野嶋あり。吾ハ天
 在てハ日の魂主地に在てハ富貴財寶の
 魂主なり今此國に在てハ五の杭の魂主辨

才天と名く。我れ四月初めの巳の日を以
 て天の福を持下り國土の人民に福を與へ
 十月初めの亥の日と以て天に歸り更ハ大
 千世界を養ふ故にソレ巳の日にハ我を迎
 へ亦亥の日にハ我に饑別せよ。天皇ハ我
 が後胤なりと告げ玉ふ因て此時に欽明天
 皇勅詔を以て神祠を相州江の島南方の渚
 に建玉ひ之と迎ひ奉り送り奉る時ハ五色
 の餅を備ふるを例とすと云ふ（但し此江
 の島が一夜の内に出来たと云ふハ人皇九
 代開化天皇六年四月の事にて其他嚴島竹
 生嶋御嶽金花山等夫々皆舊記ハ謂れども

今茲に略す。○次ぎに大黒天と云ふハ大
 福徳圓滿自在菩薩の事にして往古正覺を
 成して大摩尼珠王如來と號する由今も天
 竺の寺院にてハ麻裡に大黒天の像を三尺
 寸の彫て安置せり其形ハ金の囊を持ち
 小なる牀に座して一脚を垂れ常に油と以
 て之を拭ふゆへ色ハ眞黒にある（但し御
 一新以來日本の寺院にも安置する俗に大
 黒と云ふ者ハ其の形ハ其寺院ハ好みに依りて
 色々あると云ふが其色などハ先づ黒くな
 い方であると云ふ之ハ保証せず）諸前ハ
 大黒天が支那國へ出現されしハ大元ハ大

徳七年元比成宗帝比時戊亥方より現れ
て帝比祈りに應じ國を助け玉ふと云ふ尤
も其より前元貞元年大黒天に祈て軍よ大
勝利を得たる事ハ佛祖通載比第二十二卷
に載せて具なり又或る説に大黒とハ大己
貴比命なりと云ふて凡る七ツ比名がある
中よ(大國主比神)(大國玉比神)とも云へ
り尙委しくハ神代比卷比上に出て居る比
みならず現在伊勢に大國谷と云ふ所あり
て即そち大國玉を祭る所と云ふ故又大黒
と書くハ大なる誤りなり○夷三郎と云ふ
ハ大國玉比命比子よして事代主比命を

云ふ。七福傳よ命ハ出雲比三種崎よて魚
を釣り玉ふ姿を寫して祭ると云ふ。尤も
神代比卷にハ日比神。月比神。生れさせ玉
ひて次ぎに生れ玉比即そち三男なるを以
て三郎と名けたり然れども三才になりて
未だ脚も立ぬ程比不具なれば天比磐椽樟
船に乗せ風比任して吹き捨てたりとあり
(磐椽樟船とハ楠樹よて造りし船なり)然
るよ三郎殿ハ攝津國比濱邊よ流れ寄りし
ゆへ土地の夷共が拾ひ揚けて育て奉り后
同國西の宮の辰己よ方る田中と云ふ所よ
澳夷と云ふ社を建て祭りしと諸社一覽よ

もあり全体この惠比須と云ふハ日本の神
なるゆへ本朝通記よ推古天皇九年三月聖
徳太子が國家人民の爲めよ市場と設けて
物品を賣買する事を教へられたのが抑も
商(ハ)の元祖なり。故よ今も京坂筋の商人
ハ舊の正月よ西の宮よ參詣とる者絶へず
又今宮でハはせ袋よ錢蒲笥小判よ金箱を
篋の先へぶら下げて賣るハ殆ど東京の鷲
神祭の如く寶よ盛んなるものなりと云ふ
又十月惠比須講と唱へて祝ふも聖徳太子
比教へよ出し事と云ふ底で此夷三郎と云
ふハ只通り名よして實ハ蛭兒三郎と申し

奉るが本名ありと云ふ是よ由て之を觀れ
ハ商人の爲めよハ寶よ有り難ア一ハ神様
なり○次ぎよ布袋和尚を尋ぬれば景徳燈
錄第二十七よ布袋ハ明州奉化縣の人よと
て貞明三年丙子の三月岳林寺と云ふ寺の
東方よある盤石よ座禪として「彌勒眞の
彌勒。分身千百億。時々時の人よ示せとも。
時の人未だ識ず」と偈を唱へり安然と
して石よ化たとあり故よ布袋和尚ハ彌勒
の化身と人ハ云へり。和尚ハ平生布の袋
擔ッて常よ幼童を愛し且心廣く寛よして
何時も笑ふが性質ゆへよ福の神とこそハ

申せり○次ぎふ福録壽ハ風俗記の第二ハ
 宋の世ホてありしが京中ハ異形ある老人
 あり身ハ長三尺ホして其内半分ハ顔と頭
 ホて眼ハ秀で髯長ク身體ハ至ツて豊ある
 が日々京ハ町を歩きながらトヒトとして人
 の吉凶を示し若し錢と施す者ある時ハ其
 を受て酒を飲み又常々入ホ告て我ハ福と
 録と壽とを主とる聖人ありと口癖ホ云ハ
 后天子ホ聞へて召されし時世の吉凶を説
 き終ツて忽然空中へ登りしとあり此福録
 壽の傍らハ鹿と鶴と龜とが居る其鹿ハ録
 と表し鶴と龜とハ壽命の長さホ象りしを

以て福其中ホありと云ふ（先づ繪ホ畫け
 バサ）○次ハ吉祥天と云ふハ諸天傳ホ此
 の天女ハ極儂れたる威徳を具し玉ふと云
 ふ又金光明諸天の部ホ鬼子母神の女ホ
 りとあり又佛説ホハ吉祥寶生如來とて一
 切求る所○成就せずと云ふ事をし吉祥と
 ハ善さ幸ひと訓むゆへホよろしき日を吉
 祥日とも云ふとあり底で昔時江の諸世と
 云ふ人ありて年來吉祥天を祈りしホ或る
 時途上ホて布の袋が落ちてあるを拾ひ開
 き見れば中ホハ鬼の金齒の如き結構ある
 白米壹斗程あり。此諸世と云ふ人貧窮ホ

りしゆへ大ホ歡び携へて家ホ歸り家内中
 歡ばせんと朝飯ホ三升程炊て又夕方袋の
 口を開いて見れば矢張元の如く壹斗程わ
 るゆへ（當時ハ凡 永錢一貫文も出せば百
 俵程の米が貰へた世の中ホあれと）コイツ
 不思議と翌日ハ五升計り炊きし後ホ改め
 見れば又復元の通りあるゆへ是全く我信
 心が通じて吉祥天より惠まれしものあり
 と尙慮らず信心を以て多く貧窮中間へも
 施し追々年を経て遂ホ福徳長者ホ成りし
 と云ふ。此因縁ハ元亨釋書と云ふ書物ホ
 あります○サテ以上ホ並べ立てた七福神

の中で毘沙門天。吉祥天。辨財天。大黒天。
 此四天ハ天笠より始り。布袋和尚と福祿
 壽ハ支那より始り。惠比須ハ我日本より
 始る所ホして何れも福の神と云ふもの
 、此七福神ホ福を祈ればとて慎まねば成
 らぬ事三のり何とあれバ今日世を送る衣
 食住の三ツホして衣物ハ我身體を包みて
 寒暑を凌ぐが爲めある故又敢て飾らず。
 喰物ハ饑たる腸中を塞ぐ爲めあるゆへホ
 敢て美食をせず。家屋ハ風雨を蔽ふ爲め
 あるゆへホ敢て花麗あるを好まざる様ホ
 せねばあらぬ此三つを慎んで三族を愛し

み五福を得べく又六福をも行ふべし此三族との父の縁者。母の縁者。妻の縁者。是と三族と云ふ。父母兄弟子孫も亦此中あり又五福とハ(壽)(福)(康寧)(徳)(命)ありと洪範云へり又六福とハ(智)(仁)(聖)(義)(忠)(和)ありと周禮云職せたり。大寶積經云ハ無量生福の四法といふ事ありて一ハ施しを行。二ハ慈悲心を起し。三ハ有情を度し。四ハ忍辱の心を厚ふすどあり又仁王經云ハ七難即滅。七福即生。人民安樂。帝王歡喜」とあり。即ち七難の滅し止まる所を以て七福とす

るものおれバ今日難を避けて居れば即ち福が生じたる者と心得て善と云ふ意ありと知るがよろしい先當會ハ是でお仕舞

親父小言百條(但し前會の差引残り五十條也)

- 貧乏するとも苦にするをヨ
- 常時火事の覺悟のして置ヨ
- 他所の火事ハ人を遣れヨ
- 風吹く時に遠出するをヨ
- 火事の時の我欲を捨てろヨ
- 常に火口の道具ハ濕すをヨ

但しマツチがやくてよろし

- 朝夕家の中に水ハ絶すをヨ
- 年中臺所に鹽を蓄へて置ヨ
- 毎晩戸締りを忘れるをヨ
- 人の成る丈深更に歩くをヨ
- 寒さを去のぎ暑さも凌げヨ
- 他所へ泊りがけに出るをヨ
- 高見の所へ危く登るをヨ
- 雷の鳴る時仰ひて寐るをヨ
- 寒氣のさる時湯ハ入るをヨ
- 怪我と災難ハ先罰と思へヨ

- 物を拾たらば身ハ付るをヨ
- 冬の物を取り始末して置ヨ
- 夏の取り出して虫を干せヨ
- 若ひ時ハ寐ずおも稼げヨ
- 年が寄たからハ樂をしろヨ
- 折々の我が墓參りをしろヨ
- 長生するよハ運動をしろヨ
- 運動ハ手足共動かせろヨ
- 便りの無い人をバ働せれヨ
- 小商ハ物の常ハ直限るをヨ

- 風の吹く時の舟に乗るなヨ
- 何事も我身分相應ふしろヨ
- 身持女の大切ふして遣れヨ
- 産後の婦人の静よして置ヨ
- 小便の必き小便所へしろヨ
- 証據の無い事決して云ふなヨ
- 病氣と思はば仰山よしろヨ
- 人の心配をる時力を添ろヨ
- 惡ひ事も善々と祝ひ直せヨ
- 舊弊を悟たら廢止よしろヨ

- 人の舊習ハ舊習として置ヨ
- 我が誤あれバ速に改めろヨ
- 惡ひ違ひを我慢し通せなヨ
- 飽な人でも馬鹿にするなヨ
- 生涯我が口ハ町噂に述ろヨ
- 他の家への飯時往くなヨ
- 人の惡ひ事ハ人よ云ふなヨ
- 朋友ハ惡ひ事あらバ諫ろヨ
- 無音をしても人情ハ欠あヨ
- 人の歎く時の急で尋ねろヨ

- 人の喜ぶ時ハ緩りと行けヨ
 - 老少不定兼て用心をしろヨ
 - 高振るな諂ふな程能しろヨ
 - 無益の長談議をいたすあヨ
- 百ヶ條
 編者曰此外ハ又親父と叱る小言百ヶ條と云ふものを或るやんごとある御方より寄られたり今茲ハ餘白あければ退て掲載

古今髪結び分け 林 泰 翁

○大臣番

此大臣曲と云ふもの大古ハ有名の

畫工として鎌倉時代の景況ハ此髪形を
 畫きし事あれ
 とも開ハ俗ハ
 繪そらごと、
 も云ふべき歟
 抑も此結ハ形



ハ淺井亮政(亮政ハ大職冠 内大臣鎌足
 の後胤左大臣冬嗣苗裔三條大納言綱郷の
 孫大納言氏政長男淺井新左衛門尉より四
 代の孫として備前守亮政也) 永正三丙子
 年八月廿二日上阪治部大輔同じく兵庫頭
 等の國政善しからぬを責めて江州上阪の

城と乗取り。同年九月二十一日同國今濱の城を責め落し。尋で同月二十八日より小谷山小城郭を築き。江州の南北ある面佐々木の太軍を引き受けて勝利を得。終つて淺井郡を始め江北六郡及び美濃三郡の大守となりて天下小名を知られ。後天文十五年丙午七月十七日五十二歳にて逝去。其後久政及び長政之を嗣ぐとの事ハ淺井家の舊記(小見)永正十年義植將軍の江州に至りし時。冠り不合せ亮政自ら之を結びしを以て始めとすと云ふ。然れば此髪

ハ今より纔ハ三百七十二年程前にして其後此髪を結入人稀れありしが元龜三年九月朔日の織田信長小谷の城に入りし時。長政手箱の中小祖父亮政の肖像遺りし。因り其後天正五年。信長内大臣不任せられし節自ら大臣曲と稱して此髪と結せし由。一説ハ此髪を信長が結ひ始めしといふハ虚あり。又之を劇場道にて大將曲とも云へど。開ハ信長の大長曲と云ひしを誤り傳へしものありと云ふ。

○小姓曲
中興武家又ハ寺院等にて所謂小姓曲と稱

せしハ萬治三年江戸兩國橋東畔不回向院と建立せし時。寺院より集りし小姓等の中此風不結し者ありしが其より後武家ハ猶更寺院の小姓とも皆此髪不結ぬハ云く天和の頃不結してハ小姓とさへ云ハ此髪不結ハ終ハ慶應の末まで凡そ貳百十五年の間に少年の者ハ此髪行をれたり。



稱する四文錢や壹文錢「今の貳拾文と拾文」不常る錢の出来し前年(江戸)小諸大名が將軍家へ對して參勤交代を始むる時江戸の町人より大名屋敷へ出入りする者ハ小僧並に彼の御小姓ある者(即ち小姓曲)の風と紛らふしからぬ様ハ麻毛先きの五分計り後を結びしと云ふ又大坂商人杯の小僧不之を結せしハ其頃よりの事にて屋敷方へ出入りする者刷毛先き曲



竹の節

ト云ふハ寛永十二年(即ち寛永通寶と

りてハ失禮ありとて小供の髪ハ皆此如く
結ひしと云ふ而して見れば此髪とても纒
貳百五十年程前より始りし事と思える。
但し今より十年程前まで商家ハハメタ一
面ありしが現今でも萬が一見懸る事あり
不わらず(田舎ハ猶多かるべし)

○下げ髪

(伊勢物語)ハ「くらべこし振り分け髪も
肩過ぎぬ君あらずして誰か上ぐべし」ト
上古ハ男女とも皆髪を垂れしものにて又
(萬葉集)ハ角髪をみづらと讀めり右右
不分れたるが角の如くあるを云ふ即ち

角子あり云々又天武十一年四月の勅詔
ハ「自今以後男女悉皆髪と結よトあり。因
て考ふれば古昔ハ唯分けもあく垂れ髪不
せしあり。今茲
不現されしハ下
げ髪あれ共所謂
御主殿風の片は
づしと云ふ髪元あり(片外しハ元カラ
がい鬘おして笄と抜け下髪不あると云
ふ事第三會片外しの部不あり)此下げ髪
ハ寶徳元年足利義政征夷將軍と成りし頃
に始まりしと云然すれば今より凡る四百



四十年程前より行をれしあれど尙諸書參
照して見れば其時代よりも最も古く行は
れし様に思へる未だ其年代定かあらねば
猶よろしく調ふべし。猶又眉毛を作ると
云ふも古き事にして「眉引さハまゆずみ
引て眉を作るを云ふあり云々」ト仲哀天
皇の御時既に此譬へあれば其始めハ尙前
代よりの事あるべし(女重寶記)と云書に
「凡そ眉に種々の名あり。鬢眉。二日月眉。
忘れ眉。霞眉。大かた眉。さしたて眉(是ハ
幼き人に作る眉)から眉(是ハ年長けたる
人の作る眉)何れも眉ハ左より作り始む

べし右より作るべからず」トあり又さハ
墨ハ髮際に薄々と塗るなどとも見ゆ。此
下げ髪ハ婦人の眉ハ世の人ぼうと眉と
云ふと雖も本来鬢眉と云ふもの、由此眉
と引くよハ(古昔ハ引くとハ云えず鬢
と云へり)元の眉を鑷子にて抜き去りて
鬢さしかり中古ハ皆剃るのみよて其上に
眉と作りしと云ふ(余景な化粧だけ)
○茶茨樹
慶長元年朝鮮より故ありて渡りし年老ひ
たる婦人此形に結びしを大坂の或る老女
髪飴りの五月蠅とて此如く無造作に結び

て其毛先きと切り揃へしより之を朝鮮
と云ひし由なれど大関秀吉世を治めし頃
ハ茶道大に行

それしより之
を茶せん番と
名けたり如何



さま茶せん番と云ふ稱こそ却ッて至當
るが如し。慶長元年ハ今より貳百八十九
年前あれど元録の末ハ中絶して廢り。又
文化の頃(今より七八十年前)武家或ハ
商家の女隠居杯は結ぶものありしと云ふ
○達磨返し

だるまがへしハちやせんの形と大違ひ
實ハ近年の結び方なり。此髪ハ江戸にて
最も下等社會の

多き即ち八丁
堀など云へる所
の裏店社會にて
安永の頃より遊

民又ハ職人杯の女房なる者多く此風不結
ひし由なれば凡今より百十年程前あらん



一説ハ職人。遊人。又ハ博奕者など所謂露
越の錢ハ持たぬ(實ハ持ち得ぬ)者ゆへ彼
のおあしがあいの裏を結ふて内賣の天窓

○落語(おとしばあし)

○雨の降日も雪の夜も 通ひ馴たる大門
の。どハ他外の人の事だが己なんざア毎
日わくせくと忙しい言で日が昏れば膝吉
ばかり抱寝して女の味を最ら忘れる位
とハ何たら因果を事だらう。と歎ひた所
が仕方もあるし。是と云のもしキがねへ
ばかりだ。ッ、金が欲しい。紙幣が有たら飯
宅か高島町ハ云ふ及ばずツト東京の吉
原か根津邊りへ繰込のだが夫も是も矢張
遣付す。ア、いッスの事ハ臺所のお婆の
所へ。カンノノット出掛やうか。空腹い

お達磨反しの名を据えたりしトハ蓋し附
會の戯れおして採るお足らずと雖も何お
せよ下等の部分を免れざるハよろしく見
て以て之を知るべし

サテ後ハ上等の殿子曲。日本橋の船春

曲。田舎の小旦那曲(俗ハ久太平語助曲

とも云ふ)又婦人の部ハ奥方の切り髪。

近頃見かけぬ長船橋。山の神のお砂子。

などの類が。ぞろくぞろと出りけする

等なれど紙幅の狭く且専ら化粧最中を

れば開ハ次會お皆お近付きと致しませ

時の不滋物なした。ドン〜些時も早く。
 ヲ、左様だ「トのネリ〜と這出し。おさ
 んの寝顔を一寸覗きチャ〜鼻から提灯
 を出して大鼻さだ。オイ〜お竹どん。オ
 イ。チャイといふおサ「ムニヤ〜。エ、驚
 愕じたねへ。何だエ今時分「時お竹どん。
 己ハ今夜どうも寒くツて寝られねへが。
 如何だエお前の傍へ寝かしてくれねへか。
 五生だ。お願ひだ〜「オヤ氣障を男だよ
 馬鹿〜しい。人の寝所へ這入て来て一
 所不寝かしてくれも能出来た。御内義さ
 ん云告るよ」トきめ付られて今更何だ

く成るだらうと思ふから。丸ツきりはあ
 して仕舞ふ事ハ出来まい、、、、ヨ

迷甚 太樓

○コレ松さん 何故其様に鬱結で居るの
 だ。一体此春季に向ツて来たのに家には
 かり引籠で居るから悪いのだ。氣晴しハ
 是から新富へでも往やせう「オヤ誰かと
 思ッたら誰さんか。如何して劇場所の話
 じやア有やせん。悪くすると此土地ハ
 居られねへ始末サ「エ何いふ譯で「マア一
 通り聞ておくんあせへ。一体去年不景氣
 が續ひた上に此間親父の古ひ借金を願を

か面目あく「オイ〜左様怒ツてハ尙思
 案不能ハすで困るわナ。實ハ寝ぼけて長
 松の寝床と間ちがひたのだアな。ダカラ
 どうぞ此場ハ見遁して堪忍し玉へ。コン
 サ己の頭丈けハ此通り低頭平身で誤ツて
 居るから了簡して。サア底を放して呉れ
 と云ふのハ。お前も餘まり固過ぎるじや
 アねへかコレお竹どんモウ決して狐をト
 マドヒハ仕ねへから早く此を放して呉ね
 へヨ。チャ。オヤ〜お竹どん何故放し
 て呉れねへのだなア「甚さん宜く考へて
 お見を。モ一此所迄来たからハ到底長

れて。とう〜明日裁判所へ出あくツて
 ハあらないのサ。悪くまを付と身代限り
 になるかも知れぬ故毎日心配して夜の
 眼も寝ず不居るのさ。如何か能工夫ハ有
 ませんかねへ「成程うりやアお困りでせ
 うが随分通れる工夫も有ますテ。先今迄
 擔當させて置た代言人へ少し賄賂をお遣
 なせへ。急度容易に濟ますから「へエ其
 様能手術が有ますかね「ハテサ被告の沙
 汰も金次第といふからサ

麹町 花園亭花樂

○オイ甘兵衛さん 木挽町の萬字堂で風

流滋養糖と云ふ蒸菓子が出来た時ハ喰
りなしかへ「イヤ私ハ歯が無から食ま
せん」所が齒のさい人ハ猶齋だといふ
せ「へエ夫ハ如何云譯で」だッて表の看
版に齒無しのためと書て有た

神田 面徳齋

○イヤ結構の春で 何より目出度何時も
相替ら御豆の辻占で大慶至極でげすナ。
今日ハ何を成れまそ。ろろ〜暖氣にあ
ッて来たのでお樂の爲お土せ、りでほせ
へやすかね「イヤ是ハ入來しやい。天氣が
よいので大分春めいて参りましたゆへ何

とよ「へエ一随分プラチナ奴もある者だ
○ペンキ屋三 大層色血が悪いねエ。第
一瘦たせ」實に左様でせう。此節ハ毎日黒
うして居ますから

○寅公 今日ハ如何したのだ。かんじん
を差金を持って來ねへる「ナアニ實ハ昨日
の晩曲込だのサ

○此間出來た酒屋 で大層勉強するか
らお客が日に増す

右四件 經典舖 小僧

○素的な新聞種 とハ何の一件だ「ナニ
サ大きな聲でハ云ねへが。此寄合話の内

どなく心が面白談と成ましたから。一
寸話の種時で一生懸命サ「へ、エ成ほど
〜夫ハ嘸お樂しみ。何う能種がほせへ
やすかチ「イヤ大有〜。丁度東京の戸數
候ども有ます其中で先記した分が此位。
一寸の覽なさい」成程。桃栗三年。梨八年。
面壁九年。苦界十年と。ハテナ此梨八年ハ。
若や違ひハしやせんか「エ、コレハ鹿
相全く柿誤りで音

越後 雪の舍佳香

○時計屋の家 へ昨夜這入た強盜ハア
ノ亭主の見て居る前で女房さんと慰んだ

幕に居る一騎當千たる倉田の件だが。面
白兼談の混談筋が有から。日頃否に清す
意趣返しに。繪入へでめ投じて一番滅茶
〜に悪く記て貰ふといふのだナ。何
と能洒落だらう「ウンコヤ廢止にしませ
へ。此節ハ條例が嚴重ひうら「ナアニ此
様事に條例も何も入ものか「イヤ〜藍
江律に觸るといけねへ 淺州 宗園
○淺草〜 と乗合馬車の馭者が客を呼
あがら銀座と走ッて來たが。如何した事
か尾張町の交番所の角迄來ると馬が刎
出して。ガタン。ピシヤンのピン〜

くと轉倒り。傍に有た人力車を毀すや
ら太騒ぎの所へ早即椿公が出掛られて「
クヤク 馭者ハ居らんか我が預ッて居る
馬が暴廻るを傍に見て居るヤウ云事が有
か。手前ハ一休馬の口の取様と存せぬナ。
馭者ハ只馬計りと扱かふ職分でハ無いぞ
と叱られると馭者ハ笑ひながら「へい御
意のとほり夜分ハ少々。家内で女房も扱
ひます
京橋 五皿出来内
○コウ善孝 世の中ハ自由ならねハナア
「是ハ若旦那近頃承知が出来やせん御意
でござへやす。貴君の様な御膳上等の御

身分で自由小成ねハナア。杯とハ私し等
のやす飯聲。何ハ兎も有れ花魁からの電
報が有やしたつけ。マア若旦那。テキハ
餘程来て居やすせ。此間も或罷官のお招
ぎで一才参りやしたが。私しの面を見る
と突然ハ涙を一杯溜て怨めし想を顔を
しあがら「一寸善孝せん。密とお前はんホ
願ひ事有から些少待ておくんはい。ア
ノ木挽町の若旦那も。妾が是ほど思ふ心
を少しハ察して呉あはッても能でハあい
かねへ。眞不染々考へれば。夜毎く好
い客へも惚れた体をして勤大事と氣嫌を取

のも。情人に逢度ぐらゐが楽しみで愁い
思ひをするのだに。那人ハ蚤の糞はども
思ッて呉あえららないで此頃ハふツつり
と馴の道とハ。必定他外ハ益花が出来た
かも知はへんが。思へハ思ふ程寧心配
で三度のお飯食も咽へハ通らないで居ま
すのさ。ト忽体ない様を涙をばそくくと
翻して子「さうでも死でしまひたいと思
ひますのさ。夫又就てハ万一お前はんが
おのよ悪る事でもあつたら私の心の中を
熱々お話しやて。切て月よ一遍位ハ来て
下せる様宜しく言告して呉あえい。

とくれくもお頼みサ。モシ若旦那。テキ
があれ程思ッて居るのよ梨の礫とハ罪じ
やアござへせんや。月よ一遍位ハ行てお
遣すッたッて満更叱られもしやすめへよ。
サア少しも早くテキを自由よしておやん
なせへやしエへ。若旦那。コレサ好男
子。何を云ても御返辭なしとハお氣付
れや否子」と啗り付られ若旦那の呆れ返
ッて「へん誠は有難ふ存じます。嘸な様
やて居りましたらうヨ。チヤンチヤラ同
咲いヤア「へ、是ハ恐れ入やした子「マ
ア其様は嘘言ハ吐く可らず。實ハ昨夜

「キの許へ行ってふられ筋の大失策だ」「ハ
 ナ不思議な」只の鼠じやあんぬへしか子
 アハハハハハハ「イヤサろんな事ハな
 い筈で五世へやすが。ハ、ア分ツた。一寸
 痴話喧嘩でデレ合と来やした子。情夫で
 無くツちやア其様面白い樂み事御座
 やせん子」如何も困る。大當違ひだ。昨夜
 の比うく打解す。イヤ最う己程因果
 なるの無い世。家入居れば女房の尻に敷
 れ。娼婦の許へ行ハ亦尻を拖せられて夜
 を明すといふ。何しても冷たい尻の離れ
 ぬハ野郎だ。此で以て考へるのに如何も

男といふ者の悪く馬兒付と尻を喰ふやつ
 さ。底へ行てハ女達の尻よるる方だから
 餘程徳なものさ子「オット一概然ハ云
 れやすめへ。女達の一番好きな芝居でも俳
 優ハ尻にされる事ケ有やすからぬへ」「フ
 ム是ハ奇妙な事といふせ」「デモ若旦那
 去年新富座で劇した。松前屋の裁判の處
 を五體じやせ。ツル彼れでガスから

祝詞 (おいらひ)

高野 山人

新玉の。年たちかへる朝よハ。萬はるめく

「眠ひを」光り重ぬる初日の山。門よハ福を
 松餅り。千代も八千代の卍堂。尙も彌増す
 寄合の。はあしハ最と粹の翠。萬代迄の御
 世共よ。さかえ榮ゆる末廣の。其喜びを述
 べんと。餘白の端をかり染よ。尖もアア
 ぬ筆卸。左手も劇しハ蒸摺を。かいて祝も
 青臭く。ハ、ハア這ッて申す。露の右塗子

繁華。根津。花兮柳橋。月。放縱恨
 郎。極。驕。奢。二。妾。元。關。西。良。家。子。亡
 父。無。幾。母。亦。死。叫。號。呼。天。天。不
 應。零。落。空。淪。芳。原。里。朝。送。東。客
 夕。西。人。朝。劍。暮。暮。轉。傷。神。秋。雨
 春。風。容。易。過。妾。年。忽。迎。十。七。春
 一。夜。無。限。飛。魂。魄。樓。中。迎。得。蕭
 洒。客。相。看。如。舊。互。相。憐。慍。誓。天。盟
 地。固。如。石。妾。心。偏。似。泛。河。船。逐
 郎。浮。到。〇〇邊。妾。心。又。似。飛。空
 鳥。追。郎。舞。至。〇〇天。夜。夜。宵。々
 思。難。絶。觀。花。對。月。腸。欲。裂。昨。夜

狂詩

轉曲 京東 野花子稿

新橋。月兮品川。花。豪蕩。怨。郎。賞。

若水や一際清き初鏡 横濱 糸廼家はん